日本語 ALL–IN–1

インストレーション・ガイド

注文番号: AA-PR9QB-TE

改訂 / 更新情報: ALL–IN–1バージョン 3.2 の改定

オペレーティング . システム: 日本語 OpenVMS VAX バージョン 6.1 及び日本語 OpenVMS Alpha バージョン 6.1

ソフトウェア・バージョン: バージョン 3.2

日本ディジタル イクイップメント株式会社

1997 年 7 月

このドキュメントに記述されているソフトウェアの所有・使用・複製はディジタルもしくは認定業者により発行された有効なライセンス証書に準ずるもののみ許諾されます。

この版に含まれる情報は発行日現在正しいものですが、予告なしに変更されることがあります。

ディジタルイクィップメント社は、本書に記載されている方法による各製品の使用が、既存のもしくは、将来の特許権を侵害するような場合に、抗議をすることがあります。また、本書における記述は、関連機器やソフトウェアの作成、使用、販売を行うライセンス許可を当然に伴うものではありません。

© Digital Equipment Corporation Japan 1997.

All Rights Reserved.
Printed in Singapore.

以下は米国 Digital Equipment Corporation の商標です： ACMS, ALL–IN–1, CDA, DATATRIEVE, DEC, DEC Notes, DEClaser, DECmail, DECmate, DECnet, DECprint, DECstation, DECtrace, DECwindows, Digital, EDT, FMS, LA, LN03, LQP02, MAILbus, MailWorks, MicroVAX, OpenVMS, PATHWORKS, TeamLinks, ULTRIX, UNIBUS, VAX, VAXcluster, VAXmate, VAXstation, VMS, VMScluster, VMSmail, VT, WPS–PLUS, 並びに DIGITAL ロゴ

PostScript は、アドビシステム社の登録商標です。
Appletalk 並びに Macintosh は、アップルコンピュータ社の登録商標です。
MacWrite は、クラリス社の登録商標です。
HP と LaserJet は、ヒューレットパッカード社の登録商標です。
IBM 及びオフィスビジョンは、 International Business Machines 社の登録商標です。
1-2-3 と Lotus は、 Lotus Development 社の登録商標です。
Microsoft, MS–DOSと Windows はマイクロソフト社の登録商標です。
Motif は、 Open Software Foundation 社の登録商標です。
Vadic は、 Racal-Vadic 社の登録商標です。
WordPerfect は、 WordPerfect 社の登録商標です。
UNIX は、米国及びその他の国の登録商標で、 X/Open Company 社を通じて排他的にライセンスされています。

他の全ての商標並びに登録商標は、それぞれの保有者の財産です。

この文書は CD-ROM 上で使用可能です。

本書は，日本語 VAX DOCUMENT V 2.1を用いて作成しています。

目次

まえがき ix

1 インストレーションに対してあなたのシステムを準備する

1.1 インストレーション前作業のチェックリスト 1–2
1.2 オンライン・リリース・ノートを読んで印刷する 1–6
1.3 必須及びオプション・ソフトウェアをチェックする 1–7
1.4 導入アカウントのライセンスをチェックする 1–11
1.5 ライセンス製品公認キー (PAK) を登録する 1–12
1.5.1 新規導入前に日本語ALL–IN–1ライセンス PAK を登録する . . . 1–13
1.5.2 アップグレードの前に日本語ALL–IN–1ライセンス PAK を登録する 1–13
1.5.3 日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 で提供されるソフトウェアに対しライセンス PAK を登録する 1–14
1.6 オプション・ソフトウェアを導入する順序の例 1–15
1.7 インストレーション・プロシージャ要求 1–16
1.7.1 導入アカウントの要求 1–16
1.7.2 システム・パラメータ 1–17
1.7.3 現在のシステム・パラメータを表示する 1–21
1.7.4 システム・パラメータ値を変更する 1–22
1.7.4.1 AUTOGEN を用いてダイナミック・システム・パラメータを更新する 1–23
1.7.4.2 AUTOGEN を使用した非ダイナミック・システム・パラメータを更新する 1–24
1.7.5 システム・ディスクもしくは代替作業デバイス上のディスク・スペース 1–24
1.7.6 AWD として OA$LIB_SHARE ディスクを使用する 1–25
1.7.7 ターゲット・ディスク上のALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–25
1.7.8 ディスクへの論理名を割り当てる 1–26

1.7.9 新規導入: 日本語ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–28
1.7.10 アップグレード導入: 日本語ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–29
1.7.11 アーキテクチャ・サポートの追加: 日本語ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–29
1.7.12 ディスク・クォータの配置 1–30
1.7.13 導入イメージ 1–30
1.7.14 JFDVMSG.EXE 及び JFDVSHR.EXE イメージを導入する . . . 1–35
1.7.15 他のイメージを導入する 1–35
1.7.16 DCLTABLES.EXE の位置をチェックする 1–35
1.8 データ・ファイルの変換 1–36
1.9 アップグレード導入に対する追加タスク 1–38
1.9.1 カスタマイズされたデータ・ファイルをコピーする 1–39
1.10 MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 を使用する 1–41
1.11 リモート・メッセージ・ルータを使用する 1–42
1.11.1 リモート・メッセージ・ルータ・ノード上の日本語ALL–IN–1メールボックスを作成する 1–42
1.12 導入前システム・チェックを実行する 1–43
1.12.1 エラー・レポートのタイプ 1–44
1.12.2 全導入前チェック (PC) オプション実行を実行する 1–44
1.13 最終システム準備タスク: 新規導入 1–45
1.14 最終システム準備タスク: アップグレード導入 1–46
1.14.1 ALL–IN–1をシャットダウンする 1–46
1.14.2 メモリに導入されたファイルの削除 1–47
1.15 システム及びターゲット・ディスクをバックアップする 1–47
1.16 端末 1–48
1.17 導入に対する注意 1–48
2 インストレーション・プロシージャ: 新規、アップグレード及びアーキテクチャ・サポート
2.1 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ 2–3
2.2 アーキテクチャ・サポートの追加あるいはアップグレード 2–24
2.2.1 開始の前 2–24

2.2.2 アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ 2–25
2.3 自動的なインストレーション後の作業 2–33
2.4 マニュアルのインストレーション後の作業 2–34

3 インストレーション・プロシージャ: 追加言語
3.1 追加言語インストレーションのインストレーション・プロシージャ 3–2
3.2 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートの導入 3–9

4 インストレーション・エラーと障害
4.1 処置の必要のない一般的なエラー・メッセージ 4–1
4.2 処置の必要な一般的なエラー 4–1
4.3 処置の必要な日本語ALL–IN–1エラー 4–2
4.4 インストレーション後の障害 4–3
4.5 インストレーション障害 4–4
4.5.1 セーフティ・モードでのアップグレード・インストレーションの障害 4–4
4.5.2 非セーフティ・モードでのアップグレード・インストレーション障害 4–4
4.5.3 フル・インストレーション 4–5
4.5.4 不十分なダイナミック・メモリーを理由とする障害 4–5
4.6 IVP 実行中のエラー・メッセージ 4–5
4.7 IVP 障害 4–7

5 インストレーション後の作業
5.1 手作業によるインストレーション後の作業のチェックリスト 5–1
5.2 VMS クラスタ・システムのすべてのノードで日本語ALL–IN–1の起動 5–5
5.3 日本語ALL–IN–1サイト固有スタートアップ・プロシージャの作成あるいは変更 5–6
5.4 サイト固有のスタートアップ・プロシージャの変更 5–7
5.4.1 Digital X.500 および MAILbus 400 MTA を使用するためのインストレーション 5–8

5.4.2 メッセージ・ルータを使用するシステムのインストレーション 5–8
5.5 VAX クラスタ・システムでの DCLTABLES の置換 5–9
5.6 不要なファイルの削除 5–10
5.7 不足しているイメージのインストレーション 5–10
5.8 フォーム・ライブラリの再コンパイル 5–11
5.9 カタマイズ管理の使用で SITELINK31 のマイグレーション 5–12
5.10 アップグレード後カスタマイゼーションのマイグレーション 5–12
5.10.1 CART 問題解決プロシージャの実行 5–14
5.10.2 不要なファイルの削除 5–15
5.10.3 データ・ファイルへのカスタマイゼーションの再適用 5–16
5.10.4 アプリケーションのヘルプ・モジュールの置換 5–17
5.11 コード・レベルのカスタマイゼーションを統合するための日本語ALL–IN–1のリンク 5–17
5.12 RIGHTSLIST.DAT 内のエントリの確認 5–18
5.13 MAILbus 400 MTA を使用するリモート・メールの設定 5–18
5.14 メッセージ・ルータを使用するリモート・メールの設定 5–18
5.14.1 日本語ALL–IN–1のメールボックスを作成 5–19
5.14.2 メッセージ・ルータ・メールボックス・エントリの変更 5–21
5.14.3 VMSmail ゲートウェイの構成 5–21
5.14.4 メール・ディレクトリとしてメッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスの設定 5–22
5.14.4.1 メッセージ・ルータが同じ VMS クラスタにある 5–22
5.14.4.2 メッセージ・ルータが同 VMS クラスタ以外にある場合 5–27
5.14.5 リモート・メッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスのスタートアップ・プロシージャ 5–31
5.15 WPS–PLUS/VMS 文書から日本語ALL–IN–1への変換 5–32
5.16 WPS–PLUS論理コマンド・プロシージャ 5–34
5.17 ファイル・キャビネット・サーバ・ライセンスのインストレーション 5–34
5.18 CDA DOC_STYLE ファイルの移動 5–34
5.19 DECtrace を使用するためのファシリティ定義のアップデート 5–35
5.20 パーティション・ファイルへのユーザ登録 5–36

5.21 パーティション・ファイルの修正 5–36
5.22 CDA Converter Library の環境設定 5–37
5.23 追加言語インストレーション後の環境設定 5–38
5.24 問題点の通知 5–38

6 CART ツールの使用方法

6.1 概要 6–1
6.2 CART の実行内容 6–2
6.3 アップグレード前の CART 実行 6–4
6.4 変更後のALL–IN–1システムでの CART 実行 6–5
6.5 アップグレード後の CART 実行 6–5
6.6 マイグレーション・チェック・リスト 6–6
6.7 CART 報告の状態コード 6–11

A 日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 ディストリビューション・メディア

A.1 CD-ROM 配布キット (VAX もしくは Alpha 導入) A–1
A.2 磁気テープおよび TK50 キット (VAX アップグレード) A–3

B 日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 ファイル及びディレクトリ

B.1 日本語ALL–IN–1キット内のファイル B–1
B.2 ALL–IN–1以外のディレクトリに導入されるファイル B–1

索引

表

1–1 インストレーション前チェックリスト 1–2
1–2 必須及びオプション・ソフトウェア 1–8
1–3 導入アカウントに対するプロセス・アカウント・クォータ 1–17
1–4 要求される最小システム・パラメータ値 1–18
1–5 システム・パラメータ値を変更する 1–23
1–6 新規導入: ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–28
1–7 アップグレード導入: 日本語ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–29
1–8 アーキテクチャ・サポートの追加、アップグレードもしくは更新: 日本語ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース 1–30
1–9 VAX で要求される導入イメージ 1–31
1–10 Alpha 上で要求される導入イメージ 1–32
2–1 インストレーション・プロシージャに関する情報 2–2
2–2 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ 2–4
2–3 いつ VAX あるいは Alpha アーキテクチャ・サポートをインストール/アップグレードするか 2–24
2–4 アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ 2–26
3–1 追加言語のインストレーション・プロシージャ 3–3
3–2 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ 3–10
5–1 インストレーション後の作業 5–1
5–2 OpenVMS 固有スタートアップ・ファイルの変更 5–9
5–3 リモート・メールの設定作業 5–19
6–1 コンフリクト・レベル 6–2
6–2 状態コード説明 6–11

まえがき

本書の目的

本書を使用する前に、日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを読んで、日本語 ALL–IN–1™バージョン 3.2 導入を計画しなければなりません。

本書は、以下を行う方法を記述しています。

1. 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 インストレーションに対するシステムの準備
2. 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 のインストレーション
3. 日本語 ALL–IN–1マネージャがログインでき、ローカルでそれを使用できるように、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を設定する。

英語版ALL–IN–1 Installation: Language and Market Supplement

英語版ALL–IN–1 Installation: Language and Market Supplementが、言語及びマーケット・キットと一緒に提供されます。このガイドは、英語版ALL–IN–1バージョン 3.2 キットを導入することに対するディスク空間値を提供し、導入中に必要となる言語及びコンポーネントの情報を提供します。

前提知識

このガイドは、あなたが日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを読んでいると仮定しています。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入するには、 VMSINSTAL ユーティリティに習熟していなければなります。

日本語 ALL–IN–1管理文書セット

以下のガイドブックが日本語 ALL–IN–1管理解説書セットに構成します。

- 日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイド
- 日本語 ALL–IN–1インストレーション・ガイド
- ALL–IN–1 Installation: Language and Market Supplement
- 日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイド
- 日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイド
- 日本語 ALL–IN–1管理サーバ
- 日本語 ALL–IN–1リリース・ノート
- 日本語 ALL–IN–1アドミニストレーション・ガイド

専門用語及び本書で使用する表記法

以下のテーブルは、専門用語及び本書で使用する表記法を示します。

用語	説明
AIDA サーバ	日本語 ALL–IN–1分散アクセス・サーバ
日本語 ALL–IN–1	あなたが導入した日本語 ALL–IN–1オフィス・サービス・オプションにより提供される日本語 ALL–IN–1ソフトウェアを意味します。例えば、日本語 ALL–IN–1統合オフィス・システム (IOS) や日本語 ALL–IN–1コア・サービスです。
アーキテクチャ	OpenVMS™ VAX™システムと OpenVMS Alpha システムとを区別するのに使用される。例えば、非アーキテクチャ依存ファイルは、 VAX 及び Alpha システム双方で使用できるファイルです。
_AXP	Alpha システムに特有の日本語 ALL–IN–1ディレクトリを示すのに使用される。_VAX は、 VAX システム特有のディレクトリを示すにに使用されます。
Digital™ X.500	Digital X.500 ディレクトリ・サービス製品を意味します。
IOS	統合オフィス・システム。これは、製品の全コンポーネントを含む全ての日本語 ALL–IN–1ライセンスです。
MAILbus™ 400 MTA	MAILbus 400 メッセージ転送エージェント

用語	説明
混在アーキテクチャ・クラスタ	Alpha 及び VAX ノードを含む VMScluster™
日本語 OpenVMS Alpha	日本語 OpenVMS Alpha オペレーティング・システムを意味します。
日本語 OpenVMS VAX	日本語 OpenVMS VAX オペレーティング・システムを意味します。
TCP/IP	トランスミッション・コントロール・プロトコル/インターネット・プロトコル
TLC	OpenVMS に対するオフィス・システムに統合される日本語 ALL–IN–1への TeamLinks™コネクション
UCX	OpenVMS に対する DEC™ TCP/IP サービスを意味します。
VMS クラスタ	VMS クラスタに関する議論は、最低一つの Alpha ノードを含む VAX 及び VMS クラスタのみを含む双方の VAX クラスタ™システムを適用します。いかなる違いもテキスト中に述べられます。
WPS–PLUS	WPS–PLUS™ソフトウェア。

関連文書

以下の製品の解説書を参照する必要があるかもしれません。

- VAX メッセージ・ルータ及びそのゲートウェイ
- 日本語 DEC Notes™
- 日本語 OpenVMS システム管理
- MAILbus 400 MTA 及びそのゲートウェイ
- Digital X.500
- DECnet™/OSI

1

インストレーションに対してあなたのシステムを準備する

この章は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 インストレーションに対し、あなたがシステムに準備しなければならない作業を記述します。この章の情報は、全てのインストレーションに適用されます。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をあなたが導入する前に、日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを読まなければなりません。プランニング・ガイドは、以下をカバーします。

- 日本語 ALL–IN–1のこのバージョンの情報
- メール・システムのプランニング
- 導入を開始する前に、あなたが決定しなければならない全てのチェックリストを含む、導入プランニング

  加えて、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からアップグレードを行い、システムがカスタマイズされている場合、概要及び構築計画ガイドの中のカスタマイズされたシステムのアップグレードをプランニングするの章を読まなければなりません。この章は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 へあなたがアップグレードする前に、あなたのカスタマイズをチェックするのに重複確認と解決ツール (CART) の使い方を説明します。

この導入ガイドは、あなたが日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを読んでおり、全ての計画について決定しており、どのタイプの導入を実行するかを知っていることを前提にしています。

1.1 インストレーション前作業のチェックリスト

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入に対し、あなたのシステムを準備するには、表 1–1 にリストされたタスクを実行しなけれななりません。

表 1–1 インストレーション前チェックリスト

タスク	説明	追加情報
1	キット内容のチェック	どの配布キットが含まれているべきかを示すリストとして請求書 あなたのキットが破損していたり不完全だった場合は、 DEC の代理店にお問い合わせ下さい。
2	キットで提供されていれば、OpenVMS における日本語ALL–IN–1V3.2 最初に読んでくださいをお読み下さい	
3	導入及び日本語 ALL–IN–1メール・システムを計画していることをお確かめください。日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドは、日本語 ALL–IN–1と共に使用を計画しているメッセージ製品に対して行なわなければならない不可欠な構成タスクをリストにします。これらのタスクは、導入をスタートする前に完了されなければなりません。	日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイド
4	キットで提供されるオンライン製品リリース・ノートをお読み下さい。	リリース・ノートにアクセスする点に関する指示に関しては、第 1.2 節

(次ページに続く)

表 1–1 (続き) インストレーション前チェックリスト

タスク	説明	追加情報
5	正しいバージョンを持っているかをチェックして下さい • 導入に不可欠なソフトウェア • あなたが導入したいオプション・ソフトウェア	第 1.3 節
6	導入するアカウントに対し有効なライセンスを持っているかチェックする。	第 1.4 節
7	日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 License product Authorization Key(PAK) を登録してください。	第 1.5 節
8	日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 で提供された必須及びオプションのソフトウェアに対し、ライセンス PAK を登録してください。	第 1.5.3 項

(次ページに続く)

表 1–1 (続き) インストレーション前チェックリスト

タスク	説明	追加情報
9	インストレーション・プロシージャ要求をチェックしてください。 • 導入アカウント • システム・パラメータ • ディスク・スペース • 論理名 • 導入されるイメージ • DCLTABLES.EXE のロケーション	これらのパラメータをチェックし変更するための要求される値及び指示に関しては、第 1.7 節
10	アップグレード導入に関し、追加タスクを行なって下さい。	第 1.9 節.

(次ページに続く)

表 1–1 (続き) インストレーション前チェックリスト

タスク	説明	追加情報
11	全ての必須及びオプション・ソフトウェアが導入されており、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入開始する前に構成及び実行されているかをチェックしてください。	第 1.3 節は、必須及びオプション・ソフトウェアをリストします。加えて、日本語 ALL–IN–1と共にこれらの製品を使用するように計画している場合、 DATATRIEVE™もしくは ACMS™ を導入したいかもしれません。 メッセージ・ルータもしくは MAILbus 400 MTA 並びに Digital X.500 のような必須メッセージ製品の全てが、日本語 ALL–IN–1を導入する前に導入、構成、実行されていなければなりません。日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドをご参照。 オプション・ソフトウェアの導入の提案された順序に関しては、第 1.6 節をご覧ください。
12	Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA と共に新しい日本語 ALL–IN–1を導入する場合、これら製品が正しく導入され、構成されているかをチェックしてください。	第 1.10 節
13	同一の VMScluster にないリモート・メッセージ・ルータを使用している場合、追加タスクを行なってください。	第 1.11 節

(次ページに続く)

表 1–1 (続き) インストレーション前チェックリスト

タスク	説明	追加情報
14	システムが導入準備されているかをチェックするには、全ての導入前チェック (PC) の実行を実施することが推奨されます。全ての必須ライセンス、ソフトウェア、ディスク・スペース及び導入パラメータが正しくあなたのシステム上に設定されていることをチェックするには、導入中に PC オプションを実行します。	第 1.12 節
15	最終システム準備タスクを行ないます。	新規導入に関しては第 1.13 節及びアップグレード導入に関しては第 1.14 節
16	システム及びターゲット・ディスクのバックアップ	第 1.15 節

1.2 オンライン・リリース・ノートを読んで印刷する

オンライン・リリース・ノートは、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の言語及びマーケット・コンポーネントと共に提供されます。リリース・ノートは、マニュアルが印刷に出される前に使用可能でなかった情報を含みます。導入に関連する情報を含んでいるかもしれませんので、リリース・ノートを読むことを推奨します。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ソフトウェアを導入する前に、 VMSINSTAL プロシージャーを使用してリリース・ノートにアクセスできます。

リリース・ノートを読むあるいは印刷するには、以下を行ないます。

1. 特権 OpenVMS システム・マネージャのアカウントでログインし、以下のコマンド・ラインを入力して下さい。

```
$ SET DEFAULT SYS$UPDATE
$ @VMSINSTAL product device: OPTIONS N
```

ここでdeviceとは、そのデバイス上で、リリース・ノートの適切なバージョンがマウントされていることであり、productは、製品コードのことです。

リリース・ノートを読む、もしくはプリントするときは、インストレーション・プロシージャを終了させてください。リリース・ノートの一部分のみにアクセスする場合は、他のパートへアクセスするプロシージャを繰り返してください。

1.3 必須及びオプション・ソフトウェアをチェックする

表 1–2 は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入に必須のソフトウェアに関する情報を提供します。また、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットで提供されるソフトウェア、並びに、あなたが導入したいかもしれないオプション・ソフトウェアをリストします。

以下の定義が適用されます。

- 必須とは、あなたが日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入する前に導入しなければならないソフトウェアを意味します。必須ソフトウェアが導入されていないと、導入は失敗します。
- オプションとは、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の導入では要求されないソフトウェアを意味します。オプション・ソフトウェアは、追加機能を提供し、あなたが導入するソフトウェアは、あなたのサイトの要求に依存します。例えば、グループ会議を使用したければ、 DEC Notes を導入しなければなりません。

注意

あなたが導入したい必須ソフトウェア及びオプション・ソフトウェアは共に、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入する前に導入し、構成し、実行しなければなりません。

表 1–2 必須及びオプション・ソフトウェア

ソフトウェア製品	VAX バージョン	Alpha バージョン	キット提供?	注
日本語 OpenVMS VAX	6.1 またはそれ以上	-	N	VAX 上の導入に対し必須。 フル・アンテイラード・システムでなければなりません。
日本語 OpenVMS Alpha	-	6.1 またはそれ以上	N	Alpha 上の導入に対して必須 フル・アンテイラード・システムでなければなりません。
DECnet–VAX end-node	5.5	-	N	メッセージ・ルータを使用するリモート・メールに対し必須
OpenVMS Alpha のための DECnet	-	1.5	N	メッセージ・ルータを使用するリモート・メールに対し必須
OpenVMS のための DECnet/OSI	6.1 またはそれ以上	6.1 またはそれ以上	N	Digital X.500 または Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA を使用するシステムのために必須[1] メッセージ・ルータを使用するシステムのための代替オプション

[1]DECnet/OSI は、 Digital X.500 に対して必須です。 Digital X.500 を用いたメッセージ・ルータを使用するように移行を計画する場合、 Digital X.500 に対する必須ソフトウェアとして DECnet/OSI を導入しなければなりません。 Digital X.500 に対し、 OSI アプリケーション・カーネル、 OSAK™を DECnet/OSI アプリケーション・コンポーネントから導入しなければなりません。さらに詳しい情報については、 Digital X.500 導入解説書を参照して下さい。

(次ページに続く)

表 1–2 (続き) 必須及びオプション・ソフトウェア

ソフトウェア製品	VAX バージョン	Alpha バージョン	キット提供?	注
日本語 VAX フォームズ管理システム (FMS)[2]	2.4	-	Y	必須
日本語 DEC フォームズ管理システム (FMS)[2]	-	2.4	Y	必須
OpenVMS (UCX) もしくは UCX[3]をエミュレートする他の TCP/IP ソフトウェアのための DEC TCP/IP サービス	3.1 またはそれ以上	3.1 またはそれ以上	N	オプション クライアント・アプリケーションとコミュニケーションを取るのにTCP/IPネットワーク・プロトコルを使用したい場合、導入して下さい。
メッセージ・ルータ	3.3A	-	Y	オプション メッセージ・ルータを使用してリモート・メールを送信したい場合、導入し、構成してください。
メッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイ	3.3	-	Y	オプション 日本語 ALL–IN–1システムからメッセージ・ルータを使用して VMSmail ユーザへメールを送信したい場合、導入してください。

[2] 日本語VAX FMSもしくは日本語 DEC FMS 導入ガイド及びリリース・ノートをご覧下さい。 FMS で提供されるサンプル・プログラムを実行するために、システム上に少なくとも一つのコンパイラーがなければならないことにご注意下さい。

[3]UCX をエミュレートする他の TCP/IP ソフトウェアのサポートされるバージョンについては、日本語 ALL–IN–1ソフトウェア製品説明をご覧下さい。

(次ページに続く)

表 1–2 (続き) 必須及びオプション・ソフトウェア

ソフトウェア製品	VAX バージョン	Alpha バージョン	キット提供?	注
MAILbus 400 MTA[4]	1.4A	1.4A	N	オプション リモート・メールとして MAILbus 400 MTA を使用したい場合、導入し、構成してください。 Digital X.500 は、 MAILbus 400 MTA に対して必須であることにご注意ください。
Digital X.500[5]	3.0	3.0	N	MAILbus 400 MTA を使用することを計画している場合は、必須。 メッセージ・ルータを使用し続けるよう計画している場合は、オプション。
MAILbus 400 メッセージ・ルータ・ゲートウェイ	1.2	-	N	オプション メッセージ・ルータ・システムと MAILbus 400 MTA システムとの間でメールを交換したい場合、導入してください。

[4]日本語 ALL–IN–1は、リモート Digital UNIX ノード上に導入された MAILbus 400 MTA へも接続できます。

[5]DECnet/OSI は、 Digital X.500 に対して必須です。 Digital X.500 を用いたメッセージ・ルータを使用するように移行を計画している場合は、 Digital X.500 に対して必須なソフトウェアとして DECnet /OSI を導入しなければなりません。 Digital X.500 に対し、 OSI アプリケーション・カーネル、 OSAK™を DECnet/OSI アプリケーション・コンポーネントから導入しなければなりません。さらに詳しい情報については、 Digital X.500 導入文書をご覧下さい。

(次ページに続く)

表 1–2 (続き) 必須及びオプション・ソフトウェア

ソフトウェア製品	VAX バージョン	Alpha バージョン	キット提供?	注
日本語 DEC Notes	2.5	2.5	Y	オプション。 グループ会議を使用したい場合、導入してください。
CDA コンバータ・ライブラリ[6]	2.2	-	N	オプション OpenVMS VAX 上で CDA サポートをフルに得たい場合、導入してください。
DECwindows®[7]	-	1.2 またはそれ以上	N	オプション OpenVMS Alpha 上で CDA サポートをフルに得たい場合、導入してください。

[6]導入プロシージャは、 SYS$SHARE:CDA$ACCESS.EXE バージョン 1.7 に対しチェックします。
[7]導入プロシージャは、 SYS$SHARE:CDA$ACCESS.EXE バージョン 1.8 に対しチェックします。

オプション・ソフトウェアを導入する順序に関する情報は、第 1.6 節をご覧下さい。

日本語 ALL–IN–1と一緒に使用することができる製品の全てのサポートされたバージョンのリストについては、日本語 ALL–IN–1ソフトウェア製品説明をご覧下さい。

1.4 導入アカウントのライセンスをチェックする

導入を行おうと計画している導入アカウントは、有効な日本語 ALL–IN–1ライセンスを保有していなければなりません。これは、以下の一つを保有しなければならないことを意味します。

- キャパシティ・ライセンス
- 使用可能ユニットを使用した併行使用ライセンス

- ユーザの予約リスト中の導入アカウントを使用した個人ライセンス

  たとえば、システム・アカウントから導入を計画している場合、システムは予約リスト中にリストされていなければなりません。

導入アカウントは、全ての要求された機能が導入されるのを確保するため、最大使用可能ライセンスで、ライセンスされるべきです。

1.5 ライセンス製品公認キー (PAK) を登録する

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ソフトウェアを導入開始する前に、日本語 ALL–IN–1ライセンス製品公認キー (PAK) を登録しなければなりません。導入オプション・メニューから導入 (I) オプションの実行を選択することにより、あなたがソフトウェアを導入する準備ができていることを確認したときに、導入プロシージャーは、登録された日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ライセンスをチェックします。ライセンスが見つかなければ、導入は終了します。

新規導入に対する日本語 ALL–IN–1ライセンス PAK を登録するには、第 1.5.1 項をご覧ください。

日本語 ALL–IN–1ライセンス PAK を登録した場合、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットで提供される追加ソフトウェアに対し、自動的にライセンス PAK を登録する必須ソフトウェア (RL) オプションに対する登録ライセンスを使用することができます。第 1.5.3 項をご覧ください。

注意

そのソフトウェアを使用するつもりの全てのノード上に全てのライセンス PAK が登録されていることを確認しなければなりません。

日本語 ALL–IN–1キットに含まれていない製品、例えば、 MAILbus 400 MTA もしくは Digital X.500 に対しては、ライセンス管理ファシリティ (LMF) を使用して、マニュアルでライセンス PAK を登録しなければなりません。

1.5.1 新規導入前に日本語 ALL–IN–1ライセンス PAK を登録する

新しくライセンスされたノードもしくはクラスタ上に日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入する場合、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入する前に日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 に対するライセンス PAK を登録しなければなりません。ライセンスとメディアを一緒にオーダーした場合、ライセンス PAK は、キットと一緒に出荷されるかもしれません。他の方法では、あなたのライセンス注文に基づいた場所へ別々に出荷されます。ライセンス PAK は、ライセンス管理ファシリティ (LMF) を使用して、登録します。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ライセンス PAK を登録するには、以下を行って下さい。

1. システム管理者のアカウント、 SYSTEM へログインします。
2. 以下の方法の一つで、ライセンス PAK を登録をして下さい。
   - SYS$UPDATE:VMSLICENSE.COM プロシージャーを実行して下さい。情報に対してプロンプトが出たら、ライセンス PAK からの情報で応答して下さい。
   - ライセンス PAK 上の情報に対応する適切な識別子と共に、 DCL コマンド、 LICENSE REGISTER を発行してください。

LMF を使用する上での完全な情報については、OpenVMS ライセンス管理ユーティリティ・マニュアルをご覧下さい。

1.5.2 アップグレードの前に日本語 ALL–IN–1ライセンス PAK を登録する

アップグレード、または、このソフトウェアに既にライセンスされているノードもしくはクラスタ上のアップデート導入として日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入している場合、サービス・アップデート・キットに含まれているサービス・アップデート PAK (SUP) を登録しなければなりません。このノードまたはクラスタ上のこの製品に対するライセンス PAK または SUP を登録した場合、 SUP を登録する必要はありません。

サービス契約がないが、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 のアップデートを導入する場合、ライセンス PAK を得る方法の指示のためにディジタル代理店にお問い合わせ下さい。

1.5.3 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 で提供されるソフトウェアに対しライセンス PAK を登録する

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ライセンス PAK を登録した時、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を供給した製品に対するライセンス PAK を登録しなければなりません。以下のライセンス PAK は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入プロシージャーを使用して自動的に登録されます。

VAX	Alpha
日本語VAX FMS	日本語 DEC FMS
日本語 DEC Notes[1]	日本語 DEC Notes[1]
メッセージ・ルータ	-
メッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイ	-
CDA コンバータ・ライブラリ	-

[1]あなたの日本語 ALL–IN–1ライセンスが、グループ会議が含まれていない場合、 DEC Notes PAK は登録されません。

これらの製品に対し供給されるライセンス PAK は、どのプロセッサー及び何人ものユーザのためのものです。これらの製品の一つのために既にライセンスを持っている場合、それは、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットで供給されるライセンスで置き換えられます。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ライセンス PAK は、最初に登録されなければなりません。

ライセンス PAK を自動的に登録するには、表 2–2 の中のステップ 1 からステップ 5 に従って下さい。

導入により以下の質問がプロンプトされてきたら、RLを入力して下さい。

```
* Which installation do you wish to perform [1]:
```

注意

RLオプションを選ぶことは導入を開始しません。

導入プロシージャは、現在あるライセンスをチェックし、必要があれば、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットで供給されるソフトウェア製品に対する適切なライセンスを登録し、ロードします。次で、導入は終了します。

日本語 ALL–IN–1で提供されない必須もしくはオプション製品に対し、ライセンス管理ファシリティ (LMF) を使用してマニュアルでライセンス PAK を登録しなければなりません。

1.6 オプション・ソフトウェアを導入する順序の例

必須ソフトウェアを導入、構成した後、必須ソフトウェア製品を導入、構成して下さい。導入及び構成の指示に対しては、適切な製品解説書をご覧下さい。

以下の導入順序は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入前にオプション・ソフトウェアを導入することに対し提案されるものです。

1. ACMS™を導入して下さい。
2. 日本語VAX DATATRIEVE™もしくは日本語 DEC DATATRIEVE を導入して下さい。
3. メッセージ転送及びディレクトリ・サービス・ソフトウェアを導入し、構成して下さい。
   - メッセージ・ルータを用いた新規またはアップグレード導入に対しては、日本語 ALL–IN–1導入が開始する前に、メッセージ・ルータが導入され、構成され、実行していることをご確認下さい。リモート・メッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスを使用するよう計画する場合、カスタマイズされたメッセージ・ルータ構成がリモート・ディレクトリ・サービスにアクセスでき、あなたの計画決定によってディレクトリ・サービス及び転送サービ

スに対するメッセージ・ルータ例外レポートを構成できるようにしなければなりません。

- Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA を用いた新規導入に対しては、日本語 ALL–IN–1 ノードまたはクラスタ上の全ての要求されたコンポーネントを導入し、構成したことをご確認ください。 Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA は、日本語 ALL–IN–1を新規導入開始する前に、正しく導入されていなければなりません。日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドの中のMAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 計画の章をご覧下さい。

4. オプションのゲートウェイ製品を導入し、構成して下さい。
   - メッセージ・ルータで要求されれば、メッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイ。
   - MAILbus 400 MTA で要求されれば、 MAILbus 400 メッセージ・ルータ・ゲートウェイ。
   - MAILbus 400 MTA で要求されれば、 MAILbus 400 SMTP ゲートウェイ。
5. DEC Notes を導入してください。

1.7 インストレーション・プロシージャ要求

このセクションは、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入することに対する要求を記述します。必要があれば、値をチェックする方法やそれらを変更する方法を説明します。

1.7.1 導入アカウントの要求

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入するには、 SYSTEM アカウントを使用して下さい。

導入アカウントは、アカウント名に対する UIC と同じ有効な権利識別子を持っていなければなりません。 SYSTEM アカウントを使用している場合には, 権利識別子が UIC と同じでなければなりません。 UIC 及び識別子の値をチェックするには、以下を行って下さい。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:AUTHORIZE
UAF> SHOW/IDENTIFIER SYSTEM
```

表示される値は、システム・アカウントの UIC です。権利識別子を加えるには、セットアップされていなければ、以下を行って下さい。

```
UAF> ADD/IDENTIFIER SYSTEM/VALUE:UIC=[1,4]
UAF> EXIT
```

導入アカウントも、あなたが導入を実行できるのに十分なクォータを持っていなければなりません。表 1–3 が要求を要約しています。

これらの値は、導入には十分ですが、日本語 ALL–IN–1を実行するには適切でないかもしれないことにご注意ください。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の新規ユーザ・アカウントを作成する時、プロセス・クォータは、適切な値がセットされます。日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドをご覧下さい。

表 1–3 導入アカウントに対するプロセス・アカウント・クォータ

アカウント・クォータ	VAX	Alpha	注
BYTLM	64 000	64 000	
ENQLM	300	300	
FILLM	200	200	
JTQUOTA	1800	1800	導入が完了した後、JTQUOTA は値を実行しているノーマルのシステムに戻すことができます。
PGFLQUOTA	25 000	65 000 pagelets	

1.7.2 システム・パラメータ

表 1–4 は、要求される導入に対するシステム・パラメータ値をリストします。あなたのサイトで実行しているプログラムとアプリケーションの種類によりますが、ある設定に対しては、より高い値が必要かもしれません。必要ならば、少なくともこれらの値へパラメータを修正してください。

注意

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入するクラスタ内の各ノード上の OpenVMS システム・パラメータをチェックしなければなりません。

このセクションで与えられたシステム・パラメータ及びクォータに対する値は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 で指定されたものであり、ほとんどのシステムに対して容認できるものです。日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドは、日本語 ALL–IN–1に対するシステム・パラメータを設定する方法を記述します。

ダイナミック・システム・パラメータは、それらの後で、 (D) でラベルされます。ダイナミック・システム・パラメータを変更した後で、システムをリブートする必要はありません。他のシステム・パラメータに対し新しい値を設定する必要があれば、変更を有効にするためにシステムをリブートしなければなりません。

表 1–4 要求される最小システム・パラメータ値

システム・パラメータ	VAX	Alpha
CTLPAGES	100	100
GBLSECTIONS	250(新規) 50(アップグレード)	250(新規) 50(アップグレード)
GBLPAGES	20000(新規) 5000 (アップグレード)	35000(新規) 5000 (アップグレード)

(次ページに続く)

表 1–4 (続き) 要求される最小システム・パラメータ値

システム・パラメータ	VAX	Alpha
GBLPAGFIL	新規導入に対して: 1. アクティブ・ユーザーの数に 1 を加えて下さい。この値に対しては、上限 200 がありますので、値が 200 より大きい場合は、 200 を使用して下さい。 2. あなたの値に 16 を掛けて下さい。 3. 500 を加えて下さい。	新規導入に対して: 1. アクティブ・ユーザーの数に 1 を加えて下さい。この値に対しては、上限 200 がありますので、値が 200 より大きい場合は、 200 を使用して下さい。 2. 32 を加えて下さい。

(次ページに続く)

表 1–4 (続き) 要求される最小システム・パラメータ値

システム・パラメータ	VAX	Alpha
GBLPAGFIL	アップグレード導入に対して: 1. OA$DATA_SHARE の中の以下のファイル上のグローバル・バッファー[3]の数を一緒に加えて下さい。 • ATTENDEE.DAT • MEETING.DAT • PENDING.DAT • PROFILE.DAT 2. OA$SHARn の中の OA$DAF_n.DAT 共有文書属性ファイルの中にあるグローバル・バッファーの数字へステップ 1 から全体を加えて下さい。ここで n は、 A から E の文字です。 3. グローバル・ページへ変換するために、合計に 4 を掛けて下さい。 4. 500 を加えて下さい。	アップグレード導入に対しては: 1. OA$DATA_SHARE の中の以下のファイル上のグローバル・バッファー[3]の数を一緒に加えて下さい。 • ATTENDEE.DAT • MEETING.DAT • PENDING.DAT • PROFILE.DAT 2. OA$SHARn の中の OA$DAF_n.DAT 共有文書属性ファイルの中にあるグローバル・バッファーの数字へステップ 1 から全体を加えて下さい。ここで n は、 A から E の文字です。 3. グローバル・ページへ変換するために、全体を 4 で割って下さい。 4. 32 を加えて下さい。
LOCKIDTBL	アクティブ・ユーザーの数に 100 を掛ける	ユーザーの数に 100 を掛ける
MAXBUF (D)	5000	5000

[3]グローバル・バッファーの数を見るには、各ファイルに対し、 DIR/FULL を実施して下さい。

(次ページに続く)

表 1–4 (続き) 要求される最小システム・パラメータ値

システム・パラメータ	VAX	Alpha
MAXPROCESSCNT	アクティブ・ユーザーの数に 50 を加える。	アクティブ・ユーザーの数に 50 を加える。
RESHASHTBL	アクティブ・ユーザーの数を 50 に掛ける	アクティブ・ユーザーの数を 50 に掛ける
SCSNODE	DECnet ノード名と同じでなければなりません	DECnet ノード名と同じでなければなりません
SCSSYSTEMID	1024 が掛けられた DECnet エリア番号に、 DECnet ノード番号を加えてください	1024 が掛けられた DECnet エリア番号に、 DECnet ノード番号を加えてください
VIRTUALPAGECNT[4]	16 384 ページ[5]	250 000 ページレット

[4]ファイル・キャビネット・テスト及び修復プロシージャー (FCVR プログラム) を実行時、 VIRTUALPAGECNT に高い値を要求されます。

[5]この値は、おおよそ 250 000 ページレットと同じものです。

注意

多くの導入に対し、 CTLPAGES に対する値は、十分です。他のシステム・パラメータを変更するために、システムをリブートする計画をしている場合、導入期間中に 200 まで値を増加させることができます。

1.7.3 現在のシステム・パラメータを表示する

現在のパラメータ設定を表示するには、 SYSGEN ユーティリティを実行してください。

1. 全ての現在のシステム・パラメータ設定を表示するには、以下を入力してください。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:SYSGEN
SYSGEN> SHOW /ALL
```

2. 各システム・パラメータ設定を別々に示すには、以下を入力してください。

```
SYSGEN> SHOW parameter
```

ここでparameterは、検査したいパラメータです。

3. SYSGEN を止めるには、 Ctrl/Z を押して下さい。

フリー・グローバル・ページ及びセクションの数をチェックするために、以下のコマンドを入力して下さい。

```
$ WRITE SYS$OUTPUT F$GETSYI("FREE_GBLPAGES")
$ WRITE SYS$OUTPUT F$GETSYI("FREE_GBLSECTS")
```

フリー・グローバル・ページもしくはグローバル・セクションの値が、表 1–4 の中の値よりも小さい場合、システム・パラメータ設定を増やさなければなりません。システムで表示される値が、要求された値よりも大きい場合、これらのパラメータに対する値を変更する必要がありません。

1.7.4 システム・パラメータ値を変更する

システム・パラメータ値を変更するために、ファイル SYS$SYSTEM:MODPARAMS.DAT を編集して下さい。このファイルの中に作成するエントリは、あなたが修正しているパラメータに依存します。表 1–5 をご参照下さい。

非ダイナミック・システム・パラメータを変更・更新する必要がある場合、変更を有効にするためにシステムをリブートするようにスケジュールしなければなりません。システム・パラメータ値の後の (D) は、それらがダイナミック・パラメータであることを示します。

表 1–5 システム・パラメータ値を変更する

変更対象パラメータ	変更方法
SCSNODE SCSSYSTEMID	SYS$SYSTEM:MODPARAMS.DAT を編集し、新しいパラメータ値を指定してください。以下の形式のアサイメント・ステートメントを使用してください。 parameter = parameter-value ここでparameterは、あなたが変更したいパラメータの名前で、parameter-valueは、あなたが変更後として使用したい設定です。要求される値に対しては表 1–4 をご覧下さい
CTLPAGES GBLPAGES GBLPAGFIL GBLSECTIONS LOCKIDTBL MAXBUF (D) MAXPROCESSCNT RESHASHTBL VIRTUALPAGECNT	新しい値を指定するためにファイル SYS$SYSTEM:MODPARAMS.DAT を編集して下さい。変更される各パラメータに対し以下の形式の行を含ませて下さい。 ADD_parameter = increase-value ここでparameterは、変更したいパラメータの名前です。increase-valueは、このパラメータの設定を結果的に増加させたい値です。 例えば、 LOCKIDTBL の値を 60 増加させるには、以下を入力して下さい。 ADD_LOCKIDTBL=60 要求される値に対しては表 1–4 をご覧下さい。

システム・パラメータ値のいずれかを変更する場合、 AUTOGEN を使用して更新しなければなりません。第 1.7.4.1 項及び第 1.7.4.2 項をご覧下さい。

1.7.4.1 AUTOGEN を用いてダイナミック・システム・パラメータを更新する

ダイナミック・システム・パラメータ値を更新するには、以下を実施して下さい。

1. 以下のように AUTOGEN を実行して下さい。

```
$ @SYS$UPDATE:AUTOGEN SAVPARAMS SETPARAMS
```

2. 現在のシステムへの変更を書いて下さい。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:SYSGEN
SYSGEN> USE CURRENT
SYSGEN> WRITE ACTIVE
```

3. SYSGEN を止めるには、 Ctrl/Z を押して下さい。

新しい値を有効にするためにシステムをリブートする必要はありません。

更に情報は、 AUTOGEN ユーティリティを記述している OpenVMS マニュアルをご覧下さい。

1.7.4.2 AUTOGEN を使用した非ダイナミック・システム・パラメータを更新する

非ダイナミック・システム・パラメータ値を更新するには、以下を実施して下さい。

1. 以下のように AUTOGEN を実行してください。

```
$ @SYS$UPDATE:AUTOGEN SAVPARAMS SETPARAMS
```

2. 値をチェックして下さい。
3. 都合の良い時に、マニュアルでシステムをリブートして下さい。

注意

新しい値を有効にするには、システムをリブートしなければなりません。

更に情報は、 AUTOGEN ユーティリティを記述している OpenVMS 解説書をご覧下さい。

1.7.5 システム・ディスクもしくは代替作業デバイス上のディスク・スペース

このセクションは、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入中のキット作業デバイスに対するディスク・スペース要求を議論します。

キット作業デバイスに対するデフォルト・ディスクは、システム・ディスクです。システム・ディスクに十分なスペースがない場合、導入開始時に、代替作業デバイス (AWD) を指定できます。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 が導入される予定のディスク上のディスク・スペース要求もチェックしなければなりません。第 1.7.7 項をご覧下さい。

導入をセイフティ・モードもしくは非セイフティ・モードで実行できます。

注意

ディジタル社は、あなたがセイフティ・モード (デフォルト) で導入を実行することを推奨します。

セイフティ・モードで導入を実行する場合、ファイルが目標の場所にコピーされる前に、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットの全てがシステム・ディスクまたは AWD の上にリストアされます。これは、システム・ディスク上の日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットのトータル・サイズよりも大きいディスク・スペース要求を必要としていることを意味しています。

セイフティ・モードで導入するのに十分なディスク・スペースがない場合、非セイフティ・モードで導入を実行できます。この場合、目標エリアにコピーされる前に、各キット・セーブセットは、システム・ディスクにリストアされます。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 キットで供給される最も大きなセーブセットのサイズよりも大きいシステム・ディスク上のディスク・スペースが必要です。

1.7.6 AWD として OA$LIB_SHARE ディスクを使用する

OA$LIB_SHARE を置く予定の目標ディスク上に十分なスペースがある場合は、ディジタル社は、 AWD としてこのディスクを使用することを推奨します。このターゲット・ディスク上に導入する十分なスペースがある場合、導入時間は、約 20%削減できます。これは、日本語 ALL–IN–1ファイルの多数が、 OA$LIB_SHARE ディレクトリの中にあり、それゆえ、導入プロシージャーが、これらターゲット・ディレクトリへ COPY 操作よりもむしろ RENAME 操作を使用することによってこれらのファイルを移動することができるからです。

1.7.7 ターゲット・ディスク上のALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

以下の方法で日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入することができます。

- シングル・ターゲット・ディスク上へ導入する方法

- 別々のディスク上にALL–IN–1エリアを導入することにより、いくつかのターゲット・ディスクをまたがる導入

アップグレード導入に対して、導入プロシージャは、日本語 ALL–IN–1ディスク及び日本語 ALL–IN–1エリアに対するトップレベルのディレクトリが変わっていないこと及び日本語 ALL–IN–1ディレクトリ・ツリーが同じであることを仮定しています。ディレクトリのいくつかを移動した場合、アップグレード前にそれらを正しい場所に戻しておかなければなりません。

同じディスク上に一つ以上の日本語 ALL–IN–1エリアを導入することができます。これを行う場合、そのディスク上で要求されるトータル・スペースを見つけるために、二つのエリアに対し一緒にディスク・スペース値を加えて下さい。日本語 ALL–IN–1エリアに関し、更に情報が必要なときは、日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドをご覧下さい。

各ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース要求は、以下のテーブルの中でリストされています。

- 新規導入に対する表 1–6。第 1.7.9 項をご参照下さい。
- アップグレード導入に対する表 1–7。第 1.7.10 項をご参照ください。
- VAX もしくは Alpha アーキテクチャ・サポートの追加、アップグレードもしくは更新に対する表 1–8。第 1.7.11 項をご参照ください。

  これらの値は、追加言語に対するアーキテクチャ・サポートの追加、更新またはアップデートに対しても使用されます。

導入時、各日本語 ALL–IN–1エリアに対するターゲット・ディスクを指定するように求められます。

1.7.8 ディスクへの論理名を割り当てる

ディジタル社は、あなたが使用できるディスクへ論理名を割り当てることを推奨します。

注意

システム論理名との競合を避けるため、以下で始まる論理名を割り当てないで下さい。

- A1$
- OA$
- OA1$

導入の全てのタイプで、導入プロシージャーは、導入を失敗させる原因となるシステム及びプロセス論理名の競合をチェックします。導入開始前に競合をチェックすることができます。導入前チェック・オプション (PC) を全て行う方法を記述した第 1.12 節をご参照下さい。

論理名チェックは、 OA$で始まる現存する論理名に対するチェックを含みます。情報メッセージは、見つけられた名前をリストし、警告メッセージは、あなたにこれらの論理名が再定義されるかもしれないことw警告します。

論理名の競合が発見された場合、情報メッセージが表示されます。システム・テーブル内で競合している論理名が定義され、ほかのプロセスから競合している論理名が取り除かれ、次にチェックを繰り返します。競合している論理名が、導入プロセスで指定されている場合、問題を解決するため、導入をアボートさせ、次にリスタートさせなければなりません。導入は、論理名チェックが終わるまで、続行されません。

全てのアップグレードもしくは更新導入に対して、日本語 ALL–IN–1論理名がシステム・ルート・ディレクトリを指していないことをご確認ください。例えば、OA$LIB_SHARE は、 SYS$SYSROOT:[ALLIN1.LIB_SHARE]として定義されなければなりません。

SYS$SYSDEVICE が、各アーキテクチャに対し異なるので、混在アーキテクチャ・クラスタ上に導入する場合は、ディレクトリ指示内の SYS$SYSDEVICE を使用しないで下さい。

1.7.9 新規導入: 日本語 ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

表 1–6 は、システム及びターゲット・ディスク上に日本語 ALL–IN–1エリアを導入することに対するディスク・スペース要求を提供します。

要求されるディスク・スペースは、導入中に使用されるものです。導入が完了した時に使用される永久スペースは、若干少ないかもしれません。

注意

導入中にWPS–PLUSを統合するよう選択しない場合、共有ライブラリ・エリアのディスク・スペースを約 6000 ブロック削減できます。

WPS–PLUSを統合するが、関連付けられたポストスクリプト®ファイルを使用しないことを選択した場合、共有ライブラリ・エリアのディスク・スペースを約 3000 削減できます。

表 1–6 新規導入: ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

対象ALL–IN–1エリア	VAX	Alpha
システム・ディスク・ファイル[1]	31 000	71 000
共有ライブラリ・ファイル	69 000	100 000
共有データ・ファイル	15 500	15 500
共有エリア[2]	1000	1000
日本語 ALL–IN–1管理者アカウント[3]	1000	1000

[1]システム・ディレクトリへALL–IN–1共有ファイルを提供するために要求されるスペース。
[2]導入中に作成したい共有エリアの数で要求されるディスク・スペースを掛けて下さい。
[3]全てのユーティリティ・アカウント、例えば、 IVP 及び POSTMASTER を含みます。

注意

OpenVMS システム・ディレクトリのサブディレクトリ内に、日本語 ALL–IN–1管理者のアカウントを作成しないでください。

1.7.10 アップグレード導入: 日本語 ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

表 1–7 は、システム及びターゲット・ディスク上の日本語 ALL–IN–1エリアをアップグレードすることに対するディスク・スペース要求を提示します。

提示されるディスク・スペース要求は、導入時に使用されるものです。導入が完了時に使用される永久スペースは、若干少ないです。

テーブル中で与えられる値は、導入時のファイルを削除することを選択すると仮定しています。置き換えファイルを削除しないと選択する場合、表 1–6 で与えられる値を使用しなければなりません。

注意

導入時にWPS–PLUSを統合すると選択しない場合、共有エリアの中のディスク・スペースを 5000 ブロック削減できます。

関連するポストスクリプト・ファイルなしにWPS–PLUSを統合すると選択する場合、共有ライブラリの中のディスク・スペースを 2000 ブロック削減できます。

表 1–7 アップグレード導入: 日本語 ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

対象ALL–IN–1エリア	VAX	Alpha
システム・ファイル[1]	10 500	61 000
共有ライブラリ・ファイル	20 000	95 000
共有データ・ファイル	5000	5000

[1]システム・ディレクトリへALL–IN–1共有ファイルを提供するのに要求されるスペース。

1.7.11 アーキテクチャ・サポートの追加: 日本語 ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

表 1–8 は、システム及び日本語 ALL–IN–1ターゲット・ディスク上のアーキテクチャ・サポートを追加、アップグレードもしくは更新するためのディスク・スペース要求を提示します。

これらの値は、追加言語に対するアーキテクチャ・サポートの追加、アップグレードもしくは更新にも適用されます。

表 1–8 アーキテクチャ・サポートの追加、アップグレードもしくは更新: 日本語 ALL–IN–1エリアに対するディスク・スペース

対象ALL–IN–1エリア	VAX	Alpha
システム・ファイル[1]	31 000	71 000
共有ライブラリ・ファイル	37 000	73 000

[1]システム・ディレクトリへALL–IN–1ファイルを提供するのに要求されるスペース。

1.7.12 ディスク・クォータの配置

ディスク・クォータが使用可能なら、導入プロシージャーは、アカウントに対する十分なディスク・クォータ及び導入中に作成される識別子を加えます。

1.7.13 導入イメージ

あなたが日本語 ALL–IN–1を導入する前に、表 1–9 でリストされる共有イメージ及びメッセージが、あなたの VAX システム上に導入されており、表 1–10 が、Alpha システム上に導入されていることをご確認ください。要求されるイメージのリストは、表 1–2 の中でリストされる製品のバージョンで提供されることにご注意下さい。

表 1–9 VAX で要求される導入イメージ

製品	VAX 上で要求されるイメージ
常時要求される	SYS$SHARE:CONVSHR.EXE
	SYS$SHARE:CMA$TIS_SHR.EXE
	SYS$SHARE:DECC$SHR.EXE
	SYS$SHARE:FDLSHR.EXE
	SYS$MESSAGE:JFDVMSG.EXE
	SYS$SHARE:JFDVSHR.EXE[1]
	SYS$SHARE:LBRSHR.EXE
	SYS$SHARE:LIBRTL.EXE
	SYS$SHARE:MTHRTL.EXE[2]
	SYS$SHARE:PASRTL.EXE
	SYS$SHARE:PLIRTL.EXE
	SYS$SHARE:SCRSHR.EXE
	SYS$SHARE:VAXCRTL.EXE
	SYS$SHARE:VMSRTL.EXE
ACMS	SYS$SHARE:ACMSHR.EXE
CDA	SYS$SHARE:CDA$ACCESS.EXE
	SYS$SHARE:IMG$SHRLIB_NOX.EXE
	SYS$SHARE:DDIF$CC_VIEWSHR.EXE
DATATRIEVE	SYS$SHARE:DTRSHR.EXE (標準) 日本語 ALL–IN–1とリンクさせたい他の DATATRIEVE イメージを使用している場合、導入前にイメージが導入されているか確かめなければなりません。
	SYS$SHARE:CDDSHR.EXE
	SYS$MESSAGE:DTRMSGS.EXE

[1]これは、他の言語バージョン上で異なった名前を持てる言語仕様イメージです。

[2]あるプロセッサに対しては、論理名は、SYS$SHARE:UVMTHRTL.EXEを指すように定義されます。

(次ページに続く)

表 1–9 (続き) VAX で要求される導入イメージ

製品	VAX 上で要求されるイメージ
	SYS$SHARE:CDDEXC.EXE
DEC Notes	SYS$SHARE:NOTES$SHARE.EXE
Digital X.500	SYS$SHARE:DXD$DUA_SHR.EXE
	SYS$SHARE:DXD$XDS_SHR.EXE
MAILbus 400 MTA	SYS$SHARE:MTA$XAPI_SHR.EXE
メッセージ・ルータ	SYS$SYSTEM:MRTALK.EXE
TCP/IP	SYS$SHARE:UCX$IPC_SHR.EXE

表 1–10 Alpha 上で要求される導入イメージ

製品	Alpha 上の要求されるイメージ
常時要求される	SYS$SHARE:CONVSHR.EXE
	SYS$SHARE:CMA$TIS_SHR.EXE
	SYS$SHARE:DECC$SHR.EXE
	SYS$SHARE:DPML$SHR.EXE
	SYS$SHARE:FDLSHR.EXE
	SYS$MESSAGE:JFDVMSG.EXE
	SYS$SHARE:JFDVSHR.EXE[1]
	SYS$SHARE:LBRSHR.EXE
	SYS$SHARE:LCI$SHARE_TV.EXE
	SYS$SHARE:LIBOTS.EXE
	SYS$SHARE:LIBRTL.EXE

[1] これは、他の言語バージョン上の異なる名前を持つことができる言語仕様イメージです。

(次ページに続く)

表 1–10 (続き) Alpha 上で要求される導入イメージ

製品	Alpha 上の要求されるイメージ
	SYS$SHARE:LIBRTL_TV.EXE[2]
	SYS$SHARE:MTHRTL_TV.EXE[2]
	SYS$SHARE:PAS$RTL.EXE
	SYS$SHARE:SCRSHR.EXE
	SYS$SHARE:SECURESHR.EXE
	SYS$SHARE:SECURESHRP.EXE
	SYS$SHARE:SMGSHR.EXE
	SYS$SHARE:TIE$SHARE.EXE
	SYS$SHARE:VAXCRTL_TV.EXE[2]
	SYS$SHARE:VMS$IEEE_HANDLER.EXE
ACMS	SYS$SHARE:ACMSHR.EXE
CDA	SYS$SHARE:CDA$ACCESS.EXE
	SYS$SHARE:DDIF$CC_VIEWSHR.EXE
	SYS$SHARE:IMG$SHRLIB_NOX.EXE
DATATRIEVE	SYS$SHARE:DTRSHR.EXE (標準) 日本語 ALL–IN–1とリンクさせたい他の DATATRIEVE イメージを使用している場合、導入前にイメージが導入されていることをご確認ください。
	SYS$SHARE:CDDSHR.EXE
	SYS$MESSAGE:DTRMSGS.EX
	SYS$SHARE:CDDEXC.EXE
DEC Notes	SYS$SHARE:NOTES$SHARE.EXE
Digital X.500	SYS$SHARE:DXD$DUA_SHR.EXE

[2]これは、以下の例: LIBRTL_D56_TV.EXE のように典型的に翻訳する論理名です。

(次ページに続く)

表 1–10 (続き) Alpha 上で要求される導入イメージ

製品	Alpha 上の要求されるイメージ
	SYS$SHARE:DXD$XDS_SHR.EXE
MAILbus 400 MTA	SYS$SHARE:MTA$XAPI_SHR.EXE
TCP/IP	SYS$SHARE:UCX$IPC_SHR.EXE

あなたのシステム上にどのイメージを導入するかをチェックするため、以下のコマンドを入力して下さい。

```
$ INSTALL
INSTALL> LIST imagename
imagename;       Open Shar Lnkbl
```

imagenameは、ディレクトリで、チェックされるべきイメージのファイル仕様です。

イメージに対するエントリがない場合や識別子が正しくない場合、正しい識別子を使用するイメージを導入しなければなりません。

- SYS$MESSAGE:JFDVMSG.EXE 及び SYS$SHARE:JFDVSHR.EXE を導入するには、第 1.7.14 項をご参照下さい。
- その他のイメージを導入するには、第 1.7.15 項をご参照下さい。

導入するイメージに関し更に情報が必要な場合は、導入ユーティリティで記述されているマニュアルをご覧下さい。

1.7.14 JFDVMSG.EXE 及び JFDVSHR.EXE イメージを導入する

イメージ SYS$MESSAGE:JFDVMSG.EXE 及び SYS$SHARE:JFDVSHR.EXE が導入されていない場合、以下を実施してください。

1. そのエントリの前に現れる EXIT コマンドを取り除くために、 SYS$STARTUP:JFMSTARTUP.COM コマンド・プロシージャーを編集してください。

   ```
   RUN SYS$SYSTEM:INSTALL
   ```

2. コマンド・プロシージャー SYS$STARTUP:JFMSTARTUP.COM を実行して下さい。

1.7.15 他のイメージを導入する

以下のように他のイメージを導入してください。

```
$ INSTALL
INSTALL> CREATE imagename /OPEN /SHARED /HEADER_RES
INSTALL> EXIT
```

1.7.16 DCLTABLES.EXE の位置をチェックする

DCLTABLES.EXE が SYS$COMMON:[SYSLIB]ディレクトリ内にあることをチェックしてください。異なるディレクトリにある場合、導入開始前にこの場所へ移動してください。

DCLTABLES.EXE が正しい場所にあるかどうかをチェックするには、以下を入力してください。

```
$ INSTALL
INSTALL> LIST/FULL SYS$COMMON:[SYSLIB]DCLTABLES.EXE
```

正しい場所にない場合は、以下のようにそれを削除してください。

```
INSTALL> REMOVE DCLTABLES.EXE
```

正しい場所へ DCLTABLE.EXE を移動し、次にそれを置き換えてください。

```
INSTALL> CREATE DCLTABLES.EXE /OPEN/SHARED/HEADER_RES
```

1.8 データ・ファイルの変換

日本語ALL–IN–1 V3.1 から日本語ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする場合で、ALL–IN–1データ・ファイルをカスタマイズしている場合には、アップグレード・インストレーションの前にそれらのカスタマイズ・ファイルをインストレーションに影響されない安全な場所に確保しておく必要があります。日本語ALL–IN–1 V3.2 ではいくつかのデータ・ファイルが変更されました (例えば、PROFILE.DAT や MEETING.DAT など) 。

注意

日本語ALL–IN–1 V3.2 では、 FORMAT.DAT も変更されました。日本語ALL–IN–1 V3.1 から日本語ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする場合で、 FORMAT.DAT に独自のデータを追加して使用していた場合には、アップグレード・インストレーションの前にファイルを安全な場所に確保しておき、インストレーション後に新しい FORMAT.DAT に再度登録しなおしてください。

また、同様に File Definition Language (FDL) ファイルも変更されています。FDL ファイルはデータ・ファイルのフォーマットを新しいフォーマットに変換する際に利用されます。 FDL ファイルをカスタマイズしている場合やデータ・ファイルのレコード・レイアウトを変更している場合には以下の作業が必要になります。

- カスタマイズされた FDL ファイルを論理名 OA$LIB(OA$LIB_SHARE や OA$SITE_LIB_SHARE など) で参照されるディレクトリに格納してある場合は、アップグレード・インストレーションの前にファイル名を変更 (例えば、MEETING.FDL を MEETING.FDL_OLD にする) しなければなりません。

- データ・ファイルのレコード・レイアウトを変更 (新たにレコードを追加) した場合やキー構造を変更した場合には、データ・ファイルを元の状態に戻してからアップグレードしなければなりません。例えば、 PROFILE.DAT をカスタマイズした場合には、以下のようにしてアップグレードします。

1. カスタマイズされた PROFILE.DAT をインストレーションに影響されない場所にコピーします。

```
$COPY OA$DATA:PROFILE.DAT device:[directory]CUSTOM_PROFILE.DAT
```

2. カスタマイズ管理オプションを使用して、カスタマイズされた PROFILE フォームを別のエレメント (例えば、 CUSTOM_PROFILn) にコピーします。なお、コピー後はネームド・データの.FILE で指定されているファイル名を 1. でコピーしたファイル名に変更します。コピーされたエレメントは全てライブ領域に移動します。カスタマイズされた PROFILn フォームはライブ領域から消去しておきます。
3. PROFIL.FDL がカスタマイズされている場合には、ファイルを 1 でコピーしたディレクトリと同じディレクトリにコピーしておきます。カスタマイズされた PROFILE.DAT が使用されないようにしてください。
4. カスタマイズされた PROFILE.DAT を標準フォーマットに変換するために、以下のALL–IN–1コマンドを実行します。

```
< OA$CNV_CONVERT CUSTOM_PROFIL, PROFIL
```

   これにより新たに OA$DATA:PROFILE.DAT が作成されます。

5. アップグレード・インストレーションを実行します。
6. OA$DATA:PROFILE.DAT を 1. でコピーしたディレクトリと同じディレクトリにコピーします。

```
$ COPY OA$DATA:PROFILE.DAT device:[directory]BASE PROFILE.DAT
```

7. カスタマイズ管理オプションを使用して、ベース・エレメント PROFILn フォームを別のエレメント (例えば、 BASE_PROFILn) にコピーします。なお、コピー後はネームド・データの.FILE で指定されているファイル名 6 でコピーしたファイル名に変更します。また、コピーされたエレメントはすべてライブ領域に移動します。

8. PROFILE.DAT を以下のALL–IN–1コマンドで変換します。

```
< OA$CNV CONVERT BASE_PROFIL, PROFIL
```

9. 必要であれば、カスタマイズされた PROFILE.DAT のデータを CUSTOM_PROFIL から PROFIL に書き込みます。その際には、ALL–IN–1の FOR ファンクションや WRITE ファンクションを使用します。

```
< FOR CUSTOM PROFIL DO WRITE CHANGE PROFIL-
KEY=.%KEY,additional_field=.additional_field
```

1.9 アップグレード導入に対する追加タスク

現存の日本語 ALL–IN–1システムをアップグレードしている場合、以下を実施してください。

1. オブジェクト・ライブラリを見直してください。

   あなたがレイアード製品を導入した場合は、オブジェクト・ライブラリは更新されているかもしれません。日本語 ALL–IN–1は、以下のディレクトリ内に、二つのテンプレート.OLB ファイルを提供します。

   - OA$SITE_BUILD_SHARE:SITEOALIBR.OLB
   - OA$SITE_BUILD_LLV:SITEOALLV.OLB

   導入中に、これらのディレクトリ内に追加の.OBJ または.OLB ファイルがある場合、警告が表示されます。このディレクトリ内の追加オブジェクト・ライブラリまたはファイルが、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 と互換性があるかどうかをチェックして下さい。互換性がないオブジェクト・ライブラリやファイルを取り除いて下さい。これらのファイルは導入時に使用されないですが、導入後、日本語 ALL–IN–1を再リンクする必要がある場合、問題の原因になります。

2. 複数言語システムを保有している場合は、 OA$LLV*.EXE が SYS$COMMON:[SYSLIB]の中にないことをチェックしてください。 SYS$COMMON:[SYSLIB]の中にある場合、アップグレード前にこれらを SYS$SYSROOT:[SYSLIB]ディレクトリへ移動してください。

3. サイト・エリア内の全てのファイルが少なくとも、システム書き込みアクセス (S:W) を持っており、非サイト・エリア内のディジタル日本語 ALL–IN–1ディレクトリは、システム削除アクセス (S:D) も持っていることをチェックしてください。
4. カスタマイズされたデータ・ファイルのコピーを作成してください。第 1.9.1 項を参照してください。

1.9.1 カスタマイズされたデータ・ファイルをコピーする

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 は、以下のいくつかのデータ・ファイルの修正されたバージョンを使用します。

- ベース・エリア内:
  - A1CONFIG.DAT
  - OA$PC_NOTIFY.DAT (セカンダリ・キーが加えられています)
  - PROFILE.DAT
  - SM_ACCOUNT_TYPES.DAT (フォームは SMTEMPLATE です。)
- 言語エリア内:
  - FORMAT.DAT (新レコードも追加されています)
  - OA$PRINTSTYLES.DAT (フォームは SMPRINTERTYPES で、新しいレコードも追加されています)
- ユーザー・エリア内:
  - OA$USERPRINTERSTYLES.DAT (フォームは USERPRINTSTYLES です)
- 変換されていないが、レコード・レイアウトが変更されているファイル:
  - ATTENDEE.DAT
  - DOCDB.DAT
- 変換されていないが、レコードが変更されたか、新しいレコードが追加されたファイル:
  - CM$SDC

- CM$CART$RUNS.DAT
- OA$SM_UTILITY_MASTER
- X400COUNTRY_CODES.DAT

  このファイルは、追加レコードとともに新しいもので置きかえられています。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 は、該当ファイルを新フォーマットへ変換するのに使用される OA$LIB_SHARE の中のファイル定義言語 (FDL) の新バージョンも供給します。アップグレード後、古い FDL ファイルは要求されません。

データ・ファイルの新バージョンが日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 で供給されるので、アップグレード前にあなたがカスタマイズしたデータ・ファイルのコピーを作成してください。アップグレード前にデータ・ファイルをディジタル標準フォーマットに戻さなければなりません。

以下の指示では、データ・ファイル、 PROFILE.DAT は、例として使用されています。カスタマイズされたデータ・ファイルのコピーを作成したり、それらをディジタル標準フォーマットに戻すには、以下を行ってください。

1. 修正されたファイル、 PROFILE.DAT のバックアップ・コピーを、望ましくは、日本語 ALL–IN–1ディレクトリ構造の外に作成してください。

   ```
   $ COPY OA$DATA_SHARE:PROFILE.DAT device:[directory]CUSTOM_PROFILE.DAT
   ```

2. カスタマイズされた PROFILn フォームのコピーを作成するには、カスタマイズ管理を使用してください。例えば、カスタマイズされたフォームを CUSTOM_PROFILn へコピーし、.FILE 及び FORM_SET 指示がファイルのバックアップ・コピーの場所を記述するようにネームド・データを修正してください。以下の例は、修正されなければならないネームド・データの一部を示します。

   ```
   ;;.FILE;;
   OA$DATA_SHARE:PROFILE.DAT,OA$LIB:PROFILE.FDL
   ;;.FORM_SET;;
   PROFIL2,PROFIL3,PROFIL4,PROFIL5,PROFIL6,PROFIL7,PROFIL8
   ```

3. 使用中のカスタマイズされたフォームのコピーを作成してください。

4. カスタマイズされた PROFILn フォーム及び本番エリアから PROFIL.FDL を取り除いてください。
5. 修正された PROFILE.DAT を標準フォーマットへ変換し戻してください。これにより、一時的にあるデータが失われるかもしれませんが、あとで PROFILE.DAT のバックアップ・コピーから再度適用できます。PROFILE.DAT をディジタル標準フォーマットに変換し直すには、メニューの選択フィールドから以下を入力してください。

   ```
   <OA$CNV_CONVERT CUSTOM_PROFIL,PROFIL
   ```

   これは、アップグレード中に使用する OA$DATA:PROFILE.DAT の新バージョンを作成します。
6. 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 へアップグレードします。
7. カスタマイゼーションを再適用するため、第 5.10.3 項の中の導入後指示に従ってください。

1.10 MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 を使用する

MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 を用いて新しい日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 システムを導入することができます。これらの製品を使用して日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からアップグレードはできません。

新規の日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入に対しては、 Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA を用いて日本語 ALL–IN–1システム上に全ての要求される MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 コンポーネントが導入され、構成されており、追加セットアップ・タスクも完了していることを確かめなければなりません。日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイド内のMAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 プランニングの章にあるチェックリストをご覧下さい。

1.11 リモート・メッセージ・ルータを使用する

同じ VMScluster 内ではないリモート・メッセージ・ルータを使用している場合、以下を行わなければなりません。

1. リモート・メッセージ・ルータ・ノード上に、日本語 ALL–IN–1を導入しているノード (もしくはクラスタ) に対する日本語 ALL–IN–1メールボックスを作成して下さい。第 1.11.1 項をご覧下さい。
2. 日本語 ALL–IN–1を導入しているローカル・マシン上のネットワーク・ノード・データベース内のリモート・メッセージ・ルータ・ノードに対するエントリを作成してください。
3. 導入を開始する前にメッセージ・ルータがリモート・ノード上で実行中であることをご確認ください。実行されていない場合、導入プロシージャーが送受信プロセスをスタートアップさせる時、エラーが発生します。

1.11.1 リモート・メッセージ・ルータ・ノード上の日本語 ALL–IN–1メールボックスを作成する

リモート・メッセージ・ルータの使用を計画している場合、これを行って下さい。導入前にメールボックスを作成しない場合、導入プロシージャーが送受信プロセスを開始時、問題が発生します。

メッセージ・ルータは、導入開始前に実行し、構成されなければなりません。

日本語 ALL–IN–1と同じ VMScluster 内のノード上にあるリモート・メッセージ・ルータを使用している場合、日本語 ALL–IN–1メールボックスは、 A1 です。

リモート・メッセージ・ルータが同じ VMScluster 内にない場合、他の日本語 ALL–IN–1システムは同じメッセージ・ルータを共有しているかもしれません。メッセージ・ルータ・メールボックスの名前は、システムでユニークでなければなりません。例えば、メールボックス名、`mailboxname`は、`localnodeA1`であり得ます。ここで、`localnode`は、日本語 ALL–IN–1を導入するノードもしくはクラスタの名前です。`password`は、メッセージ・ルータ・メールボックスに使用したいパスワードです。導入中にこのパスワードをプロンプトで尋ねられます。

メッセージ・ルータ・ノード上で、日本語 ALL–IN–1メールボックスを作成するため、以下を実施してください。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:MRMAN
MRM> ADD mailboxname /PASSWORD=password /COMPLETE_MESSAGES /IGNORE_SENDER _
     /SERVICE_MESSAGES /SUPPRESS_DELIVERY_REPORTS
MRM> EXIT
```

メールボックスを設定するとき、/OWNER 資格を使用してはならないことにご注意ください。

1.12 導入前システム・チェックを実行する

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入プロシージャーは、全ての導入前チェック (PC) オプション実行を提供します。ソフトウェア導入前に全ての必要なシステム変更を行ったかを確認するために、ディジタル社は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入前にこのオプションを使用することを推奨します。

現存の日本語 ALL–IN–1システムが実行している間、このオプションを使用できますので、ユーザーにシステムにログアウトを依頼する必要がありません。

導入前チェックに対するオプションは、以下を許容します。

- 導入の段階を実行してください。その中であなたは質問に答え、導入プローシージャーがシステム・チェックを実行します。
- 導入プロシージャーにより生じたエラーをなおして下さい。
- 導入を実行することなく EXIT してください。

ここで可能なのは、導入チェックは、最初に致命的エラーを探す順序で行われることです。第 1.12.1 項は、発見されたエラーのタイプを記述します。第 1.12.2 項は、全ての導入前チェック (PC) オプションの実行を使用する方法を記述します。

1.12.1 エラー・レポートのタイプ

以下のタイプのエラーが発見されます。

- 致命的エラー

  これらは、導入プロシージャーを中止することなく、訂正することができないエラーです。致命的エラーは、以下を含みます。

  - マシンをリブートすることを要求するエラー
  - OpenVMS、メッセージ・ルータ及びメッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイもしくは、 Digital X.500、 MAILbus 400 MTA 及びメッセージ・ルータ・ゲートウェイを含む、必要不可欠なソフトウェアのアップグレードを要求するエラー。

- 非致命的エラー

  これらは、導入プロシージャーを中断することなく他のプロセスから訂正可能なエラーです。非致命的エラーは、以下を含みます。:

  - 導入されていない共有可能イメージ
  - 定義されていない論理名
  - ダイナミックに変更可能なシステム・パラメータ
  - 失われている必要不可欠なソフトウェア・ファイル
  - 十分でないディスク・スペース

1.12.2 全導入前チェック (PC) オプション実行を実行する

全導入前チェック (PC) オプション実行を実行するには、導入オプション・リストを使用したプロンプトが出るまで、表 2–2 の中のステップ 1 から 6 に従ってください。

以下を行ってください。

1. デフォルト・オプションを選ぶのに、リターンを押して下さい。

注意

このオプションを選ぶと、ソフトウェアを導入しません。

以下のメッセージが表示されます。

```
  The installation procedure allows you to perform the following actions:

  (I)   Perform the installation
  (PC)  Perform all preinstallation checks

* Which action do you wish to perform [I]:
```

2. PCを入力することにより、全導入前チェック (PC) オプションを選択してください。
3. チェックが導入プロシージャーを停止させることなく修正できるエラーで失敗した場合、続行する前に、エラーを訂正したいかどうか聞いてきます。

   はいと答える場合、導入チェック・プロシージャーは、他のプロセスからそのエラーを訂正できるように一旦止まります。エラーが訂正されると、プロシージャーを続行でき、チェックが繰り返されます。

   エラーを修正しないを選ぶと、プロシージャーを停止させるか、残っているチェックの実行を続けるかのオプションがあります。続行を選ぶと、導入プロシージャーは、全てのチェックが実行された時、終了します。

1.13 最終システム準備タスク:新規導入

新規に日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 導入のためにシステムを準備するには、以下を行って下さい。

1. 全ての必要なソフトウェアが導入され、構成され、実行されていることをチェックしてください。
2. 必要があれば、キュー・マネージャを開始して下さい。
3. システム・ディスク及びターゲット・ディスクをバックアップしてください。第 1.15 節をご覧下さい。

1.14 最終システム準備タスク:アップグレード導入

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からのアップグレード導入に対しては、導入開始前に以下のステップを実行して下さい。各ステップは以下のセクションで記述されます。

特権 SYSTEM アカウントから、以下を行って下さい。

1. 日本語 ALL–IN–1をシャットダウンして下さい。第 1.14.1 項をご覧下さい。
2. メッセージ・ルータが実行され、正しく構成されていることをご確認ください。
3. メモリー内に導入されているサイト・エリア内のファイルを削除してください。第 1.14.2 項をご覧下さい。
4. 必要ならば、キュー・マネージャを開始して下さい。
5. システム・ディスク及びターゲット・ディスクをバックアップしてください。第 1.15 節をご覧下さい。

1.14.1 ALL–IN–1をシャットダウンする

現在システム上にいるユーザーにログアウトを依頼し、日本語 ALL–IN–1をシャットダウンしてください。

注意

導入中、日本語 ALL–IN–1をバッチ・ジョブもしくはユーザーが使用してはいけません。さもないと、導入は失敗します。

導入が進行中の間、いかなる人も再度ログインを許容しないでください。OpenVMS ユーザーがシステム上に残ることを許容できますが、導入が進行中にユーザーが DCL HELP を使用しないことを確保することが重要です。導入中に DCL HELP ライブラリが更新される時、これはファイル・ロックの問題を起こしうるからです。可能なら、システム上に誰もアクティブ・ユーザーがいないことを確保することがより安全です。

以下の操作で、ALL–IN–1をシャットダウンしてください。

1. ALL–IN–1マネージャーの VMS アカウントにログインして下さい。
2. 以下のコマンドを入力して、ALL–IN–1を開始して下さい。

```
$ ALLIN1/USER=MANAGER
```

3. ALL–IN–1開始後、以下のオプションを入力する場合、ALL–IN–1シャットダウン・メニューが表示されます。必要な情報で各フィールドを入力し、ALL–IN–1をシャットダウンします。

```
MGT MSY SDA
```

1.14.2 メモリに導入されたファイルの削除

例えば、 SITE$OA.A1$SECTION のように、メモリ内に導入されているサイト・エリア内のファイルがある場合、導入を開始する前にクラスタ内の全ノード上のそれらを削除してください。メモリーからファイルを削除すると、ファイルがライト・ロックされるのを防ぎます。導入は、サイト・エリア内の全ファイル上の ACL をセットしますので、サイト・エリア内の全ファイルがシステム・ライト・アクセス (S:W) を持っているか確認しなければなりません。メモリー内に導入されているコード・レベルの実行可能イメージを削除していることをご確認ください。

1.15 システム及びターゲット・ディスクをバックアップする

ディジタル社は、以下の理由で、ソフトウェア導入前にシステム・ディスク・バックアップを行うことを推奨します。

- 導入中の危険なポイントでシステム・エラーが生じた場合、ALL–IN–1システムは、矛盾した状況になっている可能性があります。
- バックアップ・コピーが作業中のシステム・イメージを含み、それでシステム・ディスクを置き換えることを検証できます。
- 導入に必要かもしれない連続したフリー・スペースがもっとあります。

一つ以上のディスクに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入する予定がある場合、使用するであろうターゲット・ディスクをバックアップしてください。

あなたのサイトで確立されているバックアップ・プロシージャーをご使用ください。システム・ディスクのバックアップの実行の詳細については、 OpenVMS システム管理サブキットの中のバックアップ・ユーティリティの章をご覧ください。

導入のはじめで、 VMSINSTAL は、あなたのシステム・ディスクをバックアップしたかどうかをたずねてきます。

1.16 端末

日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 導入は、日本語端末が必要です。

1.17 導入に対する注意

日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 導入は、以下のケースで失敗します。

- VMSINSTAL 開始でオプション S を指定する。
- プロセスを実行している導入が、サブプロセスをもっている。

2

インストレーション・プロシージャ: 新規、アップグレード及びアーキテクチャ・サポート

この章では、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ベース、言語及びマーケット・コンポーネントをインストールするプロシージャについて説明します。下記のインストレーション例が提供されます。

- MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 を使用する Alpha システムに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の新規インストレーションの場合は、第 2.1 節を参照してください。
- 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からメッセージ・ルータ及びメッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスを使用する日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 へアップグレードして、インストレーションはメッセージ・ルータがリモート VAX ノードにインストールされている混在アーキテクチャ・ VMS クラスタ上の Alpha システムで実行される場合、第 2.1 節を参照してください。
- 混在アーキテクチャ VMS クラスタに追加アーキテクチャ・サポートを追加あるいはアップグレードする場合は、第 2.2 節を参照してください。

開始の前

下記の事項を完了するまでインストレーションを開始しないでください。

1. 日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを参照して、インストレーションを計画します。
2. 第 1 章で説明した準備作業を実行して、システムがインストレーションに用意されているかを確認します。

インストレーションで表示される各質問には、行の先頭にアスタリスク (*) が付いています。質問への応答方法がよくわからない場合には、疑問符 (?) を入力してヘルプを表示できます。

インストレーション・プロシージャでは、多くの警告メッセージや情報メッセージが表示されます。表示されるメッセージはすべて注意深く参照してください。表 2–1 でインストレーション中に必要としよう情報が提供されています。

表 2–1 インストレーション・プロシージャに関する情報

質問	答え
インストレーションの所要時間?	Alpha に 例として、 Alpha 4000-610 システムに全インストレーションを実施して、代替作業ディレクトリ (AWD) を使用して、 RZ28 ディスクにファイルをインストールする場合には、約 1 時間 15 分かかります。 VAX に 使用しているプロセッサによって、インストレーションが 1 から 6 時間かかります。ディスクのパーフォマンス・スペークが主要な影響を与えます。例えば、 VAX 4000-300 システムにのインストレーションに対して、ファイルが RF71 ディスクにインストールされる場合には約 3.5 時間かかり、 RZ26 ディスクにインストールされる場合には約 1.5 時間かかります。 新規とアップグレード・インストレーションの所要時間はほぼ同じです。
ヘルプの取得?	任意の時点で?を入力します。
製品識別子?	A1BJV032
自動的なインストレーション後の作業を実施する前に、インストレーションが失敗する場合には、どうしますか?	インストレーションを最初から再開始します。第 4 章を参照してください。

(次ページに続く)

表 2–1 (続き) インストレーション・プロシージャに関する情報

質問	答え
インストレーションの中止?	CTRL/Y を押します。 インストレーション・プロシージャがインストレーション・テンポラリ・ワーキング・ディレクトリにあるすべてのファイルを削除します。この作業は大変時間がかかることを注意してください。ターゲット・ロケーションに提供された任意のファイルがまだここで残させています。注意: VMSINSTAL は作成されたすべてのアカウント、識別子あるいはディレクトリ構造を削除しません。 イストレーションを再開始します。
インストレーションの再開始?	第 4 章を参照してください。

2.1 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

表 2–2 では、新規及びアップグレード・インストレーションに対するすべての導入ステップが表示されています。表で表示されたスクリプトは MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500 を使用する Alpha システムに新規インストレーション、またメッセージ・ルータを使用する日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からのアップグレード・インストレーションの例です。

ディストリビューション・メディアによって、インストレーション際にデープあるいはカートリッジの交換をプロンプトで表示します。

表 2–2 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
1	インストレーションに対するログファイルを作成します。問題が発生するかもしれないため、 DEC はインストレーションの記録の保存をお薦めします。ログをハード・コピー端末あるいはログファイルで保存することができます。ログファイルを保存する場合には、下記の通りに入力します。 `$  SET HOST 0/LOG=filename` ここで、filenameはログファイルの名前です。ログファイルはコマンドを入力したディレクトリで作成されています。ファイル名を指定しない場合には、省略名は SETHOST.LOG です。インストレーション・ログファイルは約 200 ブロックです。 コンソル管理ソフトウェアを動作している場合は、これでインストレーションを記録できます。詳しくはコンソル管理の解説書を参照してください。
2	ソフトウェア・キットが含まれているメディアをロードとマウントします。 磁気テープあるいはカートリッジからインストールする場合は、必要に応じて、磁気テープあるいはカートリッジを交換することをプロンプトで表示します。コンパクト・ディスク (CD) からインストールする場合は、交換の必要がありません。

3	SYSTEM アカウントから VMSINSTAL プロシージャを起動します。
	
	次のコマンドを入力します。
	
	`$ SET DEFAULT SYS$UPDATE`
	`$ @VMSINSTAL A1BJV032 device`
	
	代替作業デバイス (AWD) を使用する場合には、次のように入力します。
	
	`$ SET DEFAULT SYS$UPDATE`
	`$ @VMSINSTAL A1BJV032 device OPTIONS AWD=disk`
	
	deviceはディストリビューション・メディアをマウントする装置です。物理装置名または論理装置名を指定できます。論理装置名を使用する場合には、 A1$、 OA$、 OA1$から始まる名前を使用しないでください。A1BJV032は製品識別子で、diskは代替作業デバイスのロケーションです。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

4	システム・バックアップの確認
	
	`OpenVMS VAX Software Product Installation Procedure V6.2`
	
	`It is 19-MAR-1996 at 13:04.`
	
	`Enter a question mark (?) at any time for help.`
	`* Are you satisfied with the backup of your system disk [YES]?`
	
	システム・バックアップを確実に行っている場合には RETURN を押します。

5	ディストリビューション・メディアのロード (最初のボリューム)
	
	`Please mount the first volume of the set on device`
	`* Are you ready?`
	
	メディアを正確にマウントして、開始を準備しておき、Yを入力して確認します。

インストレーション・タイプ	進むステップ
新規	ステップ 6
アップグレード	ステップ 8

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
6	新規インストレーション:実行したいインストレーション・タイプに対する番号を入力します。 This is a LOCAL ALL-IN-1 V3.2 BASE kit Logical OA$IMAGE is not defined. No ALL-IN-1 image can be found using the default specification. Using the FULL ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types can be performed: (1) A 新規インストレーション of ALL-IN-1 V3.2 (RL) Register licenses for pre-requisite software * Which installation do you wish to perform [1]: 新規日本語 ALL–IN–1システムを導入する場合は、1を入力します。
7	新規インストレーション:インストレーションを開始したいことを確認します。 The installation procedure allows you to perform the following actions: (I) Perform the installation (PC) Perform all pre-installation checks * Which action do you wish to perform [I]: RETURN を押して、インストレーションを開始します。 継続:ステップ 10 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
8	アップグレード・インストレーション:実行したいインストレーション・タイプに対する番号を入力します。 This is a LOCAL ALL-IN-1 V3.2 BASE kit The current ALL-IN-1 image identification is ALL-IN-1 V3.1. Using the FULL ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types can be performed: (1) Upgrade of ALL-IN-1 V3.1 to ALL-IN-1 V3.2 (2) Add, upgrade, or update Alpha components for an ALL-IN-1 V3.2 system (RL) Register licenses for pre-requisite software * Which installation do you wish to perform [1]: ? 既存日本語 ALL–IN–1システムをアップグレードする場合は、1を入力します。 単一アーキテクチャ VMS クラスタで日本語 ALL–IN–1を動作する場合には、オプション(2)を提供しません。
9	アップグレード・インストレーション:インストレーションを開始したいことを確認します。 The installation procedure allows you to perform the following actions: (I) Perform the installation (PC) Perform all pre-installation checks (RC) Run conflict checking and resolution tool (CART) * Which action do you wish to perform [I]: RETURN を押して、インストレーションを開始します。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
10	ライセンス PAK が登録及びロードされているかを確認します。 `* Does this product have an authorization key registered and loaded [YES]?` RETURN を押して、継続します。

インストレーション・タイプ	進むステップ
アップグレード	ステップ 11
新規	ステップ 12

11	アップグレード・インストレーション:ファイルをパージしたいかの指示 `* Do you want to purge files replaced by this installation [YES]?` ファイルをパージする場合には、 RETURN を押します。
12	DATATRIEVE を日本語 ALL–IN–1と統合するかの指示 `DATATRIEVE can be integrated into ALL-IN-1. On VAX systems with Deferred image activation enabled the DATATRIEVE image will be deferred. If you use the standard DATATRIEVE image SYS$SHARE:DTRSHR.EXE then you can select to dynamically activate DATATRIEVE. You will still be able to use DATATRIEVE within ALL-IN-1, but you will avoid any performance impact of having it physically linked with the ALL-IN-1 image.` `* Do you want to integrate DATATRIEVE with ALL-IN-1 [NO]?` DATATRIEVE を統合したくない場合は、 RETURN を押します。 DATATRIEVE を統合したい場合は、Yを入力します。統合したい DATATRIEVE イメージ名を要求するプロンプトが表示されます。標準 DATATRIEVE イメージ、SYS$SHARE:DTRSHR.EXE、を使用している場合には、日本語 ALL–IN–1を起動する際に DATATRIEVE を同時に起動するかと質問します。 DEC がこれをお薦めします。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
13	WPS–PLUSを日本語 ALL–IN–1と統合するかの指示。WPS–PLUSが含まれるライセンスを持っていない場合には、この質問が表示されません。 If you wish to have the WPS-PLUS editor available, answer YES to the following question. If you do not wish to install the WPS-PLUS editor, answer NO. NOTE: o If WPS-PLUS is not installed then the WPS-PLUS linguistics aids (SPELL CHECKER and THESAURUS) and the WPS-PLUS SORT and MERGE processing functionality will not be available. o You will be able to do an ALL-IN-1 update installation to add WPS-PLUS at a later time, should you choose not to install it now. * Do you want to install WPS-PLUS with ALL-IN-1 [YES]? WPS–PLUSをインストールする場合は、 RETURN を押します。そして、グラフィックス及びページ・オーバーレイの例をインストールしたいかと質問します。 %A1-I-WPSLINK, The WPS-PLUS editor will be installed and linked with ALL-IN-1 This kit contains a library of Encapsulated PostScript(R) graphics and PostScript(R) Page Overlay samples. Their total size is approximately 3,000 blocks when they are copied to the ALL-IN-1 library directory. * Do you want these graphics copied to the ALL-IN-1 library directory [NO]? ファイルをコピーしたくない場合は、 RETURN を押します。 ファイルをコピーしたい場合は、Yを入力します。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
14	ACMS を統合したいかの指示 If you wish to interface with ACMS, answer YES to the following questions. NOTE: o ACMS must be installed before ALL-IN-1. o If you answer YES and the relevant ACMS files are present then the interface to ACMS will be built. If the files are not present, then you may either continue the installation without linking with ACMS or abort the installation to correct the problem. * Do you want to integrate ACMS with ALL-IN-1 [NO]? ACMS を統合したくない場合は、 RETURN を押します。 ACMS を統合したい場合は、Yを入力します。
15	複数言語システムを構築するかの指示 If you wish to use more than one ALL-IN-1 language, answer YES to the following question. * Do you want to build a MULTI-LANGUAGE system [NO]? 複数言語システムを構築したくない場合には、 RETURN を押します。 追加言語の導入を計画する、及び複数言語システムを構築したい場合には、Yを入力します。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
16	省略時日付形式の選択 ALL-IN-1 allows you to select a default date format for each language you have installed. This will become the default ALL-IN-1 date format for each user (on a per language basis.) This may be changed by each user through the Set Working Conditions option on the User Setup Menu. Alphanumeric Date　Numeric Date 1 DD-MMM-YYYY　MM/DD/YY　(Standard Default) 2 DD-MMM-YYYY　DD/MM/YY 3 DD-MMM-YYYY　YY/MM/DD 4 YYYY-MMM-DD　MM/DD/YY 5 YYYY-MMM-DD　DD/MM/YY 6 YYYY-MMM-DD　YY/MM/DD 7 ***** Reserved (Means system default) ***** 8 YYYY-MM-DD　YY/MM/DD　(Numeric format) 9 YYYY/MM/DD　YY/MM/DD　(Numeric format) * Which date format do you require [1]: 省略時形式を使用する場合には、 RETURN を押して、あるいは使用したい形式の番号を入力します。
17	日本語 ALL–IN–1ユーザの最大数の指定 * What will be the greatest number of simultaneous ALL-IN-1 users: アップグレード・インストレーション 省略値が提供されています。省略値を使用する場合には、 RETURN を押します。 新規インストレーション 予期する日本語 ALL–IN–1ユーザの最大数を指定します。インストレーション・プロシージャは入力した数に対して、システム・パラメータが使用するユーザ数にサポートできるかどうか確認します。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
18	センダー及びフェッチャを実行するためのバッチ・キューの指定 `* Which batch queue do you want to use for the Sender/Fetcher check job? [SYS$BATCH]:` 省略時キューを使用する場合には、 RETURN を押します。あるいは既存キューの名前を指定します。 アップグレード・インストレーション:ステップ 20 へ進みます。

19	新規インストレーション: AIDA 及びファイル・キャビネット・サーバの起動と、センダー及びフェッチャの実行のためのバッチ・キューの指定
	
	`ALL-IN-1 must use a running batch queue on this node to start the AIDA and File Cabinet Servers, and the Sender and Fetcher processes.`
	
	`* Which queue do you want to use? [default]:`
	
	省略時キューを使用する場合には、 RETURN を押します。あるいは現在動作していて、総称ではなく、このノードに既存しているバッチ・キューを指定します。
	
	指定したキューはノード固有バッチ・キュー・マスタ・ファイルに追加され、またイストレーションの際に作成されたサーバの構成ファイルに格納されます。これから、システム管理メニューのノード固有キュー管理 (MNQ) オプションを使用して、キューを変更する、あるいはクラスタの他のノードにキューを追加することができます。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

20	リモート・メールを送受信するかの指定。インストレーション・プロシージャはシステムにインストールされたメール転送及びディレクトリ・サービス・ソフトウェアのタイプとバーションを確認します。
	
	`ALL-IN-1 Electronic Messaging can send and receive messages, to and from other computer systems using either the MAILbus 400 or Message Router products.`
	
	`* Do you want to be able to send and receive remote mail [YES]?`
	
	リモート・メールを使用する場合には、 RETURN を押します。
	
	NO と答えた場合には、日本語 ALL–IN–1ユーザは同じコンピュータ・システムの他のユーザのみメールを交換することができます。

状況	進むステップ
リモート・メールを使用したくない場合	ステップ 28
Digital X.500 及び MAILbus 400 MTA を使用する新規日本語 ALL–IN–1システムをインストールする場合	ステップ 21
メッセージ・ルータを使用するシステムをアップグレードする場合	ステップ 22

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
21	新規インストレーション MAILbus 400 MTA 及び Digital X.500: リモート・メールのため、 MAILbus 400 MTA を使用したいことを確認します。 If you plan to use MAILbus 400 as your MTA, then answer YES to this question. You will not have been offered this choice unless the installation checks have revealed that the product is installed. Note that even though MAILbus 400 appears to be installed and initially configured, it is unlikely that it will sucessfully process your mail until you have completed all the set up tasks described in the Mail Management Guide. If you answer NO to this question, ALL-IN-1 users will only be able to exchange messages locally, unless you subsequently choose to use Message Router (if it is available.) * Do you want to use MAILbus 400 for remote mail [YES]? リモート・メールのため、 MAILbus 400 MTA を使用したい場合、 RETURN を押します。 概要及び構築計画ガイドで説明した環境構成およびセットアップ作業をすべて実行した限り、 MAILbus 400 MTA が日本語 ALL–IN–1と同じノードにインストールされている場合と、クラスタ以外のリモート・ノードの同じ VMS クラスタ内の異なるノードにインストールされている場合と、インストレーションには違いがあります。 継続:ステップ 25 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
22	アップグレード・インストレーション:リモート・メールのため、 MAILbus 400 MTA を使用したいことを確認します。 VAX ノードにあるALL–IN–1は同じノードにインストールされるローカルのメッセージ・ルータ、あるいは他のノードにインストールされるリモートのメッセージ・ルータの使用に対して構成することができます。 Alpha ノードにある日本語 ALL–IN–1はリモートのメッセージ・ルータのみ使用することができます。この例のスクリプトは Alpha システムに対するもので、リモートのメッセージ・ルータの使用を構成しなければなりません。 `* Do you want ALL-IN-1 to be configured to use Message Router [YES]?` メッセージ・ルータを使用したい場合には、Yと答えて確認します。
23	アップグレード・インストレーション:メッセージ・ルータがこのノードにインストレされていない場合、リモートのメッセージ・ルータを使用したいかを確認します。 `* Do you want to use a remote Message Router [YES]?` リモートのメッセージ・ルータを使用したい場合には、Yと入力して確認します。 VAX システムあるいは Alpha システムにのアップグレード・インストレーションによって、この答えの省略値が違うことを注意してください。この例では、 Alpha システムのアップグレードなので、省略値はリモートのメッセージ・ルータを使用することです。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

24	アップグレード・インストレーション:リモートのメッセージ・ルータ・ノードの名前を入力します。
	
	`* What node is the Message Router on:`
	リモート・ルータ・ノードの DECnet ノード名を入力します。
	リモートのメッセージ・ルータ・ノードは日本語 ALL–IN–1がインストールされたのーどにあるネットワーク・ノード・データベース内のものでなければならないことを注意してください。アップグレードの場合には、メッセージ・ルータ・メールボックスのパスワードを要求しません。
	追加質問
	メッセージ・ルータを使用する新規日本語 ALL–IN–1システムをインストールする場合には、メッセージ・ルータ・メールボックスのパスワードの入力を要求します。
	
	`* Enter a password for the Message Router mailbox:`
	`* Please confirm the password that you specified:`
	パスワードは最低 8 キャラクタ、最大 32 キャラクタ以内のものでなければなりません。パスワードを確認します。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
25	サポートしたいメール・ディレクトリ・タイプの指示 Digital X.500 がインストールされた場合の新規インストレーションには、下記のように表示されます。 `* What type of Mail Directory support do you want [X]:` 使用可能なオプションはシステムにインストールされたディレクトリ・サービス・ソフトウェアのタイプによります。インストールされたものによって、下記のリストでは、適当なオプションと省略値が提供されています。 省略値を使用するには、 RETURN を押します。あるいはサポートしたいメール・ディレクトリのタイプに対する番号を入力します。

状況	入力するオプション
サポートするメール・ディレクトリなし	0
メッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスをメール・ディレクトリとして使用する	M
Digital X.500 ディレクトリ・サービスをメール・ディレクトリとして使用する	X

	Digital X.500 の使用のインストレーションには、 Digital X.500 が日本語 ALL–IN–1と同じノードか、あるいはクラスタ以外のリモートにインストールされていると関係なく、概要及び構築計画ガイド説明した必要なセットアップおよび環境構成作業をすべて実行しなければなりません。 サポートするメール・ディレクトリなしと指定する場合、ステップ 28 へ進みます。
26	メール・ディレクトリを基本ディレクトリとしての指定 `Do you want the Mail Directory to be the primary directory [NO]?` メール・ディレクトリを第二ディレクトリとして使用する場合には、 RETURN を押します。 新規インストレーションには、ステップ 28 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

27	メッセージ・ルータ使用するためのインストレーション:メール・ディレクトリ・ユーザ・エージェント・アカウントに対するパスワードを入力して、確認します。
	リモートのメッセージ・ルータを使用するか、あるいは同じ VMS クラスタにあるメッセージ・ルータを使用するかによって、表示される内容が違います。情報メッセージを注意深く読んで、指示を従ってください。
	パスワードは 6 から 8 キャラクタ以内のものです。
	`* Press RETURN to continue the installation:`
	`* Enter a password for the Message Router Directory user agent account:`
	`* Please confirm the password which you specified:`
	RETURN を押して、メール・ディレクトリ・ユーザ・エージェント・アカウントに対するパスワードを入力して、確認します。

28	送信メールを ASCII に変換するかどうかの指示
	`* Do you want to translate all outgoing messages to ASCII [NO]?`
	送信メールを変換したくない場合には、 RETURN を押します。
	注意
	Digital UNIX にリモートの MAILbus 400 MTA を使用して、MAILbus 400 MTA・ノードにWPS–PLUS to ASCII コンバータがインストールされていなく、かつALL–IN–1以外のユーザとメールを交換したい場合には、必ずYと答えてください。
	送信メールを変換したい場合には、Yと入力してください。つづいてすべての添付文書を変換したいかと質問します。
	`* Do you want to translate all message attachments [NO]?`
	すべての添付文書を変換したい場合には、 RETURN を押します。日本語 ALL–IN–1システムに適当なコンバータがインストールされており、すべての添付文書を ASCII に変換したい場合には、Yと答えてください。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
29	システム・チェック インストレーション・プロシージャは必要および選択ソフトウェアの前もって条件をチェックします。システムにインストールされるソフトウェアとライセンスによって、追加質問があるかもしれません。 CDA サポートのソフトウェアがインストールされていない場合には、 CDA サポートなくのインストレーションを実行したいかと質問されます。 DEC Notes がインストールされなく、日本語 ALL–IN–1ライセンスが電子会議をサポートする場合には、電子会議サポートなくのインストレーションを実行したいかと質問されます。

30	TCP/IPネットワーク・プロトコルを使用して、クライアント・アップリケーションを日本語 ALL–IN–1に接続したいかどうかの指示
	システムに DEC TCP/IP サービス (UCX) あるいは他の UCX 真似TCP/IPネットワーク・ソフトウェアがインストールされている場合には、下記の質問のみ表示されます。
	`* Do you want to use TCP/IP [YES]?`
	クライアント接続のため、 TCP/IP を使用したい場合には、 RETURN を押します。そして、 AIDA サーバおよび日本語 ALL–IN–1ファイル・キャビネット・サーバに対する省略名がインターネット・サービス・データベースに登録されていない場合には、次の質問が表示されます。
	`* Enter a port number for the AIDA Server [7300]:`
	`* Enter a port number for the ALL-IN-1 File Cabinet Server [7373]:`
	各サーバのため、異なる TCP/IP ポート番号を入力します。ポート番号は 1024 から 65535 以内のものです。 TeamLinks クライアント・ソフトウェアの使用を計画する場合には、省略値を使用しなければなりません。
	インストレーション・プロシージャは UCX$IPC_SHR.EXE イメージがインストールされているかをチェックします。インストールされていない場合は、インストレーション後に、インストールしなければなりません。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
31	システム・チェック インストーレション・プロシージャはシステムのパラメータ、クォータおよび識別子を確認します。新規インストレーションの場合には、日本語 ALL–IN–1識別子が作成されます。アップグレード・インストレーションの場合には、識別子がすでに存在しています。 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の場合、識別子 OA$FS_ADMIN が要求されます。新規インストレーションの際に、この識別子がすでに存在している場合、既存の識別子を使用するかどうかと質問されます。インストレーション指示を従ってください。OA$FS_ADMIN はアクセス制御のみ使用されます。
32	言語コードの入力 `* Enter language code for this installation (2 characters): JP` 言語構成要素の二文字言語コードを入力します。例では、JPは日本語の言語コードです。

33	新規インストレーション:日本語 ALL–IN–1エリアに対するデバイスの指定
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 shared library files:`
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 shared data files [A1DISK1:]:`
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 JAPANESE language files [A1DISK1:]:`
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 mail area SDAF file [A1DISK1:]:`
	`* How many shared directories do you want to create [1]:`
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 shared directory SHARE1 [A1DISK1:]:`
	`* Which device will hold the ALL-IN-1 lexicon files [A1DISK1:]:`
	共有ディレクトリに関して、 DEC は、インストレーションの際に省略値を選択して、インストレーション後、日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドの指示に従って追加共有ディレクトリを作成することをお薦めします。
	レキシコン・ファイルにすでに他の製品がインストールされいる場合には、レキシコン・ファイルに関する質問をしません。

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
34	マーケット・コードの入力 `* Enter market code for this installation (2 characters): JP` インストレーションの二文字マーケット・コードを入力します。 インストレーション・タイプ: 新規 → 進むステップ: 35 インストレーション・タイプ: アップグレード → 進むステップ: 42

35	新規インストレーション:日本語 ALL–IN–1マネージャの OpenVMS アカウントおよびパスワードを入力します。パスワードを確認します。
	`%A1CUS-I-RECOUK, Restoring the MARKET kit savesets`
	`%VMSINSTAL-I-RESTORE, Restoring product save set B ...`
	`%VMSINSTAL-I-RESTORE, Restoring product save set C ...`
	`This installation creates a VMS account for the ALL-IN-1 manager.`
	`* What VMS username do you want to use for ALL-IN-1 MANAGER account [ALLIN1]:`
	`* Enter a password for the ALL-IN-1 MANAGER account:`
	`* Please confirm the password which you specified:`

36	新規インストレーション:日本語 ALL–IN–1マネージャのシステム・グループ UIC、省略時デバイスおよびディレクトリを入力します。 OpenVMS システム・ディレクトリのサブディレクトリに日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントを作成しないでください。
	`* What UIC do you want to use for ALL-IN-1 MANAGER account:`
	`* What default device do you want to use for the ALL-IN-1 MANAGER'S account [A1DISK1:]`
	`* What default directory do you want to use for ALL-IN-1 MANAGER'S account? [ALLIN1:]`

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

37	新規インストレーション:転送ユーザ・ユティリティが使用するアカウントのための UIC を入力します。 UIC はシステム・グループ UIC ではいけません。
	
	`* What UIC do you want to use for A1$XFER_IN account:`
	`* What UIC do you want to use for the A1$XFER_OUT account:`

38	新規インストレーション:スクリプト・シンビオント・ユティリティが使用するアカウントのための UIC を入力します。 UIC はシステム・グループ UIC ではいけません。 `* What UIC do you want to use for ALL-IN-1 SCRIPT SYMBIONT account:`
39	新規インストレーション:ファイル・キャビネット・サーバが非特権アカウントのリモート・クライアントを認証するため、使用するアカウントに対する UIC を入力します。 UIC はシステム・グループ UIC ではいけません。 `* What UIC do you want to use for ALL-IN-1 OAFC$DEFAULT account:`
40	新規インストレーション:分離プロセスとして日本語 ALL–IN–1ファイル・キャビネット・サーバを動作するためのアカウントに対する UIC を入力します。 UIC はシステム・グループ UIC ではいけません。 `* What UIC do you want to use for ALL-IN-1 OAFC$SERVER account:`

(次ページに続く)

表 2–2 (続き) 新規及びアップグレード・インストレーションに対するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

41	新規インストレーション:日本語 ALL–IN–1領域の最上位ディレクトリの指定
	
	`* Enter ALL-IN-1 top-level directory required for the shared library files [ALLIN1]:`
	`* Enter ALL-IN-1 top-level directory required for the shared data files [ALLIN1]:`
	`* Enter ALL-IN-1 top-level directory required for all JAPANESE language files [ALLIN1]:`
	`* Enter ALL-IN-1 top-level directory required for the mail area SDAF file [ALLIN1]:`
	`* Enter the name required for the SHARED DIRECTORY on A1DISK1: [ALLIN1]:`
	ステップ 44 へ継続します。

42	アップグレード・インストレーション:日本語 ALL–IN–1マネージャの OpenVMS アカウントを入力します。 `* What is the existing VMS username for the ALL-IN-1 account [ALLIN1]:` 日本語 ALL–IN–1アカウントの OpenVMS ユーザ名を入力します。アカウントの情報が表示されます。
43	アップグレード・インストレーション:日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントの情報が正しいかを確認します。 `* Are all the specified account's characteristics correct [YES]?` すべての情報がただしい場合には、 RETURN を押します。
44	IVP (インストレーション検証プロシージャ) の実行 `* Do you want to run the IVP after the installation [YES]?` IVP を実行するには、 RETURN を押します。

ここまで、すべてのインストレーション質問が終了します。

混在アーキテクチャ VMS クラスタに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールする場合には、第二アーキテクチャとしてアーキテクチャ・サポートを追加する指示について、第 2.2 節を参照してください。

単一 VMS クラスタにインストールすることでない場合には、第 2.3 節へ進みます。

2.2 アーキテクチャ・サポートの追加あるいはアップグレード

表 2–3 では、いつアーキテクチャ・サポートの追加あるいはアップグレードのインストレーションを実施するかについて、説明します。

表 2–3 いつ VAX あるいは Alpha アーキテクチャ・サポートをインストール/アップグレードするか

インストール/アップグレード	下記の実行を終了した後
VAX アーキテクチャ・サポート	同じ VMS クラスタの Alpha システムに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の新規あるいはアップグレード・インストレーション
Alpha アーキテクチャ・サポート	同じ VMS クラスタの VAX システムに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の新規あるいはアップグレード・インストレーション

追加アーキテクチャ・インストレーション際の質問は、新規あるいはアップグレード・インストレーション際に提供した回答によって、提出されます。例えば、新規あるいはアップグレード・インストレーションでWPS–PLUSをインストールしなかった場合、WPS–PLUSに関する追加質問はしません。

2.2.1 開始の前

インストレーションを実際に開始する前に、下記の事項をしなければなりません。

1. はじめてアーキテクチャ・サポートをインストールする場合には、新規あるいはアップグレード日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールしたシステムにある日本語 ALL–IN–1環境構築ファイル、 OA$DATA_

SHARE:A1CONFIG.DAT、のロケーションを記録します。インストレーション中にこの情報が要求されます。

2. スクリプト OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP を実行して、SYS$SYSDEVICE を持っている論理名を確認します。
3. 日本語 ALL–IN–1がインストールされたノードの日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントからスクリプト OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP を実行します。

```
$ SET HOST 0/LOG=filename
$ ALLIN1/NOINIT
Enter CMD: DO OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP
```

SYS$DEVICE の参照が見つかった場合、警告が表示されます。 VAX システム、また Alpha システムの異なるデバイスを指示する参照を削除しなければなりません。これらの参照を改正しない場合、システムのデータは一部失うこともあります。

インストレーション・プロシージャはこのスクリプトも実行します。

2.2.2 アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

表 2–4 には、 VAX システムに追加アーキテクチャ・インストレーションのスクリプト例が示されます。下記の情報が使用されます。

- 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 がすでに同じ VMS クラスタの Alpha システムにインストールされています。
- WPS–PLUSが Alpha システムにインストールされています。
- 日本語 ALL–IN–1が Alpha システムに複数言語システムとして構築されています。
- メッセージ・ルータがこの VAX システムにインストールされています。

例では、はじめの VAX サポートの追加と既存 VAX サポートのアップグレードと両方のスクリプトが含まれています。インストレーション質問とスクリプトは、Alpha サポートの追加あるいはアップグレードに対してもほぼ同じです。

表 2–4 アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動	
1 から 5	表 2–2 のステップ 1 から 5 に従ってください。	
	インストレーション・タイプ	進むステップ
	アップグレード	ステップ 6
	新規	ステップ 7
6	アップグレード・インストレーション:実施したいインストレーション・タイプの番号を入力します。	

```
This is a LOCAL ALL-IN-1 V3.2 BASE kit

The current ALL-IN-1 image identification is ALL-IN-1 V3.2.

Using the FULL ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types
can be performed:

  (1)  Add, upgrade, or update VAX components for an
       ALL-IN-1 V3.2 system
  (2)  Install new ALL-IN-1 V3.2 additional language
  (3)  Upgrade ALL-IN-1 V3.1 additional language
  (4)  Update ALL-IN-1 V3.2 additional language
  (5)  Add, upgrade, or update VAX components for an
           ALL-IN-1 V3.2 additional language
  (6)  Update ALL-IN-1 V3.2

  (RL) Register licenses for pre-requisite software

* Which installation do you wish to perform [1]:
```

同じ VMS クラスタ内の Alpha システムにすでにインストールされいる日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 システムのため、 VAX 構成要素をアップグレードするには、 RETURN を押します。

継続:ステップ 8 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
7	新規インストレーション:実施したいインストレーション・タイプの番号を入力します。 This is a LOCAL ALL-IN-1 V3.2 BASE kit Logical OA$IMAGE is not defined. No ALL-IN-1 image can be found using the default specification. Using the FULL ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types can be performed: (1) A new installation of ALL-IN-1 V3.2 (2) Add, upgrade, or update VAX components for an ALL-IN-1 V3.2 system (RL) Register licenses for pre-requisite software * Which installation do you wish to perform [1]: 2 VAX アーキテクチャ・サポートを追加するには、2を入力します。
8	インストレーションを開始したいことを確認します。 The installation procedure allows you to perform the following actions: (I) Perform the installation (PC) Perform all pre-installation checks * Which action do you wish to perform [I]: RETURN を押して、インストレーションを開始します。 アップグレード・インストレーション:ステップ 10 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

9	新規インストレーション:既存システムの日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 に対する日本語 ALL–IN–1構成ファイル、 OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT、のロケーションを入力します。
	
	`You have chosen an architecture only installation. To continue you must specify the location of the existing ALL-IN-1 system's configuration file (A1CONFIG.DAT). The installation will read A1CONFIG.DAT to determine file target locations.`
	
	`* Please give the directory location of A1CONFIG.DAT: disk:[directory]`
	
	A1CONFIG.DAT のロケーションを`disk:[directory]`のフォーマットで入力してください。構成ファイルは常にこのフォーマットで指定されなければなりません。
	インストレーション・スクリプトは構成ファイルを使用して論理名を定義します。
	
	`%A1-I-DEFLOG, Running A1V32START.COM to define the logicals`
	`-A1-I-DEFLOG, for your existing ALL-IN-1 V3.2 VAX system.`
	
	`Defining language independent logical names`
	
	`Defining ENGLISH language logical names`
	
	VAX アーキテクチャのみのインストレーションが、 Alpha システムにすでにインストールされた日本語 ALL–IN–1の環境設定に対応して、実行します。情報メッセージが既存の環境設定によって表示されます。

10	ライセンス PAK が登録及びロードされているかを確認します。 `* Does this product have an authorization key registered and loaded [YES]?` 継続するには、 RETURN を押します。 新規インストレーション:ステップ 12 へ進みます。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
11	アップグレード・インストレーション:ファイルをパージしたいかの確認 `* Do you want to purge files replaced by this installation [YES]?` 継続するには、 RETURN を押します。
12	DATATRIEVE を日本語 ALL–IN–1と統合するかの指示 `DATATRIEVE can be integrated into ALL-IN-1. On VAX systems with Deferred image activation enabled the DATATRIEVE image will be deferred. If you use the standard DATATRIEVE image SYS$SHARE:DTRSHR.EXE then you can select to dynamically activate DATATRIEVE. You will still be able to use DATATRIEVE within ALL-IN-1, but you will avoid any performance impact of having it physically linked with the ALL-IN-1 image.` `* Do you want to integrate DATATRIEVE with ALL-IN-1 [NO]?` DATATRIEVE を統合したくない場合は、 RETURN を押します。 DATATRIEVE を統合したい場合は、Yを入力します。統合したい DATATRIEVE イメージ名を要求するプロンプトが表示されます。標準 DATATRIEVE イメージ、SYS$SHARE:DTRSHR.EXE、を使用している場合には、日本語 ALL–IN–1を起動する際に DATATRIEVE を同時に起動するかと質問します。 DEC がこれをお薦めします。
13	既存日本語 ALL–IN–1環境設定のシステム・チェック 表示するメッセージは既存環境設定によります。例えば、 `During your ALL-IN-1 installation on Alpha you chose to install ALL-IN-1 with WPS-PLUS, therefore WPS-PLUS will also be installed during this VAX architecture only installation.`

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
14	ACMS を統合したいかの指示 ACMS を統合したい場合には、下記の質問に YES と答えます。 If you wish to interface with ACMS, answer YES to the following questions. NOTE: o ACMS must be installed before ALL-IN-1. o If you answer YES and the relevant ACMS files are present then the interface to ACMS will be built. If the files are not present, then you may either continue the installation without linking with ACMS, or abort the installation to correct the problem. * Do you want to integrate ACMS with ALL-IN-1 [NO]? ACMS を統合したくない場合には、 RETURN を押します。
15	既存日本語 ALL–IN–1環境設定のシステム・チェック 表示するメッセージは既存環境設定によります。例えば、 ALL-IN-1 on the Alpha is linked as a MULTI-LANGUAGE system, therefore ALL-IN-1 on this VAX will also be linked as a MULTI-LANGUAGE system.
16	日本語 ALL–IN–1ユーザの最大数の指定 * What will be the greatest number of simultaneous ALL-IN-1 users: アップグレード・インストレーション:省略値が提供されています。省略値を使用するには、 RETURN を押します。 新規インストレーション:予期する日本語 ALL–IN–1ユーザの最大数を指定します。インストレーション・プロシージャは入力した数に対して、システム・パラメータが使用するユーザ数にサポートできるかどうか確認します。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

17	アップグレード・インストレーションのためのメッセージ・ルータのチェック
	この部分のインストレーション・プロシージャは、他のシステムにのインストレション中に提供した回答によって、決定されます。この例のスクリプトでは、 Alpha システムがこの VAX ノードのリモート・メッセージ・ルータを使用するために構築されます。Alpha システムのため設定したメール・ディレクトリのレベルも使用されます。
	`%A1-I-MDCHK, Performing Mail and Directory checks...`
	`%A1-I-REMMR, Your ALL-IN-1 system running on the Alpha is configured`
	`-A1-I-REMMR, to use a Remote Message Router on this node`
	`%A1-I-LOCMR, Therefore this VAX ALL-IN-1 system will be configured`
	`-A1-I-LOCMR, to use a local Message Router`
	`%A1-I-DIROPP, Your Alpha ALL-IN-1 system is configured to use a`
	`-A1-I-DIROPP, Mail Directory Service. This VAX architecture only`
	`-A1-I-DIROPP, installation will use the same Message Router Directory Service.`
	`%A1-I-UPDATEDDS, As this is an update you will not be asked for a`
	`-A1-I-UPDATEDDS, Message Router Directory password`
	.
	.
	.
	インストレーション・プロシージャが CDA サポート・ソフトウェアをチェックします。見つからない場合には、 CDA サポートなくのインストレーションを実行したいか、あるいは適当なソフトウェアをインストールしたいかと質問されます。インストレーション・スクリプトの指示に従ってください。
	電子会議のソフトウェア・サポートもチェックされます。適当なバーションの DEC Notes がインストールされない場合には、指示が提供します。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

18	TCP/IPネットワーク・プロトコルを使用して、クライアント・アップリケーションを日本語 ALL–IN–1に接続したいかどうかの指示
	システムに DEC TCP/IP サービス (UCX) あるいは他の UCX 真似TCP/IPネットワーク・ソフトウェアがインストールされている場合には、下記の質問のみ表示されます。
	`* Do you want to use TCP/IP [YES]?`
	クライアント接続のため、 TCP/IP を使用したい場合には、 RETURN を押します。そして、 AIDA サーバおよび日本語 ALL–IN–1ファイル・キャビネット・サーバに対する省略名がインターネット・サービス・データベースに登録されていない場合には、次の質問が表示されます。
	`* Enter a port number for the AIDA Server [7300]:`
	`* Enter a port number for the ALL-IN-1 File Cabinet Server [7373]:`
	各サーバのため、異なる TCP/IP ポート番号を入力します。ポート番号は 1024 から 65535 以内のものです。 TeamLinks クライアント・ソフトウェアの使用を計画する場合には、省略値を使用しなければなりません。インストレーション・プロシージャは UCX$IPC_SHR.EXE イメージがインストールされているかをチェックします。インストールされていない場合は、インストレーション後に、インストールしなければなりません。

19	システム・チェック インストーレション・プロシージャはシステムのパラメータ、クォータおよび識別子を確認します。
20	言語コードの入力 `* Enter language code for this installation (2 characters): JP` 言語構成要素の二文字言語コードを入力します。

(次ページに続く)

表 2–4 (続き) アーキテクチャ・サポートを追加するためのインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
21	マーケット・コードの入力 `* Enter market code for this installation (2 characters): JP` インストレーションの二文字マーケット・コードを入力します。
22	日本語 ALL–IN–1マネージャの OpenVMS アカウント名を入力します。 `* What is the existing VMS username for the ALL-IN-1 account [ALLIN1]:` アカウント情報が表示されます。
23	アカウントの情報が正しいかを確認します。 `* Are all the specified account's characteristics correct [YES]?` 正しい場合には、 RETURN を押します。
24	IVP (インストレーション検証プロシージャ) の実行 `* Do you want to run the IVP after the installation [YES]?` IVP を実行するには、 RETURN を押します。

すべてのインストレーション質問は終了しました。

2.3 自動的なインストレーション後の作業

インストレーション・プロシージャが自動的なインストレーション後の作業を実行します。例えば、データ・ファイルの変換。

自動的なインストレーション後の作業を実行中に問題が発生する場合は、第 4 章を参照してください。

次に示すインストレーション後の作業は自動的に実行されます。

- 既存のALL–IN–1論理名と，インストレーション時に作成された論理名の割当ての解除
- ALL–IN–1を起動するための A1V32START.COM の実行
- 下記のフォーム・ライブラリおよびそのサイト・バーションのコンパイル、インストールと保護の設定
  - OAFORM
  - MEMRES
  - OAN$FORMS
- メッセージ・シンボル・ファイルのインストール
- TXL のコンパイル
- アップグレード・インストレーションの場合、下記のデータ・ファイルがアップグレードされます。
  - A1CONFIG.DAT
  - PROFILE.DAT
  - SM_ACCOUNT_TYPES.DAT
  - SM_POLICIES.DAT
  - FORMAT.DAT

2.4 マニュアルのインストレーション後の作業

インストレーション後にいくつかの手作業を実行しなければなりません。第 5 章を参照してください。

3

インストレーション・プロシージャ: 追加言語

この章では、複数言語システムとして構築される日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 システムに追加言語のインストレーションについて説明します。

開始前

第 1 章で説明した必要なシステム準備作業をすべて実行するまで、インストレーションを実際に開始しないでください。

インストレーション・プロシージャでは、多くの警告メッセージや情報メッセージが表示されます。表示されるメッセージはすべて注意深く参照してください。

インストレーションで表示される各質問には、行の先頭にアスタリスク (*) が付いています。質問への応答方法がよくわからない場合には、疑問符 (?) を入力してヘルプを表示できます。

注意

インストレーションが異常終了した場合には、最初からインストレーションを再開しなければなりません。任意の時点でインストレーションを中止するには、 CTRL/Y を押してください。

新しい追加言語を導入、あるいは現存追加言語をアップグレードする場合には、第 3.1 節を参照してください。

追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを導入、あるいはアップグレードするには、第 3.2 節を参照してください。

注意

追加言語 (ENGLISH) をインストールする際には、 FMS V2.4 が既にインストールされていることを確認してください。 FMS V2.4 のインストレーション後に以下のファイルがメモリにインストールされていることを確認してください。メモリにインストールされていない場合には、コマンド・プロシージャ SYS$STARTUP:FMSTARTUP.COM を変更して、 RUN SYS$SYSTEM:INSTALL というエントリの前の EXIT コマンドを削除し、次のコマンド・プロシージャを実行してください。

- SYS$MESSAGE:FDVMSG.EXE
- SYS$SHARE:FDVSHR.EXE

3.1 追加言語インストレーションのインストレーション・プロシージャ

新しい追加言語を導入、あるいは現存追加言語をアップグレードする場合には、表 3–1 のステップを実行してください。

VAX あるいは Alpha システムで実行するインストレーションには、わずかの違いがあります。

スクリプトの例は、多言語システムとして構築される日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 Alpha システムに追加言語 BRITISH のインストレーションを示します。

ディストリビューション・メディアによって、インストレーション際にデープあるいはカートリッジの交換を催促します。

表 3–1　追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
1	インストレーションに対するログファイルを作成します。問題が発生するかもしれないため、 DEC はインストレーションの記録の保存をお薦めします。ログをハード・コピー端末あるいはログファイルで保存することができます。ログファイルを保存する場合には、下記の通りに入力します。 `$  SET HOST 0/LOG=filename` ここで、filenameはログファイルの名前です。ログファイルはコマンドを入力したディレクトリで作成されています。ファイル名を指定しない場合には、省略名は SETHOST.LOG です。インストレーション・ログファイルは約 200 ブロックです。 コンソル管理ソフトウェアを動作している場合は、これでインストレーションを記録できます。詳しくはコンソル管理の解説書を参照してください。
2	言語ソフトウェア・キットが含まれているメディアをロードとマウントします。

3	SYSTEM アカウントから VMSINSTAL プロシージャを起動します。
	
	次のコマンドを入力します。
	
	`$ SET DEFAULT SYS$UPDATE`
	`$ @VMSINSTAL A1LUS032 device`
	
	代替作業デバイス (AWD) を使用する場合には、次のように入力します。
	
	`$ SET DEFAULT SYS$UPDATE`
	`$ @VMSINSTAL A1LUS032 device OPTIONS AWD=disk`
	
	deviceはディストリビューション・メディアをマウントする装置です。物理装置名または論理装置名を指定できます。論理装置名を使用する場合には、 A1$、 OA$、 OA1$から始まる名前を使用しないでください。A1LUS032は製品識別子で、diskは代替作業デバイスのロケーションです。

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
4	システム・バックアップの確認 OpenVMS Alpha Software Product Installation Procedure V6.1 It is 14-FEB-1996 at 21:27. Enter a question mark (?) at any time for help. * Are you satisfied with the backup of your system disk [YES]? システム・バックアップを確実に行っている場合には RETURN を押します。
5	ディストリビューション・メディアのロード プロンプトで製品識別子A1LUS032を入力して、メディアを正確にマウントし、開始を準備しておく場合には、Yを入力します。 Enter the products to be processed from the first distribution volume set: * Products: A1LUS032 * Enter installation options you wish to use (none): Please mount the first volume of the set on device * Are you ready? Y

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
6	実行したいインストレーション・タイプに対する番号を入力します。 This is a LOCAL ALL-IN-1 V3.2 LANGUAGE kit The current ALL-IN-1 image identification is ALL-IN-1 V3.2. Using the LANGUAGE-only ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types can be performed: (1) Install new ALL-IN-1 V3.2 additional language (2) Upgrade ALL-IN-1 V3.1 additional language (3) Update ALL-IN-1 V3.2 additional language (4) Add, Upgrade or Update Alpha architecture specific components of an existing ALL-IN-1 V3.2 additional language (RL) Register licenses for pre-requisite software * Which installation do you wish to perform [1]: 1 新規追加日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 言語を導入する場合は、1を入力します。
7	インストレーションを開始したいことを確認します。 The installation procedure allows you to perform the following actions: (I) Perform the installation (PC) Perform all pre-installation checks * Which action do you wish to perform [I]: RETURN を押して、インストレーションを開始します。

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
8	適切なオプション・ソフトウェアの情報を提供します。 During your first language installation you chose to install ALL-IN-1 without DATATRIEVE, therefore this tool will NOT be available from your ALL-IN-1 additional language. During your first language installation you chose to integrate WPS-PLUS, therefore you be be able to use WPS-PLUS as an additional editor from your ALL-IN-1 additional language. This kit contains a library of Encapsulated PostScript(R) graphics and PostScript(R) Page Overlay samples specific to the language component. * Do you want these graphics copied to the ALL-IN-1 library directory [NO]? Yを入力して、WPS–PLUSグラフィック・ライブラリを日本語 ALL–IN–1ディレクトリにコピーします。
9	環境設定の確認表示するメッセージは基本言語の環境設定によります。例えば、 During your first language installation you chose to install ALL-IN-1 without ACMS, therefore this tool will NOT be available from your ALL-IN-1 additional language.

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
10	日付形式の選択

```
ALL-IN-1 allows you to select a default date format for each language
you have installed. This will become the default ALL-IN-1 date format
for each user (on a per language basis.) This may be changed by each
user through the Set Working Conditions option on the User Setup Menu.

    Alphanumeric Date    Numeric Date

    1   DD-MMM-YYYY      MM/DD/YY      (Standard Default)
    2   DD-MMM-YYYY      DD/MM/YY
    3   DD-MMM-YYYY      YY/MM/DD
    4   YYYY-MMM-DD      MM/DD/YY
    5   YYYY-MMM-DD      DD/MM/YY
    6   YYYY-MMM-DD      YY/MM/DD
    7   ***** Reserved (Means system default) *****
    8   YYYY-MM-DD       YY/MM/DD      (Numeric format)
    9   YYYY/MM/DD       YY/MM/DD      (Numeric format)

* Which date format do you require [1]:
```

省略時フォーマットを使用する場合には、 RETURN を押します。また使用したいフォーマットの番号を入力します。

ここでインストレーション・プロシージャはシステムをチェックします。

11	言語コードの入力

```
* Enter language code for this installation (2 characters): US
```

言語コンポーネントの二文字言語コードを入力します。

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
12	米語と英語 %A1LUS-I-RELANK, Restoring the LANGUAGE kit savesets %VMSINSTAL-I-RESTORE, Restoring product save set B ... If you wish to install a dialectal variation of ENGLISH language, enter the code for the dialect component you wish to use. If you do not wish to install a dialectal variation of ENGLISH language, then accept the answer of NO_DIALECT. * Enter dialect code for this installation (5 characters) [NO_DIALECT]: US_GB 使用したいダイレクト・コードを入力します。この例では、US_GBは BRITISH ダイレクト・コンポーネントです。
13	ライセンス PAK が登録及びロードされているかを確認します。 * Does this product have an authorization key registered and loaded [YES]? RETURN を押して、継続します。
14	追加言語ファイルに対するデバイスの指定 * Which device will hold the ALL-IN-1 BRITISH language files: デバイス名を入力します。
15	日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントに対する OpenVMS ユーザ名を入力します。 * What is the existing VMS username for the ALL-IN-1 account [ALLIN1]: アカウントの情報が表示されます。

(次ページに続く)

表 3–1 (続き) 追加言語のインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
16	アカウントの情報が正しいかを確認します。 `* Are all the specified account's characteristics correct [YES]?` アカウントの情報が正しい場合には、 RETURN を押して確認します。
17	日本語 ALL–IN–1追加言語ファイルのトップ・レベル・ディレクトリの指定 `* Enter ALL-IN-1 top-level directory required for all BRITISH language files [BRITISH]:`
18	IVP (インストレーション検証プロシージャ) の実行 `* Do you want to run the IVP after the installation [YES]?` RETURN を押して、 IVP を実行します。

すべてインストレーションに対する質問がここで終了されています。

インストレーション後の作業は自動的に実行されます。インストレーション後の作業を実行中に問題が発生する場合には、第 4 章を参照してください。インストレーション後の作業はマニュアルで実行される場合には、第 5 章を参照してください。

VMScluster にインストールする、またインストールされた追加言語に対する追加アーキテクチャ・サポートを追加したい場合には、第 3.2 節を参照してください。

3.2 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートの導入

インストレーションを開始する前に、下記の事項を実行しなければなりません。

- VAX システムにある日本語 ALL–IN–1環境構築ファイル、 OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT、のロケーションを記録します。インストレーション中にこの情報が要求されます。

- スクリプト OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP を実行して、SYS$SYSDEVICE を持っている論理名を確認します。

日本語 ALL–IN–1がインストールされたノードの日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントからスクリプト OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP を実行します。

```
$ SET HOST 0/LOG=filename
$ ALLIN1/NOINIT
Enter CMD: DO OA$LIB:SM_CHECK_SYS$SYSDEVICE.SCP
```

SYS$DEVICE の参照が見つかった場合、警告が表示されます。 VAX システム、また Alpha システムの異なるデバイスを指示する参照を削除しなければなりません。これらの参照を改正しない場合、システムのデータは一部失うこともあります。

異なるアーキテクチャがインストールされた同じ VMS クラスタに、追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加する場合には、表 3–2 のステップを実行してください。スクリプトの例は追加言語、日本語 ALL–IN–1 BRITISH に対する VAX アーキテクチャ・サポートの追加を示します。 BRITISH はすでに追加言語として Alpha システムの同じ VMS クラスタにインストールされています。

表 3–2 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
1 ~ 5	表 3–1 のステップ 1 ~ 5 に従います。

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動

6	実行したいインストレーション・タイプに対する番号を入力します。
	
	`Using the LANGUAGE-only ALL-IN-1 V3.2 kit, the following installation types can be performed:`
	
	`(1) Install new ALL-IN-1 V3.2 additional language`
	`(2) Upgrade ALL-IN-1 V3.1 additional language`
	`(3) Update ALL-IN-1 V3.2 additional language`
	`(4) Add, upgrade, or update VAX components for an ALL-IN-1 V3.2 additional language`
	
	`(RL) Register licenses for pre-requisite software`
	
	`* Which installation do you wish to perform [1]: 4`
	
	既存日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 追加言語に対する VAX アーキテクチャ・サポートを追加する場合には、4を入力します。

7	インストレーションを開始したいことを確認します。
	
	`The installation procedure allows you to perform the following actions:`
	
	`(I) Perform the installation`
	`(PC) Perform all pre-installation checks`
	
	`* Which action do you wish to perform [I]:`
	
	RETURN を押して、インストレーションを開始します。

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
8	既存日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 システムに対する日本語 ALL–IN–1構成ファイル、 OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT、のロケーションを入力します。 You have chosen an architecture only installation. To continue you must specify the location of the existing ALL-IN-1 system's configuration file (A1CONFIG.DAT). The installation will read A1CONFIG.DAT to determine file target locations. * Please give the directory location of A1CONFIG.DAT [OA$DATA_SHARE]: A1CONFIG.DAT のロケーションをdisk:[directory]のフォーマットで入力してください。構成ファイルは常にこのフォーマットで指定されなければなりません。 %A1LUS-I-DEFLOG, Running A1V32START.COM to define the logicals -A1LUS-I-DEFLOG, for your existing ALL-IN-1 V3.2 Alpha system. . . .
9	ファイルをパージしたいかの指示 * Do you want to purge files replaced by this installation [YES]? ファイルをパージするには、 RETURN を押します。

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
10	環境設定のチェック Alpha システムにおける日本語 ALL–IN–1の環境設定によって、質問されます。 This VAX architecture only installation will where possible match the configuration of ALL-IN-1 already installed on the Alpha system. During your first language installation you chose to install ALL-IN-1 without DATATRIEVE, therefore this tool will NOT be available from your ALL-IN-1 additional language. During your ALL-IN-1 installation on Alpha you chose to install ALL-IN-1 with WPS-PLUS, therefore WPS-PLUS will also be installed during this VAX architecture only installation. During your first language installation you chose to install ALL-IN-1 without ACMS, therefore this tool will NOT be available from your ALL-IN-1 additional language.

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
11	省略時日付形式の選択

```
    ALL-IN-1 allows you to select a default date format for each language
    you have installed. This will become the default ALL-IN-1 date format
    for each user (on a per language basis.) This may be changed by each
    user through the Set Working Conditions option on the User Setup Menu.

        Alphanumeric Date    Numeric Date

        1   DD-MMM-YYYY      MM/DD/YY      (Standard Default)
        2   DD-MMM-YYYY      DD/MM/YY
        3   DD-MMM-YYYY      YY/MM/DD
        4   YYYY-MMM-DD      MM/DD/YY
        5   YYYY-MMM-DD      DD/MM/YY
        6   YYYY-MMM-DD      YY/MM/DD
        7   ***** Reserved (Means system default) *****
        8   YYYY-MM-DD       YY/MM/DD      (Numeric format)
        9   YYYY/MM/DD       YY/MM/DD      (Numeric format)

* Which date format do you require [1]:
```

12	言語コードの入力

```
* Enter language code for this installation (2 characters): US
```

言語コンポーネントの二文字言語コードを入力します。

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
13	米語と英語 %A1LUS-I-RELANK, Restoring the LANGUAGE kit savesets %VMSINSTAL-I-RESTORE, Restoring product save set B ... If you wish to install a dialectal variation of ENGLISH language, enter the code for the dialect component you wish to use. If you do not wish to install a dialectal variation of ENGLISH language, then accept the answer of NO_DIALECT. * Enter dialect code for this installation (5 characters) [NO_DIALECT]: US_GB この例では、US_GBは BRITISH のダイレクト・コードです。
14	ライセンス PAK が登録及びロードされているかを確認します。 * Does this product have an authorization key registered and loaded [YES]? RETURN を押して、継続します。
15	日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントに対するユーザ名を入力します。 * What is the existing VMS username for the ALL-IN-1 account [ALLIN1]: アカウントの情報が表示されます。
16	アカウントの情報が正しいかを確認します。 * Are all the specified account's characteristics correct [YES]? アカウントの情報が正しい場合には、 RETURN を押して確認します。

(次ページに続く)

表 3–2 (続き) 追加言語に対するアーキテクチャ・サポートを追加するインストレーション・プロシージャ

ステップ	行動
17	IVP (インストレーション検証プロシージャ) の実行 `* Do you want to run the IVP after the installation [YES]?` RETURN を押して、 IVP を実行します。

すべてインストレーションに対する質問がここで終了されています。

インストレーション後の作業はマニュアルで実行される場合には、第 5 章を参照してください。

4

インストレーション・エラーと障害

この章は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を導入中もしくは導入検証プロシージャ (IVP) で見るかもしれない様々なエラー・メッセージを取り扱います。

導入を実行している間、様々な情報メッセージが表示されます。警告もしくはエラー・メッセージも表示されるかもしれません。表示された全てのメッセージを読み、メッセージがアドバイスするアクションを取ってください。

4.1 処置の必要のない一般的なエラー・メッセージ

以下のエラー・メッセージは、導入中に表示される場合には無視しても良いです。

```
%DELETE-W-SEARCHFAIL
```

このエラーはランダムに起こります。ファイルは常にエラー・メッセージで記述されますが、ファイルは正しく提供されています。

4.2 処置の必要な一般的なエラー

次の場合には、インストレーションでエラーが発生することがあります。

- オペレーティング・システムに問題がある。
- 必須ソフトウェアに問題がある。
- インストレーションを実行するために必要なクォータが不足している場合
- インストレーションを実行するのに必要システム・パラメータ値が不足している場合
- OpenVMS ヘルプ・ライブラリが現在使用中。

- SYS$LIBRARY:IMAGELIB.OLB 及び SYS$LIBRARY:STARLET.OLB が存在しません。 OpenVMS を変更すると、これらのファイルは削除されます。

これらの原因によってエラー・メッセージが出力された場合には、 OpenVMS のシステム・メッセージ、回復作業、インストレーションに関する解説書を参照してください。これらのどの条件にも該当しない場合には、メッセージに示される適切な処置を実行しなければなりません。

4.3 処置の必要な日本語 ALL–IN–1エラー

日本語 ALL–IN–1のハウスキーピング・プロシージャをカスタマイズしている場合には、アップグレード・インストレーション、アップデート・インストレーション追加言語インストレーションの際に、以下のようなエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
%OA-I-LASTLINE,"ALL-IN-1 running -- removing house keeping jobs from queue"
Checking the housekeeping schedule to see if any procedures need deleting
Deleting ADS from HOUSE KEEP$BATCH
%OA-I-LASTLINE,%RMS-E-FNF, file not found

     SYSTEM finished using ALL-IN-1 at 12-May-1996 11:23

%A1LUS-1-RELANK, Restoring the remaining LANGUAGE kit savesets
```

インストレーション・プロシージャはインストレーション中にバッチ・キューからすべてのハウスキーピング・ジョブを削除し，インストレーションの最後に再度キューイングします。カスタマイズされているハウスキーピング・プロシージャがキューイングされる際に，存在しない旧バージョンのプロシージャが呼出されると，上記のようなエラー・メッセージが表示されます。このようなエラー・エッセージが表示されたら，該当するハウスキーピング・ジョブをバッチ・キューから削除し，インストレーション終了後に再度 SYS$STARTUP:A1V32START.COM を起動してください。

4.4 インストレーション後の障害

注意

インストレーション・プロシージャーがインストレーション後の段階に到達した時、主たる導入は完了します。インストレーション後タスクが失敗した場合、メッセージは、インストレーションが失敗し、日本語 ALL–IN–1を再導入する必要があることを指摘するように表示されます。これを行う必要はないです。即ち、このセクションで記述されているように、 A1$POSTINSTALL.COM を再実行しさえすれば良いのです。

元々インストレーションを実行したノード上で A1$POSTINSTALL.COM を再実行しなければなりません。

自動導入後タスクを実行するのに使用されたプロシージャは導入中に書かれます。その内容は、導入タイプ及びあなたのシステムの仕様条件に依存します。コマンド・ファイルは、 A1$POSTINSTALL.COM と呼ばれ、 OA$LIB_language へ提供されます。

導入後タスクが失敗した場合、調査を目的としたメッセージが表示されます。導入後フェーズ中で導入が失敗した場合、以下の一つを行うことができます。

- 元々インストレーションを実行したノード上で A1$POSTINSTALL.COM を再実行してください。
- 失敗したタスクに対するコマンドのみを使用して、あなた自身のコマンド・プロシージャーを作成するために、 A1$POSTINSTALL.COM を編集してください。

導入が完了した時、実行すべきいくつかの手作業インストレーション後タスクがまだあります。第 5 章をご参照ください。

自動導入後タスクが完了した後で、インストレーション・プロシージャは以下を表示します。

```
Installation of A1 V3.2 completed at <hh:mm>
```

EXIT を入力して、 VMSINSTAL から抜けるために CTRL/Z を押してください。

導入中、プロセス・シンボル・テーブル内のエントリをインストレーション・プロシージャが削除もしくは変更することにご注意ください。ですから、システム管理者のアカウントを続けて使用する場合、あなたはログアウトし、再度ログインしなければなりません。

4.5 インストレーション障害

導入後フェーズの前に導入が失敗した場合、以下のメッセージが表示されます。

```
%VMSINSTAL-E-INSFAIL, The installation of ALL-IN-1 V3.2 has failed.
```

注意

導入が失敗した場合、始めから導入をリスタートしなければなりません。

4.5.1 セーフティ・モードでのアップグレード・インストレーションの障害

導入がセーフティ・モードで実行されている場合、以下のメッセージの前に障害が生じても、何のアクションを取る必要がありません。

```
Files will now be moved to target directories
```

このメッセージの後で導入が失敗した場合、バックアップから元のシステムをリストアしてください。そうすれば、元のシステムを使用できるように戻るか、または、導入を再度開始することができます。

4.5.2 非セーフティ・モードでのアップグレード・インストレーション障害

非セーフティ・モードで導入が実行される場合、バックアップから元のシステムをリストアしてください。そうすれば、元のシステムを使用するように戻すことができますし、または、再度導入を開始することができます。

4.5.3 フル・インストレーション

フル・インストレーションが失敗した場合、全ての作成されたアカウント、識別子及びディレクトリを削除し、再度、導入を開始してください。

4.5.4 不十分なダイナミック・メモリーを理由とする障害

Alpha システム上の導入は以下のエラー・メッセージとともに失敗するかもしれません。

```
%SYSTEM-F-INSFMEM, insufficient dynamic memory
```

このエラーが発生した場合は、 CTLPAGES に対する値が十分高いことをチェックしなければなりません。デフォルト値、 100 を使用している場合、 200 に増加させ、導入をリスタートさせなければなりません。第 1.7.2 項をご参照ください。

4.6 IVP 実行中のエラー・メッセージ

IVP 実行時に以下の情報及びエラー・メッセージが表示されます。

```
%OA-I-LNF, Error opening form library "THIS_IS_A_TEST"
-RMS-E-FNF, file not found

%OA-W-INVGET, Symbol "THIS_IS_A_TEST" not found

%OA-E-BADLIB, Error occurred while precompiling THIS_IS_A.TEST
form library
```

IVP により実行されるテストの一部ですので、これらのメッセージは無視することが出来ます。

IVP 実行時に他のエラー・メッセージが発生した場合は、以下を行ってください。

1. 導入時に発生するかもしれないエラーに対する導入ログをチェックしてください。

2. ファイル ALLIN1_IVP.LOG をチェックしてください。このファイルは、 IVP の結果を含んでいませんが、 IVP 実行時のALL–IN–1を実行している結果が含まれています。このファイルは、導入を実行したディレクトリの中にあります。
3. 以下のプロシージャの中のエラーをチェックしてください。
   - スタートアップ・ファイル
     SYS$STARTUP:A1V32START.COM:

     の実行時の論理名の作成
   - インストレーション後の自動的な作業

     イメージ・ファイルの導入
     フォーム・ライブラリのコンパイル及び導入
4. 日本語 ALL–IN–1 TXL が正しくコンパイルされ、導入され、かつ、導入後コマンド・ファイルが実行されている時、エラー・メッセージを受信した場合、リコンパイルすることをお確かめください。
5. OA$SHAREnnnn ディレクトリ (OpenVMS ユーティリティを記述しているマニュアルをご参照) を含んでいるディスク上のクォータを使い果たしていないことをチェックしてください。
6. IVP アカウントに対する詳細が、以下のように正しく完了していることをチェックしてください。
   - 全ての日本語 ALL–IN–1特権が、 YES にセットされている。
   - IVP ユーザー・ディレクトリは、ALL–IN–1管理者のアカウントに対し記述されたディスク及びサブディレクトリを指します。例えば、以下の通りです。

     ```
     a1device:[ALLIN1.IVPUSER]
     ```

     ここで`a1device`は、導入中にあなたが記述したデバイスです。
   - 日本語 ALL–IN–1アカウント、 IVP は、日本語 ALL–IN–1管理者の OpenVMS アカウントからアクセスされます。
7. ALL–IN–1 を実行し、エラーに関るより多くの情報を見つけるために、 IVP 実施中に失敗したエリアを使用してみてください。

ALL–IN–1 管理者の IVP アカウントへログインしてください。

```
$ ALLIN1 /USERNAME=IVP
```

ALL–IN–1管理者ガイドの中で記述されているようにマニュアルで各 IVP テストを実行してください。

注意

IVP は導入さている現在のオプション言語の言語文脈内で実行され、インターナショナル・ベース・システムもテストします。

ほとんどの IVP は、通常、カスタマイズから独立しているレベルで ALL–IN–1 を演習及びテストするようデザインされています。しかしながら、 ALL–IN–1 の電話帳サブシステムをカスタマイズしている場合、ディスプレイ・グラフィック (IDG) プロシージャは失敗するかもしれません。これは、典型的なアプリケーションとしてターミナル・グラフィックを演習するよう使用されたデモンストレーション・テストです。

4.7 IVP 障害

IVP が失敗した場合、以下のメッセージが表示されます。

```
The A1 V3.2 Installation Verification Procedure failed.

%VMSINSTAL-E-IVPFAIL, The IVP for A1 V3.2 has failed.
```

5

インストレーション後の作業

この章では、日本語 ALL–IN–1をシステムで使用するための最終的な設定作業について説明します。これらの作業の大部分は必ずしも実行しなくてもよく、特定のタイプのシステムや構成にだけ適用されるものもあります。

日本語 ALL–IN–1が使用される前に、日本語 ALL–IN–1マネージャがユーザの作業環境を設定するため、いくつか追加設定作業を実行しなければなりません。これらの作業は日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドで詳しく説明されています。

ALL–IN–1を動作しているノードからインストレーション後の作業を実行しなければなりません。

5.1 手作業によるインストレーション後の作業のチェックリスト

表 5–1 には、手作業によるインストレーション後の作業を示します。

表 5–1 インストレーション後の作業

作業	インストレーション・タイプ	参照情報
VMS クラスタ・システムのすべてのノードで日本語 ALL–IN–1を起動します。	フル、アップグレードあるいは追加アーキテクチャ	第 5.2 節

(次ページに続く)

表 5–1 (続き) インストレーション後の作業

作業	インストレーション・タイプ	参照情報
日本語 ALL–IN–1のサイト固有のスタートアップ・プロシージャを作成あるいは変更します。	フルあるいはアップグレード	第 5.3 節
OpenVMS のサイト固有のスタートアップ・プロシージャを変更します。	フル、アップグレードあるいは追加アーキテクチャ	第 5.4 節
VMS クラスタ・システムで DCLTABLES を置換します。	フル、アップグレードあるいは追加アーキテクチャ	第 5.5 節
不要なファイルを削除します。	アップグレードあるいは追加言語	第 5.6 節
必要に応じて不足しているイメージをインストールします。	フル、アップグレードあるいは追加アーキテクチャ	第 5.7 節
アプリケーションあるいはサイト固有フォーム・ライブラリが含まれる古くなったフォーム・ライブラリを再コンパイルします。	アップグレード	第 5.8 節。この節では、インストレーション後に自動的にコンパイルされるフォーム・ライブラリも示されます。

(次ページに続く)

表 5–1 (続き) インストレーション後の作業

作業	インストレーション・タイプ	参照情報
カスタマイゼーションをマイグレーションします。 • CART 問題解決プロシージャを実行します。 • カスタマイゼーションを変更したファイルに再適用します。 • カスタマイズしたヘルプ・ファイルを置換します。 • 不要なファイルを削除します。	カスタマイズしたシステムのアップグレード	第 5.10 節
カスタマイズ管理を使用して SITELINK31 をマイグレーションします。	アップグレード、追加言語とアーキテクチャ・サポート	第 5.9 節
コード・レベルのカスタマイゼーションを統合するために日本語 ALL–IN–1をリンクします。	コード・レベルのカタマイズしたシステムのアップグレードと追加アーキテクチャ (インストールされた場合)	第 5.11 節
RIGHTSLIST.DAT ファイル内のエントリをチェックします。	アップグレード	第 5.12 節

(次ページに続く)

表 5–1 (続き) インストレーション後の作業

作業	インストレーション・タイプ	参照情報
リモート・メールを設定します。	フルあるいはアップグレード 注: ローカル・メールはインストレーション後すでに設定されています。	MAILbus 400 MTA および Digital X.500 を使用するシステムの新規インストレーションの場合には、第 5.13 節。 メッセージ・ルータを使用するシステムのアップグレードあるいは新規インストレーションの場合には、第 5.14 節。
WPS–PLUS/VMS ファイルを変換します。	ユーザをWPS–PLUS /VMS アカウントから日本語 ALL–IN–1へのマイグレーション	第 5.15 節
システム論理コマンド・プロシージャにWPS–PLUSコマンド・プロシージャを追加します。	フル、あるいは省略時のエディタとしてWPS–PLUSを使用しているシステムのアップグレード	第 5.16 節
必要な場合には、ファイル・キャビネット・サーバ・ライセンスをインストールします。	フルあるいはアップグレード	第 5.17 節
必要な場合には、 CDA DOC_ STYLE ファイルを適切な場所に移動します。	CDA$LIBRARY がシステムに存在しない場合	第 5.18 節

(次ページに続く)

表 5–1 (続き) インストレーション後の作業

作業	インストレーション・タイプ	参照情報
DECtrace のファシリティ定義を更新します。	DECtrace をすでにインストールして、使用したい場合	第 5.19 節
ユーザ環境を設定します。	フルあるいはアップグレード	日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイド
ファイル・キャビネット・サーバをチューンします。	フルあるいはアップグレード	日本語 ALL–IN–1管理サーバー
センダーとフェッチャ数を決定します。	フルあるいはアップグレード	日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイド

5.2 VMS クラスタ・システムのすべてのノードで日本語 ALL–IN–1の起動

日本語 ALL–IN–1スターとアップ・プロシージャ、 SYS$STARTUP:A1V32START.COM、は日本語 ALL–IN–1で提供され、インストレーションを正常終了した際に、インストレーションで使用されたノードで自動的に実行されます。

VMS クラスタで日本語 ALL–IN–1を実行する場合には、クラスタ内の各ノードで SYS$STARTUP:A1V32START.COM を実行して、日本語 ALL–IN–1を起動しなければなりません。 DCL プロンプトからマニュアルで A1V32START.COM を実行する場合には、日本語 ALL–IN–1構成ファイル OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT のロケーションを指定しなければなりません。これをコマンド・ラインで指定しない場合には、 OpenVMS がプロンプトで表示します。

日本語 ALL–IN–1で新しい共有ディレクトリを作成する場合には、クラスタ内の各ノードで新しいシステム論理名を定義しなければなりません。 VMS クラスタで日本語 ALL–IN–1の実行について、日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドの第５章を参照してください。

5.3 日本語 ALL–IN–1サイト固有スタートアップ・プロシージャの作成あるいは変更

日本語 ALL–IN–1スタートアップ・コマンド・プロシージャを変更するには、サイト固有コマンド・プロシージャを作成しなければなりません。サイト固有スタートアップ・コマンド・プロシージャは日本語 ALL–IN–1スタートアップ・コマンド・プロシージャを実行する際に、自動的に実行されます。

次のタイプのサイト固有コマンド・プロシージャを作成することができます。

- 固有のスタートアップ・コマンド・プロシージャA1V32_SITE_START.COMをOA$SITE_BUILD_SHARE_IND ディレクトリに作成します。
- 複数言語ALL–IN–1システムにインストールされている各言語に対して、言語固有のスタートアップ・コマンド・プロシージャ OA$SITE_language_START.COM を OA$SITE_BUILD_LLV_IND ディレクトリに作成します。

  device:[directory.SITE.SOURCES_language])

  ここでは、deviceは言語ファイルを持っているデバイスです。directoryは日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 システムの最上位ディレクトリの名前です。

  論理名 OA$SITE_BUILD_LLV_IND を使用することにより、省略時の言語のディレクトリを指定できます。

アップグレードしている場合には、保存したいサイト固有のスタートアップ・コマンド・プロシージャがあります。そのコマンド・プロシージャの名前をA1V31_SITE_START.COMからA1V32_SITE_START.COMに変更してください。

コマンド・ファイルの内容がまだ有効かと日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 に必要かを確認します。次の変更を注意してください。

- OA$MTI_AREA 論理名が現在 A1CONFIG で定義されいます。
- OA$A1_CLUSTER_NODE が現在 A1CONFIG で定義されいます。

5.4 サイト固有のスタートアップ・プロシージャの変更

DCL プロンプトから A1V32START.COM を実行する際に、日本語 ALL–IN–1の構成ファイル OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT が格納されている場所を指定しなければなりません。指定しなかった場合には、 OpenVMS は場所を要求プロンプトを表示します。日本語 ALL–IN–1スタートアップ・プロシージャを OpenVMS サイト・スタートアップ・プロシージャに統合する際に、A1CONFIG.DAT ファイルが格納されている場所を指定しなければなりません。

```
$ @SYS$STARTUP:A1V32START.COM location
```

ここでは、location は A1CONFIG.DAT が格納されている場所です。

```
device:[directory.DATA_SHARE]
```

device は日本語 ALL–IN–1データ・ファイルに対して指定した装置、directory は日本語 ALL–IN–1データ・ファイルに対して最上位ディレクトリです。

OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT が格納されている場所は、インストレーションのログを参照することにより確認できます。

注意

サイト固有のスタートアップ・プロシージャの設定を選択する場合には、すべての日本語 ALL–IN–1必要製品が日本語 ALL–IN–1の前に起動されることを確認しなければなりません。これは転送ソフトウェアと DEC Notes、また日本語 ALL–IN–1で CDA コンバータを使用する場合に DECwindows/Motif が含まれます。

5.4.1 Digital X.500 および MAILbus 400 MTA を使用するためのインストレーション

Digital X.500 および MAILbus 400 MTA を使用する新規日本語 ALL–IN–1システムをインストールした場合には、日本語 ALL–IN–1の前に、必要な転送製品を起動することを確認しなければなりません。次 3 つのファイルが順番に実行されることを確認します。

1. SYS$STARTUP:OSAK$START.COM
2. SYS$STARTUP:DXD$COMMON_STARTUP.COM
3. SYS$STARTUP:MTA$COMMON_STARTUP.COM

5.4.2 メッセージ・ルータを使用するシステムのインストレーション

メッセージ・ルータを使用する日本語 ALL–IN–1システムの場合には、メッセージ・ルータ・ソフトウェアが日本語 ALL–IN–1の前に起動することを確認します。

例として、表 5–2 は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からアップグレードした後に日本語 ALL–IN–1スタートアップ・プロシージャを統合するために、どのように OpenVMS 固有スタートアップ・ファイルを変更するかについて説明します。これはシステムを再起動する後、日本語 ALL–IN–1環境を再構成することを確保します。

表 5–2 OpenVMS 固有スタートアップ・ファイルの変更

いストレーション・タイプ	実行する事項
フルと第二アーキテクチャの追加 (共通スタートアップ・ファイルの使用を除いて)	ファイルを変更: 1. 下記の行を検索: $ @SYS$MANAGER:STARTNET.COM and $ @SYS$MANAGER:MB$CONTROL START=(DDS,TS,...,ER)[1] 2. これらの行につづいて、下記のように追加: $ @SYS$STARTUP:A1V32START.COM location[2]
(	
日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からのアップグレードと第二アーキテクチャの追加 (共通スタートアップ・ファイルの使用を除いて)	行を変更 $ @SYS$STARTUP:A1V31START.COM location[2] 下記のように変更 $ @SYS$STARTUP:A1V32START.COM location[2]
リモートのメッセージ・ルータを動作しているとメッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービルを使用している	日本語 ALL–IN–1スタートアップ・プロシージャのためのエントリの前に、下記のエントリを追加: $ @SYS$STARTUP:DDS$STARTUP.COM node nodenumber nodeはメッセージ・ルータがインストールされたノードの名前、nodenumberはリモート・メッセージ・ルータ・ノードのディレクトリ・サービスのノード番号です。

[1]正確なコマンド行は動作しているメッセージ・ルータ要素によります。

[2]locationは日本語 ALL–IN–1構成ファイル OA$DATA_SHARE:A1CONFIG.DAT の格納場所です。

5.5 VAX クラスタ・システムでの DCLTABLES の置換

クラスタ・システムに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールした場合には、クラスタ内で日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールしていないノー

ドで DCLTABLES を置換しなければなりません。これらの各ノードで次のコマンドを入力してください。

```
$ INSTALL
INSTALL> REPLACE SYS$SHARE:DCLTABLES /OPEN /SHARE -
_INSTALL> /HEADER_RES
INSTALL> EXIT
```

この操作は日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 のインストレーション後に 1 回だけ実行してください。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールするために使用したノードでは、日本語 ALL–IN–1インストレーション・プロシージャがこの処理を自動的に実行します。

5.6 不要なファイルの削除

日本語 ALL–IN–1をアップグレードまたはアップデートした場合には、 SYSTEM ディレクトリにさまざまなファイルが格納されたままの状態になります。これらのファイルは削除して、ディスク・スペースを拡大することができます。削除可能なファイルは次のとおりです。

- 日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 のアップグレードの場合

  SYS$HELP:A1031.RELEASE_NOTES
  SYS$HELP:A1Llang031.RELEASE_NOTES
  SYS$HELP:A1Cmarket031.RELEASE_NOTES, if available
  SYS$STARTUP:A1V31START.COM
  SYS$HELP:TLC025.RELEASE_NOTES

5.7 不足しているイメージのインストレーション

スタートアップ時にインストールされていないイメージに関するエラー・メッセージが表示された場合には、スタートアップ・プロシージャを再実行する前に、Install ユーティリティを使用してこれらのイメージをインストールしてください。この方法でインストールしなければならないイメージは、ALL–IN–1イメージと統合したオプション・プロダクトで参照されるイメージです。たとえば、次のコ

マンドは日本語VAX DATATRIEVEで参照される RDBSHR イメージをインストールします。

```
$ INSTALL
INSTALL> ADD SYS$SHARE:RDBSHR /OPEN /HEADER_RES /SHARED
```

Install ユーティリティについての詳しい説明は、 OpenVMS の解説書を参照してください。

5.8 フォーム・ライブラリの再コンパイル

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 からアップグレードするときに、アップグレードで置換されないフォーム・ライブラリを元のシステムでコンパイルしていた場合には、次のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
Obsolete form library <name> please recompile
```

このメッセージが表示された場合には、フォーム・ライブラリを再コンパイルしてください。

注意

アプリケーションあるいはサイト固有フォーム・ライブラリと自分で使用するアプリケーションをもコンパイルしなければなりません。

下記のフォーム・ライブラリは自動的にコンパイルされます。

- OAFORM
- SITEOAFORM
- MEMRES
- SITEMEMRES
- OAN$FORMS
- SITEOAN$FORMS

追加したコードあるいは手作業で他のフォーム・ライブラリをコンパイルした場合には、インストレーション後にこれらを再コンパイルしなければなりません。システム・カスタマイズ管理 (CSZ) メニューの (PCF) オプションを利用してください。日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドを参照してください。

5.9 カタマイズ管理の使用で SITELINK31 のマイグレーション

SITELINK32.COM ファイルはカタマイズ管理で制御されます。 SITELINK31.COM のカスタマイゼーションは、 SITELINK32.COM との間にく互換性があるかどうかを確認してください。

カスタマイズ管理を使用して、サイト・リンクファイル SITELINK32.COM のベース・テンプレート・バーションを変更して、 OA$SITE_BUILD の SITELINK31.COM を統合します。 SITELINK32.COM のカスタマイゼーションを確認して、カスタマイズしたバーションを LIVE へ移動します。カスタマイゼーションを確認することより、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 との間に互換性があるかどうかを確認してください。確認するまで日本語 ALL–IN–1とリンクしないでください。第 5.10 節を参照してください。

次のような再リンクをお薦めします。

```
$ SET DEFAULT OA$BUILD_SHARE_ARCH
$ @OA$BUILD:A1LNKDRV
```

5.10 アップグレード後カスタマイゼーションのマイグレーション

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールしたすぐ後、ユーザに日本語 ALL–IN–1へのアクセスを与える前に、必要なエレメントに対してカスタマイゼーションを確認してください。

アプリケーション維持メニューの矛盾確認 (CC) オプションを使用して、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールした後、 CART を再実行することができます。日本語 ALL–IN–1内で CART を実行する際に、サイト・エレメント報告を

作成しません。ただし、詳細および概略報告と CART 問題解決が生成されます。これらは新しい要素としてカスタマイズ管理に格納されています。

CART を再実行する場合、前の CART 詳細および概略報告が保存されません。保存したい場合には、カタマイズ管理のコピー (CO) オプションを使用して、名前を変更して、同じ領域に保存します。たとえば、 CM_CART_SUMMARY_V32$PRIMARY を CM_CART_SUMMARY_V32$PRIMARY_19FEB にコピーします。すでに処理したすべてのエレメントが状態コード F が付いています。

カスタマイゼーションの確認

1. カスタマイズ管理 (CM) サブシステムから、必要変更とマークされた各エレメントを選択して、それと新しい基本エレメントとの間の違いを印刷します。
2. 違いの確認

   新機能が追加あるいは変更された箇所を注意してください。シンボルの変更を注意してください。アップグレード計画の情報を使用して、システムの実行に必要な変更を実施します。
3. カスタマイゼーションをテストして、正常に動作する場合、エレメントをライブ領域へ移動してください。
4. ユーザがシステムの再使用を許可する前に、推奨したエレメントのカスタマイゼーションを必要エレメントの確認のように確認してください。

   推奨エレメントの矛盾を解決しない場合、ユーザがカスタマイゼーションあるいは日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の全機能へアクセスすることができません。
5. 状態コード D と報告された矛盾のあるエレメントを確認します。日本語 ALL–IN–1概要及び構築計画ガイドを参照してください。状態コード D は、カスタマイゼーションがすでに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 から削除されたエレメントを呼び出すことを示します。

   状態コード A が付いているカタマイズしたエレメントから呼び出すエレメントには、カタマイズしたバーションが存在しません。第 5.10.2 項で説明した削除エレメントを削除する場合、カスタマイゼーションが失敗になります。これらのエレメントが削除されないよう、コマンド・プロシージャ DELETE_OBSOLETE_FILES.COM を変更します。第 5.10.2 項を参照してく

ださい。カタマイズ管理を使用して、新しいカタマイズ・エレメントを作成して、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 に存在しなくなる参照の基本エレメントを置換します。

カタマイズ管理を使用して、開発領域内の状態コード A と報告されたエレメントをコピーします。 CART を再実行する場合、これらのエレメントが状態コード H と報告されることになります。

6. ただいま、ユーザに日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 へのアクセスを許可することができます。時間があれば、情報エレメントの矛盾を解決してください。

5.10.1 CART 問題解決プロシージャの実行

CART 問題解決プロシージャは個々のスクリプトを呼び出して、各状態コードを処理します。スクリプトが CM_CART_SCRIPTn と呼ばれます。ここの n は CART 状態コードです。

CART 問題解決プロシージャに呼び出すスクリプトを実行と変更するには、エレメントが格納されている領域に対して、アプリケーション保守者特権をまたなければなりません。日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドを参照してください。CART 問題解決プロシージャを実行するには、アプリケーション保守者の矛盾確認 (CC) メニューから実行プロシージャ (EP) オプションを使用します。

CART 問題解決プロシージャが特定状態コードのエレメントの処理方法を変更するには、下記のように実行します。

1. カタマイズ管理 (CM) サブシステムに入力します。
2. 基本エレメント・アクセス (ABE) オプションを使用して、 CART 解決スクリプトを選択します。
3. 開発領域内の変更したいスクリプトをコピーします。
4. カタマイズ管理を使用してスクリプトを変更します。

必ずしも CART 問題解決プロシージャを使用して矛盾を解決しません。スクリプトが適当な行動を提供しない場合には、サイトで矛盾を解決して、 CART 問題解決プロシージャを使用しなくてもよいです。

一部の情報コードの矛盾を CART 問題解決プロシージャで解決することができます。 CART 問題解決プロシージャを実行する前に、よく確認しべきです。カタマイズしたエレメントが削除エレメントを呼び出さないことを確認します。状態コード D の矛盾を解決するに関して、第 5.10 節を参照してください。

5.10.2 不要なファイルの削除

コマンド・プロシージャ DELETE_OBSOLETE_FILES.COM は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 に不要になるファイルを削除するには、提供されます。

注意

CART 問題解決プロシージャを実行したすぐ後に、このプロシージャを実行しないでください。実行する前に、必ずこのファイルを確認してください。すべてのカスタマイゼーションが正確に動作され、エレメントがこのプロシージャに削除されないようになることを確認してください。

必要に応じて、 DELETE_OBSOLETE_FILES.COM を変更して、特定のファイルの削除を停止することができます。例えば、あるカスタマイゼーションがすでにベース・キットから削除されたエレメントを呼び出し、またそのエレメントがこのプロシージャに削除されます。

例えば、状態コード A のエレメントのお薦めの解決方法は:

- CART 問題解決プロシージャを実行して、これらのエレメントに対するレコードをカスタマイズ管理データベースから削除します。
- OA$LIB:DELETE_OBSOLETE_FILES.COMを実行して、エレメントを削除します。

DELETE_OBSOLETE_FILES.COM を実行するには、 DCL から次のように入力します。

```
$ @OA$LIB:DELETE_OBSOLETE_FILES.COM language
```

ここのlanguageはALL–IN–1システムの言語です。システムに追加言語をインストールした場合には、各追加言語に対してこのプロシージャを実行することができます。

5.10.3 データ・ファイルへのカスタマイゼーションの再適用

第 1.9.1 項の指示に従ってカスタマイズしたデータ・ファイルをコピーした場合は、この節を読んでください。

この節で、 PROFILE.DAT は例として使用されています。データ・ファイルの変更を再適用するには、次のように実行します。

1. できれば、ALL–IN–1ディレクトリ構造以外に新しいベース PROFILE.DAT ファイルのコピーを保存します。

   ```
   $ COPY OA$DATA:PROFILE.DAT disk:[directory]BASE_PROFILE.DAT
   ```

2. カスタマイズ管理を使用して、新しいベース PROFILn フォームのコピーを保存します。例えば、それらのフォームを BASE_PROFILn にコピーして、.FILE のように名前を変更して、ベース・フォーマット PROFILE ファイルのバックアップ・コピーの格納場所を指定します。
3. フォームをライブにします。
4. カスタマイズ管理を使用して、カスタマイゼーションを新しいベース PROFILn フォームと PROFILE.FDL に追加します。
5. フォームと FDL ファイルをライブにします。
6. PROFILE.DAT をカスタマイズしたフォーマットに変換します。

   ```
   <OA$CNV_CONVERT BASE_PROFIL,PROFIL
   ```

7. オリジナルのカスタマイズした PROFILE.DAT から一部のデータを回復する必要がある場合には、 CUSTOM_PROFIL データセットをループするスクリプトをライトして、また新しいデータを PROFIL データセットに書込みます。

例えば、

```
FOR CUSTOM_PROFIL DO WRITE CHANGE PROFIL -
%KEY = .%KEY, additional_field = .additional_field
```

5.10.4 アプリケーションのヘルプ・モジュールの置換

ヘルプのカスタマイズについては、Application Programming: Guideを参照してください。

アップグレードした後に、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 標準ヘルプ・ライブラリと、 OA$LIB:OAHELP.HLB と OA$LIB:SITEHLPSOURCE.HLB をベース領域からライブ領域 OA$SITE_LIB_language にコピーします。カスタマイズ管理はヘルプ・ライブラリのライブ・バージョンと開発バージョンが同じであると知らせて、また継続したいかどうかを質問します。継続するには、 yes と答えます。

カスタマイズ管理を使用して、ヘルプ・モジュールのカスタマイゼーションを再作成しなければなりません。基本エレメント・アクセス (ABE) オプションを使用して、ヘルプ・モジュールの基本バージョンを取得します。コピー (CO) オプションを使用して、カスタマイズしたモジュールを、変更することができる開発領域にコピーします。モジュールを保存する際に、日本語 ALL–IN–1がそれをフォーマットして、適当なヘルプ・ライブラリに入れます。ヘルプをテストした後に、ライブ領域へ移動するとマークして、使用できるようになります。

5.11 コード・レベルのカスタマイゼーションを統合するための日本語 ALL–IN–1のリンク

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 はインストレーション時にリンクされますが、既存のシステムに対して行ったカスタマイゼーションは統合されません。したがって、カスタマイゼーションをリンクしたい場合には、インストレーションが終了した後で日本語 ALL–IN–1を再リンクしなければなりません。日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドの第 2 章を参照してください。

5.12 RIGHTSLIST.DAT 内のエントリの確認

ALL_IN-1 で使用される OpenVMS ユーザ名が RIGHTSLIST.DAT ファイルに同じの名前の対応エントリを持っています。そして共有のファイルとシステム管理を正確に操作することができます。日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 にアップグレードをしているときに、スクリプト OA$LIB:SM_CHECK_PROFILE を実行して、この要求に達しないアカウントを示す報告を生成します。

5.13 MAILbus 400 MTA を使用するリモート・メールの設定

MAILbus 400 MTA を使用してメールを送受信する前に、 Digital X.500 と MAILbus 400 MTA の設定作業を正常終了しなければなりません。設定作業について、日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイドのDigital X.500 および MAILbus 400 MTA を使用する新規システムの設定の章で説明されています。

5.14 メッセージ・ルータを使用するリモート・メールの設定

インストレーション後に、ローカル・メールがすでに設定されています。リモート・メールのために、メッセージ・ルータを使用したい場合には、サイトの必要に応じて、表 5–3 で説明した作業を一部あるいはすべて実行してください。

下記のリモート・メッセージ・ルータのタイプによって、作業を実行しなければならなりません。

- 同じ VMS クラスタの VAX ノードにインストールされる場合、
  - メッセージ・ルータ・ノードに日本語 ALL–IN–1がインストールされている。
  - メッセージ・ルータ・ノードに日本語 ALL–IN–1がインストールされていない。
- 日本語 ALL–IN–1と違う同じ VMS クラスタの VAX ノードにインストールされる場合。

表 5–3　リモート・メールの設定作業

作業	参照情報
リモート・メッセージ・ルータ・サーバ・ノードを使用している場合、日本語 ALL–IN–1メールボックスのためのメールボックス・エントリがそのノードにあることを確認します。 インストレーション前作業でこれをすでに実行したかもしれません。	第 5.14.1 項
日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 を混在アーキテクチャ・クラスタにインストールされている場合、メッセージ・ルータ・ノードにあるメールボックス・エントリを変更しなければなりません。	第 5.14.2 項
リモート・ノードにある MRGATE を使用している場合、各ノードを MRGATE の使用のように設定してください。	第 5.14.3 項
リモート・メール・ディレクトリを設定します。	第 5.14.4 項。日本語 ALL–IN–1が同じ VMS クラスタのメッセージ・ルータを使用して、また日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータ・ノードにインストールされている場合。 第 5.14.4.2 項。日本語 ALL–IN–1が別の VMS クラスタのメッセージ・ルータを使用して、あるいは日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータ・ノードでないところにインストールされている場合。 メッセージ・ルータを使用する日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 の新規インストレーション後、 Digital X.500 を使用する場合、日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイドで説明した指示に従って、 Digital X.500 を設定しなければなりません。
リモート・メール・ディレクトリを起動するために、サイト固有スタートアップ・プロシージャを変更してください。	第 5.14.5 項

5.14.1　日本語 ALL–IN–1のメールボックスを作成

この節は、日本語 ALL–IN–1が別の VMS クラスタのメッセージ・ルータを使用している場合に適用されます。インストレーション前作業でこれをすでに実行したか

もしれません。すでにメールボックスを作成した場合、これを実行する必要がありません。

ノード (あるいはクラスタ) のための日本語 ALL–IN–1メールボックスはリモート・メッセージ・ルータ・ノードにメールボックス・エントリが必要です。

メールボックスの追加

ステップ	行動
1	メッセージ・ルータが実行されているノードの MBMANAGER アカウントにログインし、次のコマンドを入力します。 `$ RUN SYS$SYSTEM:MRMAN`

2	MRM>というプロンプトに対して次のように入力します。
	
	`MRM> ADD localnodeA1`
	`/PASSWORD=password /COMPLETE_MESSAGES`
	`/IGNORE_SENDER /SERVICE_MESSAGES /SUPPRESS_DELIVERY_REPORTS`
	
	ただし、
	
	• localnodeは日本語 ALL–IN–1をインストールしたノードあるいはクラスタの名前です。この名前はメッセージ・ルータにとって固有の名前でなければなりません。
	
	• passwordは日本語 ALL–IN–1をインストールするときに指定したメールボックス・パスワードです。
	
	パスワードはメッセージ・ルータのメールボックス・ディレクトリと日本語 ALL–IN–1の両方で同じでなければなりません。メールボックス・パスワードを変更するには、メール管理メニューの作業条件設定 (SOC) オプションを使用します。詳しくは日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイドを参照してください。

3	メッセージ・ルータ管理ユーティリティを終了します。 `MRM> EXIT`

メールボックスについての詳しい説明はメッセージ・ルータに関する解説書を参照してください。

5.14.2 メッセージ・ルータ・メールボックス・エントリの変更

混在アーキテクチャ・クラスタを持って、また同じクラスタのメッセージ・ルータを使用する場合には、メッセージ・ルータ・メールボックス・エントリを変更しなければなりません。インストレーション・プロシージャはメッセージ・ルータ・ノードに識別子/OWNER=ALLIN1 を付くメールボックス・エントリを作成します。 Alpha ノードはこのメールボックスに接続できません。メールボックスに/OWNER 識別子があるからです。メッセージ・ルーｔ・ノードの日本語 ALL–IN–1メールボックス・エントリを変更して識別子を削除します。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:MBMAN
MRM> MODIFY A1/NOOWNER
MRM> EXIT
```

ただし、A1はメッセージ・ルータ・メールボックスの名前です。

5.14.3 VMSmail ゲートウェイの構成

メッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイが VMS クラスタ内の 1 つのノードにインストールされた場合、他の日本語 ALL–IN–1 ノードもアクセスできるように設定することができます。

VMSmail ゲートウェイが起動されていない各ノードで MRGATE という論理名を次のように定義しなければなりません。

```
node::MR%
```

ただし、nodeはゲートウェイが実行されているノードです。

ネットワーク内の別のノードの VMSmail ゲートウェイを使用することができます。それはクラスタにとってリモートです。それを利用可能にするには、メッセージ・ルータがクラスタ内の 1 つのノードにインストールされている必要があります。メッセージ・ルータを動作しているクラスタ内の VAX ノードのメッセージ・

ルータ転送サービスのメールボックス・ディレクトリにリモートのゲートウェイのエントリを作成します。

1. メッセージ・ルータを動作しているクラスタ内の VAX ノードの MBMANAGER アカウントにログインします。
2. 次のコマンドを入力します。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:MRMAN
MRM> ADD MRGATE/REPLACE="MRGATE @node"
```

ただし、nodeはゲートウェイがインストールされているノードです。

3. メッセージ・ルータ管理ユティリティを終了します。

```
MRM> EXIT
```

詳しくはメッセージ・ルータに関する解説書を参照してください。

5.14.4 メール・ディレクトリとしてメッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスの設定

必要な作業は下記の場合によって違います。

- メッセージ・ルータは同じ VMS クラスタにあって、かつ日本語 ALL–IN–1がインストールされている。第 5.14.4.1 項を参照してください。
- メッセージ・ルータは別の VMS クラスタにあって、あるいは日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータ・ノードにインストールされていない。第 5.14.4.2 項を参照してください。

5.14.4.1 メッセージ・ルータが同じ VMS クラスタにある

日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータと同じ VMS クラスタにインストールされ、また日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータ・ノードにインストールされる場合、この節を読んでください。メール・ディレクトリを基本ディレクトリか第二ディレクトリとして使用されることができます。インストレーション際に、メール・ディレクトリを基本ディレクトリとして選択する場合、OA$DDS_PRIMEを 2 と設定します。インストレーション際に、メール・ディレクトリを第二ディレクトリ、日本語 ALL–IN–1を基本ディレクトリとして選択する場合、OA$DDS_PRIMEを 1 と設定します。

インストレーションが終了した後、各要素は次のように設定されています。

- ユーザ・エージェント・エントリ名とパスワード
  - ユーザ・エージェント・エントリ名は、新規インストレーションまたはアップグレード・インストレーションの場合は OA$node$ALLIN1 です。ただし、nodeは日本語 ALL–IN–1をインストールしているシステムのノード名またはクラスタ別名、たとえば OA$LYNX$ALLIN1 です。
  - ユーザ・エージェント・エントリ・パスワードはインストレーション時に入力したメール・ディレクトリ・パスワードです。
- 日本語 ALL–IN–1マネージャの登録者エントリ。登録者エントリのプロキシ属性はローカルの日本語 ALL–IN–1ユーザ・エージェント・エントリの名前 (OA$node$ALLIN1) です。この属性は日本語 ALL–IN–1に対してマネージャのエントリへのプロキシ・アクセスを許可することにより、日本語 ALL–IN–1がエントリを更新し、アクセスできるようにします。
- UAPASSWRD.DAT には、このリストの最初に示したユーザ・エージェント・オブジェクトの名前とユーザ・エージェント・パスワードが登録されます。

メール・ディレクトリを設定するときに、前リストの値が更新されます。

メール・ディレクトリを設定するには、次の操作を実行します。

ステップ	行動
1	ALL–IN–1マネージャのALL–IN–1アカウントにログインします。 `$ ALLIN1 /USERNAME=MANAGER`

ステップ	行動
2	日本語 ALL–IN–1から次のコマンドを入力します。 <GET #ORGNAME=orgname <GET #LOCATION=location ただし、 • orgnameはユーザの会社または組織の名前です。 • locationはユーザの場所です。 システムでエリア・ルーティングを使用している場合には、次の情報も入力しなければなりません。 <GET #AREA="area_code" area_codeはシステムが属しているエリアのエリア・コードです。

ステップ	行動

エリア・コードが分からない場合、メッセージ・ルータ・ノードで次のように実行します。

ステップ	行動
a	MAILbus 構成プロシージャを実行して、現在サイトで使用中の転送サービス設定を表示します。 `$ @SYS$MANAGER:MB$CONFIG`

b	メッセージ・ルータ転送サービスのための設定を表示します。
	
	`MBC> SHOW TS`
	他の設定とともにエリア・コードが次のように表示されます。
	
	`.`
	`.`
	`.`
	`Transfer Service uses area routing`
	`Area Code : areacode`
	
	`.`
	`.`
	`.`
	ただし、areacodeはサイトで使用中のエリア・コードです。

3	EXIT と入力するか、 Ctrl/Z を押して MAILbus 構成プロシージャを終了します。このコマンドについての詳しい説明はメッセージ・ルータに関する解説書を参照してください。

3 ユーザ・エージェント・エントリを更新するには、次のコマンドを入力します。

```
<DO OA$LIB:USERAGENT_POST
```

ステップ	行動
	この DO スクリプトは次の処理を実行します。 • メール・ディレクトリのユーザ・エージェント・オブジェクトから入手したメール・ディレクトリ識別子を使用して、OA$DATA_SHARE:UAPASSWRD.DATのユーザ・エージェント・エントリを更新します。 日本語 ALL–IN–1ユーザ・エージェントはすべてのユーザから使用できる状態になります。 • 日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウント情報のメール・ディレクトリ・フィールドを Y に設定します。 • インストレーション時に作成した日本語 ALL–IN–1マネージャのプロフィール・エントリからマネージャのメール・ディレクトリ登録者エントリに情報をコピーします。 • マネージャのメール・ディレクトリ識別子を登録者エントリからマネージャのALL–IN–1アカウント情報にコピーします。 • 組織名と場所に対して指定した値を使用してメール・ディレクトリ内のALL–IN–1ユーザ・エージェント・オブジェクトを更新します。 • ユーザ・エージェント (日本語 ALL–IN–1) が所有するすべてのメール・ディレクトリ登録者に対して使用されるメール宛先 (OA$DDS_AREA_ROUTE) を作成します。メール宛先は日本語 ALL–IN–1メッセージ・ルータメールボックスの名前 (OA$MTI_MAILBX) と、日本語 ALL–IN–1が使用するメッセージ・ルータを実行しているノードまたはクラスタの名前 (OA$PRIMARY_NODE) です。サイトでエリア・ルーティングを使用している場合には、ネットワーク宛先には指定したエリア・コードも含まれます。
4	VMS クラスタ内すべてのノードに日本語 ALL–IN–1を再起動します。
5	アップグレード・インストレーションまたはアップデート・インストレーションを実行しているときに、最初のインストレーションでメール・ディレクトリを使用した宛先指定を選択した場合には、メール・ディレクトリに情報を登録する方法について「日本語ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイド」を参照してください。

5.14.4.2 メッセージ・ルータが同 VMS クラスタ以外にある場合

使用しているメッセージ・ルータが、日本語 ALL–IN–1と別の VMS クラスタにある場合、あるいは同じ VMS クラスタにあるが、日本語 ALL–IN–1がメッセージ・ルータ・ノードにインストールされていない場合、この節を読んでください。

下記の項目を作成しなければなりません。

- ユーザ・エージェント・エントリ名とパスワード
- 日本語 ALL–IN–1マネージャの登録者エントリ。登録者エントリのプロキシ属性はローカルの日本語 ALL–IN–1ユーザ・エージェント・エントリの名前 (OA$node$ALLIN1) です。この属性は日本語 ALL–IN–1に対してマネージャのエントリへのプロキシ・アクセスを許可することにより、日本語 ALL–IN–1がエントリを更新し、アクセスできるようにします。
- ユーザ・エージェント・オブジェクトとパスワードで OA$DATA_SHARE:UAPASSWRD.DAT ファイルを更新します。

リモート・メッセージ・ルータ・ノードと日本語 ALL–IN–1ノードでいくつかの作業を別々実行しなければなりません。

ステップ	行動
1	リモート・メッセージ・ルータ・ノード, MBMANAGER アカウントにログインし、 MAILbus 管理ユティリティ MBMAN を実行します。 `$ RUN SYS$SYSTEM:MBMAN`

ステップ	行動
2	日本語 ALL–IN–1がメール・ディレクトリへアクセスするときに、使用するユーザ・エージェント・オブジェクトを作成し、オブジェクトをメール・ディレクトリに追加します。 MBMAN> BUILD DDS UA /NAME="uaname"/PASSWORD="password" MBMAN> ADD DDS BUILT_OBJECT/LOG ただし、 • uanameはユーザ・エージェント・オブジェクトの名前です。名前はOA$node$ALLIN1 という形式で表示し、ただし、nodeはメール・ディレクトリが設定されているシステムに対するノード名あるいはクラスタ別名です。 • passwordは日本語 ALL–IN–1がユーザ・エージェント・オブジェクトへアクセスするときに使用するパスワードです。パスワードは 8 キャラクタ以内でなければなりません。

ステップ	行動
3	日本語 ALL–IN–1マネージャのためメール・ディレクトリに登録者エントリを作成し、追加します。 MBMAN>BUILD DDS SUBSCRIBER /SURNAME="MANAGER" MBMAN>BUILD DDS SUBSCRIBER /PROXY="uaname" MBMAN>BUILD DDS SUBSCRIBER /SUBID="uaname" MBMAN>ADD DDS BUILT_OBJECT/LOG MBMAN>EXIT ただし、 • MANAGER は日本語 ALL–IN–1マネージャの日本語 ALL–IN–1アカウントで、表示されるように入力しなければなりません。他のアカウント名を入力しないでください。 • uanameは指定したユーザ・エージェント・オブジェクトの名前、たとえば、OA$nodename$ALLIN1 です。 • /PROXY="uaname"はマネージャの登録者エントリへの日本語 ALL–IN–1ユーザ・エージェント・プロキシ・アクセスを取得します。これはマネージャの代わりに日本語 ALL–IN–1ユーザ・エージェントがマネージャの登録者エントリへアクセスし、更新することを許可します。 • /SUBID="uaname"は日本語 ALL–IN–1が日本語 ALL–IN–1マネージャの登録者エントリを識別します。 MANAGER というエントリが 1 つ以上ある可能からです。
4	日本語 ALL–IN–1 ノード (VAX あるいは Alpha)、日本語 ALL–IN–1マネージャの日本語 ALL–IN–1アカウントからステップをすべて実行してください。 下記のコマンドを入力して、ステップで実行するスクリプトに要求される仮シンボルを作成します。 <GET #ORGNAME=orgname <GET #LOCATION=location ただし、 • orgnameはユーザの会社または組織の名前です。 • locationはユーザの場所です。

ステップ	行動

システムでエリア・ルーティングを使用している場合には、次の情報も入力しなければなりません。

```
<GET #AREA="area_code"
```

area_codeはシステムが属しているエリアのエリア・コードです。

エリア・コードが分からない場合、メッセージ・ルータ・ノードで次のように実行します。

ステップ	行動
a	MAILbus 構成プロシージャを実行して、現在サイトで使用中の転送サービス設定を表示します `$ @SYS$MANAGER:MB$CONFIG`

b	メッセージ・ルータ転送サービスのための設定を表示します。
	
	`MBC> SHOW TS`
	
	他の設定とともにエリア・コードが次のように表示されます。
	
	`.`
	`.`
	`.`
	`Transfer Service uses area routing`
	`Area Code : areacode`
	
	`.`
	`.`
	`.`
	
	ただし、areacodeはサイトで使用中のエリア・コードです。

c	EXIT と入力するか、 CTRL/Z を押して MAILbus 構成プロシージャを終了します。このコマンドについての詳しい説明はメッセージ・ルータに関する解説書を参照してください。

ステップ	行動
5	次のスクリプトを実行します。 <DO OA$LIB:USERAGENT_POST メールは日本語 ALL–IN–1マネージャのアカウントに送信されます。マネージャのアカウントに次に実行する詳細指示があります。
6	メール・ディレクトリの登録について詳しく説明は、日本語 ALL–IN–1メール・マネージメント・ガイドを参照してください。

5.14.5 リモート・メッセージ・ルータ・ディレクトリ・サービスのスタートアップ・プロシージャ

リモート・メール・ディレクトリを使用する各日本語 ALL–IN–1 ノードで、サイト固有スタートアップ・プロシージャに日本語 ALL–IN–1スタートアップ・プロシージャのためのエントリの前、次のエントリを追加します。

```
$ @SYS$STARTUP:DDS$STARTUP.COM node nodenumber
```

ただし、nodeはリモート・メッセージ・ルータがインストールされたノードの名前で、nodenumberはリモート・ノードのディレクトリ・サービス・ノード番号です。

ディレクトリ・サービス・ノード番号を検索するには、メッセージ・ルータ・ノードで次のように実行します。

```
$ RUN SYS$SYSTEM:MBMAN
MBMAN> SHOW DDS NODE nodename
```

ただし、nodenameはメッセージ・ルータ・ノードの名前です。

サイト固有スタートアップ・ファイルの変更について詳しい説明は、第 5.4 節を参照してください。

5.15 WPS–PLUS/VMS 文書から日本語 ALL–IN–1への変換

システムで現在WPS–PLUS/VMSを実行していて、ALL–IN–1の内部からWPS–PLUS/VMSで作成した文書を使用したい場合、この章を読んでください。

注意

ALL–IN–1を使用するときに変換した文書を使用したい場合には、省略時のエディタとしてWPS–PLUSを使用しなければなりません。

WPS–PLUS/VMS 文書を変換するには、次の操作を実行します。

1. WPS–PLUS/VMS文書を変換したい各ALL–IN–1ユーザに対してALL–IN–1 DCL 特権と CMD 特権を与えます。これらの特権の設定方法については「日本語ALL–IN–1マネージメント・ガイド」を参照してください。通常このアクセスを制限する場合には、変換が終了した後で特権を再設定してください。
2. 次のコマンドを入力することにより、WPS–PLUS/VMSファイル・キャビネットが格納されているディレクトリが存在するかどうかを確認します。

   ```
   $ DIRECTORY /PROTECTION disk:[username.WPSPLUS...]*.*
   ```

   ただし、diskはユーザの OpenVMS ディスクの名前で、usernameは OpenVMS ユーザ名です。

   このコマンドはWPS–PLUS/VMSアカウント内のファイルのうち、ユーザに属しているすべてのファイルのリストを表示します。
3. すべてのファイルに対して、次の最低限の保護が設定されていることを確認します。

   (S:RWD,O:RWE,,)
4. ALL–IN–1を実行します。
5. WP と入力して文書処理メニューを表示させます。
6. 次のコマンドを入力します。

   ```
   <DO OA$LIB:WPCOPY
   ```

7. 次のプロンプトに対して、WPS–PLUS/VMSディレクトリの完全なディレクトリ指定 (たとえば、 DISK1:[NAKAYAMA.WPSPLUS]) を入力します。

```
Enter directory of old File Cabinet
```

8. 次のプロンプトに対して、ALL–IN–1ディレクトリの完全なディレクトリ指定 (たとえば、 DISK1:[NAKAYAMA.A1]) を入力します。

```
Enter directory of new File Cabinet
```

注意

同じ OpenVMS ディレクトリに DOCDB.DAT ファイルのALL–IN–1バージョンとWPS–PLUS/VMSバージョンの両方を登録することはできません。

9. 一度にすべての文書をコピーする場合は、次のプロンプトに対して A と入力します。各ファイルをコピーする前に確認が必要な場合は C と入力します。

```
Copy All documents at once or Check each one <A/C> <A>:
```

変換が終了すると、ALL–IN–1は文書処理メニューに戻ります。

10. ユーザ定義プロセス[.UDP]ファイルを変換するには、次の操作を実行します。
    a. 文書処理メニューから$と入力します。

       ALL–IN–1がサブプロセスに切換わります。

    b. 次のコマンドを入力します。

```
$ COPY /LOG [username.WPSPLUS.UDP]*.UDP [.UDP]*.*
```

       ただし、usernameはユーザの OpenVMS 最上位ディレクトリで、SYS$SYSTEM:SYSUAF.DAT ファイルに記録されています。

    c. コピーが終了した後EXITを押すとALL–IN–1に戻ります。

11. ユーザの特権を再設定します。

5.16 WPS–PLUS論理コマンド・プロシージャ

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 インストレーション・プロシーじゃを実行する際に、論理コマンド・プロシージャ A1WPSPLUS_LOGIN.COM が SYS$MANAGER に作成されます。すべてのユーザがこれらの識別子で実行したい場合には、これをシステム・論理コマンド・プロシージャ SYS$SYLOGIN に追加します。また、ユーザが利用可能なファイルを作成し、ユーザ各自の LOGIN.COM ファイルに追加します。

5.17 ファイル・キャビネット・サーバ・ライセンスのインストレーション

ファイル・キャビネット・サーバはネットワークを介したファイル・キャビネットへのアクセスを取扱います。リモート・ユーザに対してローカル・ノードのアクセスを許可する場合には、 A1-DIST-SHR ライセンスが必要です。 A1-DIST-SHR ライセンスが登録されていれば、ローカル・システムのファイル・キャビネット・サーバはリモート・システムのファイル・キャビネット・サーバからの接続要求を受付けます。日本語 ALL–IN–1 Web Interface を使用して、ファイル・キャビネット内の文書を Web Browsers のユーザが利用可能にしたい場合にも、このライセンスは必要です。

A1-DIST-SHR ライセンスをインストールするには、 License Management Facility (LMF) を使用します。 LMF についての詳しい説明は LMF に関する解説書を参照してください。分散共有についての詳しい説明は日本語 ALL–IN–1マネージメント・ガイドの第 9 章を参照してください。

5.18 CDA DOC_STYLE ファイルの移動

CDA$LIBRARY がシステムに存在しない場合、 CDA DOC_STYLE ファイルは OA$LIB_SHARE にインストールされています。適当なロケーションへ移動してください。

5.19 DECtrace を使用するためのファシリティ定義のアップデート

日本語ALL–IN–1 V3.2 をインストールするときに、 DECtrace のファシリティ定義ファイルが SYS$SHARE:EPC$FACILITY.TLB に登録されます。日本語ALL–IN–1 V3.2 をインストールした後で DECtrace をインストールする場合には、ファシリティ定義は自動的に抽出されます。

DECtrace がすでにシステムにインストールされているときに、日本語ALL–IN–1 V3.2 に関する情報を収集するためにこの機能を使用する場合には、ファシリティ定義を次のように更新しなければなりません。

```
$ LIBRARY/TEXT/EXTRACT=OAV32/OUTPUT=EPC$A1V32-FAC-DEF.EPC$DEF -
          SYS$SHARE:EPC$FACILITY.TLB
$ COLLECT INSERT DEFINITION EPC$A1V32-FAC-DEF.EPC$DEF/REPLACE
```

注意

ファシリティ定義ファイルは日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 のため更新されていません。これは日本語 ALL–IN–1バージョン 3.1 に提供されるものと同じです。

5.20 パーティション・ファイルへのユーザ登録

ファイル・キャビネットで使用されるパーティション・ファイルに全ユーザが登録されていることを確認してください。登録を確認するには OA$LOGO:OAFC$PART_SEED.LOG ファイルを確認します (X.400 ユーザはパーティション・ファイルには登録されません)。ユーザが正しく登録されなかった場合には、以下の作業を行ってください。

1. ユーザ・プロフィールを確認し、言語フィールドに正しく言語が指定されているかどうかを確認します。
2. 日本語ALL–IN–1システムの全ユーザが登録されなかった場合には、日本語ALL–IN–1マネージャの日本語ALL–IN–1アカウントにログインし、以下の日本語ALL–IN–1コマンドを実行します。

```
< OA$LIB:OAFC$PART_SEED
```

ただし一部のユーザが登録されなかった場合には、以下の日本語ALL–IN–1コマンドを実行してください。

```
< GET #OAFC SEED USER = "username"
< OA$LIB:OAFC$PART_SEED
```

なお、ファイル・キャビネット・サーバが正常に起動しなかったためにパーティション・ファイルへのユーザ登録が失敗したと予想される場合には、SYS$MANAGER:OAFC$SERVER.LOG を確認して原因を調べ、エラーを回復してください。

5.21 パーティション・ファイルの修正

インストレーション終了後、以下の作業を実行し、パーティション・ファイルの IVP ユーザのレコードを修正してください。

1. 日本語ALL–IN–1マネージャでシステムにログインします。
2. 日本語ALL–IN–1を起動します。

3. 以下の日本語ALL–IN–1コマンドを実行します。

```
< WRITE CHANGE PARTITION %KEY="[IVP]MAIN", OWNER="ALLIN1"
```

5.22 CDA Converter Library の環境設定

日本語 DEC windows/Motif V1.0 がインストールされているシステムに日本語ALL–IN–1バージョン 3.2 をインストールした場合には、インストレーション終了後に以下の作業を行ってください。

1. CDA$ACCESS.EXE をコピーします。

```
$ SET DEFAULT OA$BUILD_SHARE:
$ COPY CDA$ACCESS_A1.EXE SYS$COMMON:[SYSLIB]CDA$ACCESS.EXE
```

2. ファイル・キャビネット・サーバを再リンクします。

```
$ SET DEFAULT OA$BUILD_SHARE:
$ @OAFC$SERVER_LINK
```

3. ファイル・キャビネット・サーバのイメージをコピーします。

```
$ COPY OAFC$SERVER.EXE SYS$COMMON:[SYSEXE]
$ COPY OAFC$MTS_PRIV_SHR.EXE SYS$COMMON:[SYSLIB]
```

4. ファイル・キャビネット・サーバのスタートアップ・プロシージャを起動します。

```
$ @SYS$STARTUP:OAFC$SYSSTARTUP
```

5. ファイル・キャビネット・サーバを再起動します。次の手順で行います。
   - 日本語ALL–IN–1マネージャでシステムにログイン後、日本語ALL–IN–1を起動します。

     ```
     $ ALLIN1/USER=MANAGER
     ```

   - SM MFC MS と入力して、サーバ管理メニューを表示させます。
   - サーバ停止 (STO) オプションを入力して、サーバを停止します。
   - サーバ起動 (STA) オプションを入力して、サーバを起動します。

5.23 追加言語インストレーション後の環境設定

追加言語をインストールした場合、追加言語システムの開発領域が正しい場所に作成されません。以下の作業を実行し、開発領域を正しい場所に移動してください。

なお、ここでは追加言語システムの開発領域が<device>:[ENGLISH.SITE]に作成されたものとして記述しています。

```
$ SET DEFAULT <device>:[ENGLISH.SITE]
$ BACKUP/LOG/VERIFY [.DEV_ENGLISH...]*.* -
_$ <dev>:[ALLIN1.SITE.DEV_ENGLISH...]/BY_OWNER=ORIGINAL
$ BACKUP/LOG/VERIFY [.DEV_REC_ENGLISH...]*.* -
_$ <dev>:[ALLIN1.SITE.DEV_REC_ENGLISH...]/BY_OWNER=ORIGINAL
$ DELETE [.DEV_ENGLISH...]*.*;*
$ DELETE [.DEV_REC_ENGLISH...]*.*;*
```

5.24 問題点の通知

本ソフトウェアについては、日本 DEC 所定のソフトウェア保証基準に定められた保証が提供されますので、その内容にしたがった処置を取ってください。

なお、ご不明な点につきましては、日本 DEC の各支店/営業所にお問合わせください。

6

CART ツールの使用方法

6.1 概要

ALL–IN–1 V2.3 または V2.4 システムをカスタマイズした場合には、そのカスタマイゼーションがALL–IN–1 V3.2 システムでも正常に動作するかどうかを確認しなければなりません。 CART (カスタマイゼーション・チェックおよび修復ツール) はこの確認に役立つツールです。システムをカスタマイズしていない場合でも、カスタマイズ管理データ・ファイルがALL–IN–1 V3.2 に対して正しいかどうかを確認するために、なるべく CART を実行してください。初めてALL–IN–1をインストールする場合には、 CART を実行する必要はありません。

ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、 CART を実行してください。また、アップグレード後に CART を実行することも可能です

CART を実行するには、「日本語ALL–IN–1インストレーション・ガイド」の説明に従って、ALL–IN–1のインストレーション・プロシージャを開始します。インストレーションの種類と他のオプションのリストが表示された後、次の質問に対して CART (RC) を実行するためのオプションを選択してください。

```
* What type of installation do you wish to perform
```

注意

CART を実行する場合には、その前に JTQUOTA の値がインストレーションを実行するのに十分な値であるかどうかを確認しなければなりません。
□

CART を実行した後、インストレーション・プロシージャは継続されません。日本語ALL–IN–1 V3.2 をインストールする準備ができたら、インストレーション・プロシージャを再開し、適切なオプションを選択してください。

また、日本語ALL–IN–1 V3.2 のインストレーション後に CART を実行することもできます。詳しくは「日本語ALL–IN–1マネージメント・ガイド」を参照してください。

6.2 CART の実行内容

CART を実行すると、サイト変更ログに登録されているカスタマイズしたエレメントと、ALL–IN–1 V3.2 で提供されるベース・エレメントが比較されます。ALL–IN–1 V3.2 のベース・エレメントはまったく新しいか、少しだけ変更されているか、大幅に変更されているか、削除されたか、または移動されています。これまでにベース・エレメントをカスタマイズしていて、そのエレメントがALL–IN–1 V3.2 で変更されている場合には、 CART はコンフリクトが発生することを報告し、カスタマイズしたエレメントに状態コードを割当てます。状態コードはコンフリクトのタイプを示し、それが必須レベルであるのか、推奨レベルであるのか、情報レベルであるのかを示します。

表 6–1 コンフリクト・レベル

必須	ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に必須レベルとして示されたすべてのコンフリクトは解決しておかなければなりません (状態コード I、 K、 L、 M、 N として報告されたエレメント)。
推奨	ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードした後ただちにコンフリクトを解決しなければなりません (状態コード D、 E、 O、 P、 Q として報告されたエレメント)。
情報	ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードした後で必要に応じてコンフリクトを解決しなければなりません (状態コード A、 F、 G、 H、 R によって報告されたエレメント)。

状態コード B と C は特殊な場合です。

CART で報告されるコンフリクトは重大度の高い順に確認してください。つまり、最初に必須レベルのコンフリクトを確認し、次に推奨レベルのコンフリクトを確認し、最後に情報レベルのコンフリクトを確認します。 1 つのエレメントに 2 つの状態コードが示された場合には、同様に重大度の高い順にコンフリクトを確認してください。たとえば、エレメントに状態コード E と H が報告された場合には、最初

に推奨レベルのコンフリクトを確認し、その後で情報レベルのコンフリクトを確認します。

重大度は単なる目安です。推奨レベルとして示されたコンフリクトが実際にはシステムにとって非常に重大なコンフリクトである場合もあります。このことを判断するには、システムに関する知識が必要です。

アップグレードの計画に役立つように、 CART は 4 つの報告と 1 つのALL–IN–1スクリプトをサイト領域の最上位ディレクトリに作成します (たとえば、[ALLIN1.SITE])。

- 詳細報告 (CM_CART_FULL_V30$PRIMARY.TXT)

  この報告には、ALL–IN–1 V3.2 エレメントとコンフリクトするカスタマイズしたエレメント、エレメントが変更された理由、コンフリクトを解決するための適切な方法が示されます。また、各状態コードの説明も示されます。

- 概略報告 (CM_CART_SUMMARY_V30$PRIMARY.TXT)

  この報告には、ALL–IN–1 V3.2 エレメントとコンフリクトするカスタマイズしたエレメントが状態コードの順に示されます。 CART を十分使いこなせるようになった場合には、概略報告の情報だけで問題を解決できるようになります。

- 修復プロシージャ (CM_CART_SCRIPT_V30$PRIMARY.SCP)

  これは状態コード A、 H、 P、 Q として報告されたエレメントのコンフリクトを解決するためのALL–IN–1スクリプトです。これらのコンフリクトに対して、このプロシージャはシステムが正常に動作し、ALL–IN–1 V3.2 の新機能を利用するために必要な最低限の処理を実行します。このスクリプトを実行する場合も、コンフリクトが発生した理由を評価し、適切な処置を行うかどうかを判断しなければなりません。このスクリプトはALL–IN–1 V3.2 にアップグレードした後でのみ実行できます。

  必要な場合には、このプロシージャをカスタマイズできます。たとえば、状態コード P として報告されたエレメントだけを処理したい場合や、解決方法を変更したい場合には、必要に応じてプロシージャをカスタマイズしてください。このプロシージャは各状態コードを処理するために別々のスクリプトを呼出します。各状態コードに対してどのような処理が実行されるかについては、対応するスクリプトを参照してください (スクリプトの名前

はCM_CART_SCRIPT_nです。ただし、 n は状態コードです)。ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードした後、カスタマイズ管理のベース・エレメント (ABE) オプションを使用して各スクリプトを表示してください。

コンフリクトを解決するために必ず CART 修復プロシージャを使用しなければならないわけではありません。たとえば、このスクリプトでは特定のコンフリクトを解決するのに十分でない場合には、カスタマイズ管理を使用してマニュアル操作で直接コンフリクトを解決することができます。

- 障害報告 (CM_CART_ERR_V30$PRIMARY.TXT)

  この報告には、 CART の実行で検出されたエラーの詳しい説明が示されます。エラーが検出されなかった場合には、このレポートは作成されません。

- サイト・エレメント報告 (CM_CART_SITE_ELEMENTS.TXT)

  この報告にはサイト領域に存在するが、サイト変更ログに登録されていないエレメントが示されます。

6.3 アップグレード前の CART 実行

アップグレードの前に CART を実行する場合には、ALL–IN–1 V3.2 のインストレーション・プロシージャから実行します。

複数言語システムでは、すべての言語に対して CART を実行しなければなりません。各言語に対して、 CART は前節で示したファイルを作成しますが、V30$PRIMARY は対応する CART 識別子に置換えられます。

システムの各言語に対して、 CART を必要な回数だけ何回でも実行できます。CART を再実行すると、前に示したファイルはすべて書換えられますが、障害報告だけは例外です (新しい障害報告が元の障害報告の最後に追加されます)。したがって、前のコピーが必要な場合には、 CART を実行する前に DCL コマンドでファイル名を変更しなければなりません。たとえば、詳細報告のファイル名を変更するには、次のように入力します。

```
$ RENAME/LOG dev:[ALLIN1.SITE]CM_CART_FULL_REPORT_V30$PRIMARY.TXT -
_$ dev:[ALLIN1.SITE]OLD_CART_FULL_PRIMARY.TXT
```

6.4 変更後のALL–IN–1システムでの CART 実行

ALL–IN–1システムをカスタマイズするだけでなく、WPS–PLUS V4.1 オプションなどのソフトウェアをインストールすることによりシステムを変更することも一般的に行われます。 CART ではこの方法で変更されたエレメントは記録されませんが、このような場合でも CART を実行できます。この節では、次のソフトウエアをインストールして変更したALL–IN–1システムで、 CART が実行する処理について説明します。

- パッチ
- WPS–PLUS V4.1 オプション
- SFCP

パッチとWPS–PLUS V4.1 オプションはベース・エレメント・ファイルの既存のバージョンを置換するか、新しいバージョンを追加します。これらのエレメントがカスタマイズされていて、ALL–IN–1 V3.2 でそのエレメントが変更または削除されている場合には、 CART はコンフリクトを報告します。

WPS–PLUS V4.1 オプションで追加された新規ベース・エレメントは主に、ALL–IN–1 V3.2 でも追加されています。したがって、これらのエレメントをカスタマイズした場合には、状態コード K として報告されます。

SFCP はカスタマイゼーションとしてインストールされます。したがって、すべてのエレメントはサイト変更ログに登録され、 CART は SFCP エレメントを他のカスタマイゼーションと同様に取扱います。 SFCP がインストールされているシステムからのアップグレードについての詳しい説明は、本書の第 5 章と「日本語ALL–IN–1リリース・ノート」を参照してください。

6.5 アップグレード後の CART 実行

CART はアプリケーションのマイグレーションに役立つ汎用ツールとして作成されています。これは単にALL–IN–1 V3.2 へのアップグレードのためだけに使用されるツールではありません。たとえば、ALL–IN–1 V3.2 で実行できるレイヤード・プロダクトに対しても、 CART を使用できます。したがっ

て、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードした後で CART を実行しなければならないことがあります。ALL–IN–1の内部から CART を実行する方法については、「日本語ALL–IN–1マネージメント・ガイド」の第 20 章を参照してください。

ALL–IN–1から CART を実行する場合には、サイト・エレメント報告は作成されません。詳細報告と概略報告、修復プロシージャは、新規エレメントとして格納されます。これらのファイルの旧バージョンを保存しておくには、カスタマイズ管理のエレメント・コピー (CO) オプションを使用して、別のエレメント名で同一領域に保存します。たとえば、エレメント名の最後に日付を追加することにより、エレメントを簡単に識別できるようにして、 CM_CART_SUMMARY_V30$PRIMARY エレメントを CM_CART_SUMMARY_V30$PRIMARY_19FEB にコピーします。

6.6 マイグレーション・チェック・リスト

この節では、カスタマイズがALL–IN–1 V3.2 システムに正しく移動されたかどうかを確認するための作業のチェックリストを示します。

このチェックリストに従って作業をする場合には、「日本語ALL–IN–1リリース・ノート」をすぐ参照できるように準備しておいてください。また、システム変更報告も準備しておくと役立ちます。この報告には、カスタマイズ管理に登録したシステムのカスタマイゼーションが示されます。ALL–IN–1 V2.3 または V2.4 からシステム変更報告を作成するには、 CSZ と入力してカスタマイズ・システム管理メニューを表示させ、システム変更報告の印刷 (PMR) オプションを使用します。

1. カスタマイズ管理以外でカスタマイズしたベース・エレメントがシステムにあることがわかっている場合には、処理を継続する前にそれらのエレメントをカスタマイズ管理に取込まなければなりません。たとえば、カスタマイズしたトレーニング・スクリプトは SCP エレメントとして読込むことができます。
2. ALL–IN–1のデータ・ファイルまたは FDL ファイルをカスタマイズした場合には、リリース・ノートの説明に従って、カスタマイズしたバージョンのコピーを作成してください。

3. RC オプションを使用して、ALL–IN–1 V3.2 インストレーション・プロシージャから CART を実行し、インストレーションの記録を保存してください。この操作ではALL–IN–1 V3.2 を実際にインストールするのではなく、 CART のみを実行し、報告レポートとスクリプトを作成します。

   インストレーション・プロシージャの最初に出力されるすべての質問に応答した後、プロシージャは CART キットのセーブセットを復元していることを表示します。次の例を参照してください。

```
%A1LUS-I-RESCARTSS, Restoring JAPANESE CART kit saveset
```

   CART はカスタマイズされた各エレメントを順に処理し、情報メッセージを表示します。次の例を参照してください。

```
%CART-I-CHECK 12:03 実行 MAILMEMO1 BLP JAPANESE NUMBER = 38
%CART-I-SCNNG 12:03 検索 MAILMEMO1 BLP JAPANESE
%CART-I-STATS 12:04 書込み MAILMEMO1 BLP JAPANESE 状態 M
```

   CART を実行するには、システムの構成に応じてしばらく時間がかかります。数時間かかることもあります。実行が終了すると、インストレーション・プロシージャは終了します。インストレーション・ログには、報告と修復プロシージャが格納されたディレクトリが示されます。

4. サイト・エレメント報告を調べ、フォーム、スクリプト、テンプレート、コマンド・プロシージャに対する参照があるかどうかを確認してください。これらのエレメントが参照されている場合には、この段階でそのエレメントをカスタマイズ管理に取込まなければなりません。

   ALL–IN–1 V2.3 および V2.4 でサポートされなかったエレメント (たとえば、ファイル拡張子が.FLB、.FLC、.EXE のファイルなど) の場合は、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードするまで処置は必要ありません。その後、新たにサポートされるようになったエレメントをカスタマイズ管理に取込まなければなりません。ALL–IN–1 V3.2 のカスタマイズ管理でサポートされるエレメントのリストについては、英語版「ALL–IN–1 Application Programming: Using Customization Management」を参照してください。

5. 詳細報告を調べ、状態コード B または C のエレメントが報告されていないかどうかを確認してください。

状態コード B または C として報告されるエレメントは CART で正しく確認することはできません。したがって、必須レベルの状態コードで報告されなければならないエレメントが状態コード B または C として報告される可能性があります。状態コード B または C で報告されているエレメントがある場合には、そのコンフリクトをただちに解決しなければなりません (たとえば、エレメントを正しい場所に移動します)。

6. 状態コード B または C のエレメントが報告されている場合や、サイト・エレメント報告の情報からカスタマイズ管理に多くのエレメントを読込まなければならない場合には、次のステップに進む前にインストレーション・プロシージャから CART を再実行してください。状態コード B または C のエレメントが CART から報告されなくなるまで、次のステップには進まないでください。
7. すべての CART 報告を詳しく調べ、アップグレード計画を行います。アップグレードを実行するのに必要な時間の他に、必須レベルのコンフリクトを解決するのに必要な時間と、カスタマイゼーションを移動する方法を判断するのに必要な時間を考慮してください。詳細報告に示される補足情報をもとに、カスタマイゼーションをALL–IN–1 V3.2 にマイグレーションする方法を判断してください。ALL–IN–1 V3.2 のすべての機能を使用できることを確認するには、次の方法で各コンフリクトを解決しなければなりません。

   - カスタマイズしたエレメントを削除することにより、バージョン 3.2 のエレメントを使用できるようにします。

     カスタマイゼーションが不要になった場合には、この処理を実行してください (たとえば、カスタマイゼーションによって実現していた機能がALL–IN–1 V3.2 の一部として提供されるようになった場合)。

   - カスタマイゼーションをバージョン 3.2 のエレメントに適用します。

     カスタマイゼーションを保存したい場合には、この処理を実行してください。

   - バージョン 3.2 での変更を含むようにエレメントをカスタマイズします。

     カスタマイゼーションを保存したいときに、ALL–IN–1 V3.2 のエレメントに対して変更された箇所がカスタマイズしたエレメントの変更箇所より少ない場合には、この処理を実行します。

8. 必須レベルの変更 (状態コード I、 K、 L、 M、 N) を確認します。アップグレードの前にカスタマイズ管理を使用してこれらのエレメントをライブ領域から開発領域に移動します。

   開発領域内の必須レベル状態のエレメントは CART 報告にまだ必須レベル状態として含まれていることに注意してください。すべての必須レベル状態のエレメントを開発領域に移動した後で処理を継続する方が安全です。

9. 推奨レベルの変更 (状態コード D、 E、 O、 P、 Q) を確認します。アップグレードの前にカスタマイズ管理を使用してこれらのエレメントをライブ領域から開発領域に移動することを検討してください。

   状態コード P および Q で多くのエレメントが報告された場合には、 CART 修復プロシージャを使用してこれらのエレメントをライブ領域から開発領域に移動できます。この場合には、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードするまで、これらのエレメントはライブ領域に残しておいてください。

10. 適切なアップグレード計画を作成し、ALL–IN–1 V3.2 にカスタマイゼーションをマイグレートするためにどのような処理が必要であるかを判断した後、ALL–IN–1 V3.2 をインストールします。

11. ALL–IN–1 V3.2 をインストールし、ユーザがALL–IN–1の使用を開始する前に、必須エレメントに対するカスタマイゼーションを確認してください。

    - カスタマイズ管理サブシステムから必須レベルの変更としてマークされた各エレメントを選択し、そのエレメントと新しいベース・エレメントの相違点を印刷します。
    - 相違点を確認してください。追加または変更された新機能や変更されたシンボルを確認します。アップグレード計画をもとに、システムを実行するのに必要な変更を行ってください。
    - カスタマイズしたエレメントをテストし、正常に動作する場合には、エレメントをライブ領域に戻してください。

12. ユーザに対してALL–IN–1の使用を許可する前に、必須レベルのエレメントと同じ方法で推奨レベルのエレメントに対してカスタマイズを確認します。推奨レベルのエレメントのコンフリクトを解決しなかった場合には、ユーザはカス

タマイズしたエレメントにアクセスできなかったり、ALL–IN–1 V3.2 の機能を利用できなくなることがあります。

- 状態コード D のエレメントのコンフリクトの解決。

  状態コード D はALL–IN–1 V3.2 から削除されて提供されていないエレメントに対するカスタマイゼーションを示します。削除されたエレメントの状態コードが A の場合には、そのエレメントをカスタマイズしたバージョンは存在せず、後で説明するように、これらのエレメントを削除すると、カスタマイズしたエレメントには障害が発生します。

  カスタマイズ管理を使用して状態コード A として報告されたエレメントを開発領域にコピーします。 CART を再実行すると、そのエレメントは状態コード H として報告されます。

13. ユーザに対してALL–IN–1 V3.2 の使用を許可します。必要に応じて情報レベルのエレメントのコンフリクトを解決しなければなりません。

    情報レベルの一部のコンフリクトは CART 修復プロシージャを使用して解決できます。しかし、コンフリクトを確認するまで修復プロシージャを実行しないでください。たとえば、状態コード A のエレメントに対する解決方法として CART 修復プロシージャを実行すると、カスタマイズ管理データベースからそれらのエレメントが削除され、その後、コマンド・プロシージャOA$LIB:DELETE_OBSOLETE_FILES.COMが実行されます。この処理を実行する前に、カスタマイズしたエレメントが削除されたエレメントを呼出していないかどうかを確認しなければなりません (上記の状態コード D のエレメントに対するコンフリクトの解決の説明を参照)。

    必要な場合には、特定のファイルの削除を止めるために DELETE_OBSOLETE_FILES.COM を変更できます。

    DELETE_OBSOLETE_FILES.COM を実行するには、 DCL から次のように入力します。

    ```
    @OA$LIB:DELETE_OBSOLETE_FILES.COM "language"
    ```

    ただし、"language"はALL–IN–1システムの言語です。インストールされている各言語に対してプロシージャを実行しなければなりません。

14. CART はシステムをアップグレードした後でいつでも実行でき、すべてのコンフリクトが解決されたかどうかを確認できます。すでに処理されたすべてのエレメントには状態コード F が示されます。

6.7 CART 報告の状態コード

この付録では、各状態コードについて詳しく説明します。この説明は CART 詳細報告の先頭にも示されます。 CART 詳細報告を作成すると、これらの状態コードがシステムのカスタマイゼーションにどのように関係しているかも示されます。

表 6–2 状態コード説明

状態	説明
A	このエレメントは、ALL–IN–1 V3.2 の基本キットから削除されて提供されませんが、ベース・エレメントのデータ・ファイルには登録されています。カスタマイズされた対応するエレメントは存在しません。 ALL–IN–1 V3.2 の基本キットから削除されたエレメントのうち、カスタマイズされていないすべてのエレメントは状態コード A として報告されます。 必要な処置: 何も処置を行わなくても、ALL–IN–1 V3.2 は正常に動作しますが、これらのエレメントのエントリをベース・エレメント・ファイルから削除することが望まれます。このようにすれば、ベース・エレメントのデータ・ファイルはALL–IN–1 V3.2 と同一の状態になります。 カスタマイズ管理サブシステム以外でカスタマイズされたアプリケーションを確認し、これらのエレメントへ参照している箇所を削除する必要があります。 CART 修復プロシージャ: これらのエレメントをベース・エレメント・ファイルから削除します。
B	サイト変更ログにこのエレメントのエントリが登録されていて、開発領域に存在することが示されていますが、サイト変更ログに指定された場所からエレメントを検出できません。 必要な処置: エントリを確認し、削除するか、エレメントを指定されている場所に置きます (たとえば、ファイルを回復または再作成します)。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
C	(この状態コードは B と同じですが、サイト変更ログにはエレメントがライブ領域に存在することが示されています。) サイト変更ログにこのエレメントのエントリが登録されていて、ライブ領域に存在することが示されていますが、サイト変更ログに指定された場所からエレメントを検出できません。 必要な処置: エントリを確認し、削除するか、エレメントを指定された場所に置きます (たとえば、ファイルを回復または再作成します)。
D	カスタマイズされたこのエレメントは基本キットに存在しないエレメントを呼出しています。カスタマイズされたエレメントが使用しないか、ALL–IN–1 V3.2 で正常に動作するように変更しなければなりません。 必要な処置: このエレメントの内容を調べ、カスタマイズ管理を使用して必要な変更を行います (たとえば、不要な場合はエレメントを削除します。または存在しないエレメントに対する参照箇所を削除するためにエレメントを変更します)。 補足情報: 呼出される削除済みのエレメント名。
E	(この状態コードは D と同じですが、エレメントを呼出すのではなく、エレメントはメッセージ・シンボルを参照しています。) カスタマイズされたこのエレメントは基本キットからすでに削除されているメッセージ・シンボルを参照しています。カスタマイズされたエレメントを使用しないか、ALL–IN–1 V3.2 で正常に動作するように変更しなければなりません。 必要な処置: このエレメントの内容を調べ、カスタマイズ管理を使用して必要な変更を行います。 補足情報: 削除されたメッセージ・シンボルと、 V3.2 での新規メッセージ・シンボルが旧シンボルに置換された場合は、新規シンボルが示され、必要な処置を判断するのに役立ちます。
F	エレメントは前の CART の実行ですでに処置されています。 CART を再実行し、前の実行を無視する場合には、コンフリクト・チェック・メニュー (AM CC CP) の以前の実行結果のクリア (CP) オプションを使用します。このオプションはALL–IN–1 V3.2 でのみ使用できます。従って、アップグレードを実行する前にこのオプションを使用することはできません。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
G	同一名ですが別の領域 (たとえば、 JAPANESE ではなく SHARE) に存在するエレメントが基本キットからすでに削除されて提供されません。 必要な処置: 対応するベース・エレメントはALL–IN–1 V3.2 のキットに含まれていないため、カスタマイズしたこのエレメントによってシステムが正常に動作しない可能性があります。カスタマイズしたエレメントは不要なため、削除することもできます。このエレメントの内容を調べ、カスタマイズ管理を使用して必要な変更を行います。 補足情報: 削除されたベース・エレメント名。
H	(この状態コードは G と同じですが、エレメントは同一領域に存在します。) カスタマイズされたこのエレメントと同一名で、同一領域に存在するエレメントが基本キットから削除され提供されません。 必要な処置: カスタマイズされたエレメントがライブ・エレメントの場合には、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。その後、このエレメントのエントリをベース・エレメント・ファイルから削除し、ベース・エレメントをカスタマイズしたバージョンとしてではなく、サイト・エレメントとして登録します。 CART 修復プロシージャ: エレメントをライブ領域から消去後、ベース・エレメント・ファイルからエントリを削除し、エレメントをサイト・エレメントとして登録します。
I	注意: 基本キットとコンフリクトします。ALL–IN–1 V3.2 をアップグレードする前に、コンフリクトを解決しなければなりません。 カスタマイズしたこのエレメントと同一名の新規エレメントが基本キットに追加されています。ベース・エレメントは別の領域 (たとえば、 JAPANESE ではなく SHARE) に存在しますが、コンフリクトの原因となる可能性があります。 必要な処置: ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、カスタマイズ管理を使用し、既存のエレメントをテンプレートとして使用して別の名前で新しいエレメントを作成します。その後、カスタマイズした元のエレメントを削除します。
J	このコードは使用されません。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
K	注意: 基本キットとコンフリクトします。ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前にマニュアル操作でコンフリクトを解決しなければなりません。 (この状態コードは I と同じですが、エレメントは同一領域に存在するため、コンフリクトが発生します。) カスタマイズされたこのエレメントと同一名の新規エレメントがALL–IN–1 V3.2 に追加されています。ベース・エレメントはカスタマイズされたエレメントと同一領域に存在します。このため、カスタマイズされたエレメントは新規ベース・エレメントとコンフリクトします。 必要な処置: ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、カスタマイズ管理を使用してカスタマイズしたエレメントをライブ領域から消去します。 パッチまたはWPS–PLUS V4.1 を以前のALL–IN–1システムにインストールしていた場合には、エレメントがこの状態として報告される可能性があります (CART のデータ・ファイルにはこれらに関する情報が示されません)。しかし、ALL–IN–1 V3.2 のエレメントと同一名の新規エレメントを作成した場合にも、この状態のエレメントが報告されることがあります。 パッチまたはWPS–PLUS V4.1 で提供されるエレメントをカスタマイズしたためにコンフリクトが発生した場合には、ALL–IN–1 V3.2 で提供されるエレメントを比較し、カスタマイズ管理を使用して必要に応じて変更を行います。 新規ALL–IN–1 V3.2 エレメントと同一名の新規エレメントを作成したためにこのコンフリクトが発生した場合には、カスタマイズ管理を使用してエレメント名を変更します。
L	注意: ベース・エレメントに必須レベルの変更が含まれています。ALL–IN–1 V3.2 をインストールする前にマニュアル操作でコンフリクトを解決しなければなりません。 必須レベルの変更を含むベース・エレメントがカスタマイズしたエレメントと同一名ですが別の領域 (たとえば、 JAPANESE ではなく SHARE) に登録されています。 必要な処置: カスタマイズしたエレメントがライブ・エレメントの場合には、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。詳細報告に示される変更内容を確認し、カスタマイズしたバージョンに適用されるかどうかを確認します。 補足情報: 関連するベース・エレメントの詳細情報。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
M	注意: ベース・エレメントに必須レベルの変更が含まれています。ALL–IN–1 V3.2 をインストールする前に、マニュアル操作でコンフリクトを解決しなければなりません。 (この状態コードは L と同じですが、エレメントは同一領域に存在します。) 必須レベルの変更を含むベース・エレメントがカスタマイズされたこのエレメントと同一名であり、同一領域に存在します。エレメントの古いバージョンを使用してカスタマイズしたエレメントを作成しています。したがって、カスタマイズしたエレメントはALL–IN–1 V3.2 では正常に動作しません。たとえば、 DEFAULT フォームをカスタマイズした場合や、 MAILMEMO1 および MAILMEMO2 テンプレートをカスタマイズした場合には、これらのエレメントは状態コード M として報告されます。 必要な処置: カスタマイズしたエレメントがライブ・エレメントの場合には、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。 補足情報: 関連するベース・エレメントの詳細情報。
N	注意: ベース・エレメントに必須レベルの変更が含まれています。ALL–IN–1 V3.2 をインストールする前に、マニュアル操作でコンフリクトを解決しなければなりません。 (この状態コードは L と同じですが、ベース・エレメントは別の領域に存在します。) 必須レベルの変更を含むベース・エレメントが、カスタマイズされたこのエレメントと同一名ですが、別の領域に存在します。ベース・エレメントはALL–IN–1 V3.2 で現在の領域に変更されました。 ALL–IN–1のこのバージョンでは、状態コード "N"のエレメントが検出されることはほとんどありません。 必要な処置: カスタマイズしたエレメントがライブ・エレメントの場合には、ALL–IN–1 V3.2 にアップグレードする前に、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。 補足情報: 関連するベース・エレメントの詳細情報。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
O	(この状態コードは L と同じですが、必須レベルの変更は含まれません。) ベース・エレメントがカスタマイズされたこのエレメントと同一名ですが、別の領域 (たとえば、 JAPANESE ではなく SHARE) に存在します。この状態コードのエレメントは、独自の領域を使用するレイヤード・アプリケーションに関連している可能性があります。 必要な処置: アップグレード後、カスタマイズしたエレメントとベース・エレメントの相違点を印刷し (カスタマイズ管理メニューの印刷 (P) オプションを使用します)、相違点を確認後、カスタマイズ管理を使用して必要な変更を行います。 補足情報: 関連するベース要素の詳細情報。
P	(この状態コードは M と同じですが、必須レベルの変更は含まれません。) このエレメントはベース・エレメントをカスタマイズしたバージョンであり、そのエレメントはALL–IN–1 V3.2 で変更されています。カスタマイズの大部分はこの状態コードで報告されます。 必要な処置: アップグレード後、エレメントがライブ領域に存在する場合には、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。カスタマイズしたエレメントとベース・エレメントの相違点を印刷し (カスタマイズ管理メニューの印刷 (P) オプションを使用します)、相違点を確認後、必要な変更を行います。 CART 修復プロシージャ: ライブ領域からエレメントを消去します。 補足情報: 関連するベース・エレメントの詳細情報。
Q	(この状態コードは N と同じですが、ベース・エレメントに必須レベルの変更は含まれません。) ベース・エレメントがカスタマイズされたこのエレメントと同一名ですが、別の領域に存在します。ベース・エレメントはALL–IN–1 V3.2 で現在の領域に変更されました。たとえば、ベース・エレメントが言語に依存する領域から言語に依存しない領域に変更されました。 必要な処置: アップグレード後、エレメントがライブ領域に存在する場合には、カスタマイズ管理を使用してライブ領域から消去します。相違点を印刷し (カスタマイズ管理メニューの印刷 (P) オプションを使用します)、相違点を確認後、必要な変更を行います。 CART 修復プロシージャ: ライブ領域からエレメントを消去し、新しいエントリをサイト変更ログに追加します。 補足情報: 関連するベース・エレメントの詳細情報。

(次ページに続く)

表 6–2 (続き) 状態コード説明

状態	説明
R	エレメントは、サイト変更ログに登録されていますが、エレメント・タイプは現在サポートしてません。 必要な処置: ありません。このエレメントはALL–IN–1 V3.2 でコンフリクトを起こしません。ALL–IN–1 V3.2 で、このエレメント・タイプをサポートするには、そのための処理を行う必要があります。

A

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ディストリビューション・メディア

日本語 ALL–IN–1キットは、 CD-ROM もしくは統合ソフトウェア・ディストリビューション CD-ROM の一部として提供されます。 VAX のアップグレードについては、キットは、磁気テープおよび TK50 も使用可能です。同じ日本語 ALL–IN–1セーブセットは、すべてのメディアで提供されます。

日本語 ALL–IN–1 Web Interface 製品として、別の CD-ROM が提供されています。

A.1 CD-ROM 配布キット (VAX もしくは Alpha 導入)

このセクションの内容は、日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 CD-ROM および統合ソフトウェア・ディストリビューション CD-ROM の双方に適用されます。コンパクト・ディスク (CD-ROM) 上で、ベース・キットは、 A1LJA032 ディレクトリの中にあります。印刷可能文書は、 A1LJA032.DOCUMENTATION と呼ばれるディレクトリ内にあります。

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 CD-ROM については、読者向けのオンライン版解説書が、 DECW$BOOK ディレクトリ内で提供されています。

A1LJA032.KIT ディレクトリの中のベース・コンポーネント・セーブセットは以下です。

A.1 CD-ROM 配布キット (VAX もしくは Alpha 導入)

```
A1LJV032.A
A1LJV032.B (VAX のみで使用される)
A1LJV032.C (Alpha のみで使用される)
A1LJV032.D (VAX のみで使用される)
A1LJV032.E (Alpha のみで使用される)
A1LJV032.F (VAX のみで使用される)
A1LJV032.G (Alpha のみで使用される)
A1LJV032.H (VAX のみで使用される)
A1LJV032.I (Alpha のみで使用される)
A1LJV032.J
A1LJV032.K
A1LJV032.L
```

文書ディレクトリ、 A1LJA032.DOCUMENTATION は、以下の文書の ASCII(.TXT) およびポストスクリプト (.PS) 版を含みます。:

- 英語版ALL–IN–1 Installation: Guide, INST_GUIDE_1.TXT 及び INST_GUIDE_1.PS
- 英語版ALL–IN–1 Installation: Language and Market Supplement, INST_GUIDE_2.TXT 及び INST_GUIDE_2.PS
- 英語版 Read Me First letter, READ_ME_FIRST.TXT 及び READ_ME_FIRST.PS
- 英語版 Software Product Description (SPD), A1032_SPD.TXT 及び A1032_SPD.PS.
- 日本語ALL–IN–1インストレーション・ガイド、 JAP_INST_GUIDE_1.TXT 及び JAP_INST_GUIDE_1.PS
- 日本語の最初にお読みください、 JAP_READ_ME_FIRST.TXT 及び JAP_READ_ME_FIRST.PS
- 日本語ソフトウェア仕様書 (SPD)、 A1BJV032_SPD.TXT 及び A1BJV032_SPD.PS

CD-ROM も、自分自身のディレクトリ内に以下のソフトウェアを含んでいます。

- 日本語 VAX フォーム管理システム (FMS) (VAX のみ)
- 日本語 DEC FMS バージョン (Alpha のみ)
- Message Router (VAX のみ)

- Message Router VMSmail Gateway (VAX のみ)
- 日本語 DEC Notes

A.2 磁気テープおよびTK50キット(VAXアップグレード)

VAX アップグレードに関する日本語 ALL–IN–1ファイルは、 6250 bpi 磁気テープもしくは TK50 カートリッジで供給されます。二つのメディアがあり、一つはベース・コンポーネントでもう一つは言語およびマーケット・コンポーネントです。メディアは、以下のようにラベルされます。

- ベース・コンポーネント:

```
ALL-IN-1 V3.2 IOS BASE BIN media_type
(c) 1996 Japan DEC
```

media_typeは、ディストリビューション・メディアに対するコードです。

このメディアは、以下のベース・コンポーネント・セーブセットを含みます。

```
A1BJV032.A
A1BJV032.B (VAX のみで使用される)
A1BJV032.C (Alpha のみで使用される)
A1BJV032.D (VAX のみで使用される)
A1BJV032.E (Alpha のみで使用される)
A1BJV032.F (VAX のみで使用される)
A1BJV032.G (Alpha のみで使用される)
A1BJV032.H (VAX のみで使用される)
A1BJV032.I (Alpha のみで使用される)
A1BJV032.J
A1BJV032.K
A1BJV032.L
```

- 言語およびマーケット・コンポーネント:

```
ALL-IN-1 V3.2 IOS language BIN media_type
(c) 1996 Japan DEC
```

ここでmedia_typeは、ディストリビューション・メディアのコードで、languageは、導入している言語名です。例えば、 ENGLISH です。

このメディアは、言語、マーケットおよび方言 (もし提供されていれば) セーブセットを含みます。日本語 FMS も、言語およびマーケット・メディア上に含まれます。

各セーブセットは、独自のキット・バージョン識別子を持っています。例:

```
A1032BASEA.REV_nnn.
```

日本語 ALL–IN–1キットで提供される全ての他のソフトウェアは、別のテープで供給されます。

B

日本語 ALL–IN–1バージョン 3.2 ファイル及びディレクトリ

この付録は、ALL–IN–1ディレクトリ以外のディレクトリ内に導入されているファイルをリストします。

B.1 日本語ALL–IN–1キット内のファイル

全ての日本語 ALL–IN–1ディレクトリ及びファイル名の完全なリストに関しては、導入完了時に、各日本語 ALL–IN–1エリアに対し以下のコマンドを使用してください。:

```
$ DIR/SEC[a1dir...]*.*/out=a1dir.TXT
```

ここで`a1dir`とは、各エリアに対しトップ・レベル (例えば、 ALLIN1.DIR) です。

ファイル保護もしくは ACL を用いて問題を解決する必要がある場合、ファイルのリストは役立つ参考資料です。

B.2 ALL–IN–1以外のディレクトリに導入されるファイル

以下のリストは、日本語 ALL–IN–1ディレクトリ以外のディレクトリに導入されるファイルを示します。ここで、`language`は、ファイル名に含まれます。これは、例えば、 ENGLISH のように、導入された言語の名前です。

- SYS$COMMON:[SYSLIB]

B.2 ALL–IN–1以外のディレクトリに導入されるファイル

```
OA$AIDA_CSHR.EXE
OA$AIDA_DSSHR.EXE
OA$AIDA_GCMSHR.EXE
OA$AIDA_RTLSHR.EXE
OA$AIDA_SECSHR.EXE
OA$DSL$SHR.EXE
OAFC$CLIENT_SHR.EXE
OA$TMAECOMM.EXE

DDS$RMT_VAX.EXE (VAX のみ)
DDS$RMT_ALPHA.EXE  (Alpha のみ)
DPESHR.EXE
SYS$PROXY_SHR.EXE
OAFCDEF.H
OAFCDEF.L32
OAFCEXT.H
OAFCEXT.L32
OAFCEXT.R32
OAFC$LINK.OPT
PRXDEF.H

DDIF$READ_DX.EXE
DDIF$READ_MACWRITE.EXE
DDIF$READ_PICT.EXE
DDIF$READ_RTF.EXE
DDIF$READ_WORD5.EXE
DDIF$READ_WORDP.EXE
DDIF$READ_WPL.EXE
DDIF$WRITE_DX.EXE
DDIF$WRITE_MACWRITE.EXE
DDIF$WRITE_PICT.EXE
DDIF$WRITE_RTF.EXE
DDIF$WRITE_WORD5.EXE
DDIF$WRITE_WORDP.EXE
DDIF$WRITE_WPL.EXE
DTIF$READ_DIF.EXE
DTIF$READ_TCV.EXE
DTIF$READ_WK1.EXE
DTIF$READ_WK3.EXE
DTIF$WRITE_WK1.EXE
DTIF$WRITE_WK3.EXE
DDIF$READ_RNO.EXE (Alpha のみ)
```

MRAPPSHAR.EXE (VAX のみ)
MRAXPSHAR.EXE (Alpha のみ)

OA$LLVlanguage.EXE (複数言語システム上のみ)

OA$WPL_ALL_TV.EXE (WPS-PLUS をフルサポートする Alpha のみ)
OA$WPL_FDP_TV.EXE (WPS-PLUS をフルサポートしない Alpha のみ)

IMP$IMPSHR.EXE (VAX のみ)
IMP$IMPSHRP.EXE (VAX のみ)

XPORT.L32
XPORT.OLB
XPORT.REQ

- SYS$COMMON:[SYSEXE]

A1MAIL$CTI_BROKER.EXE
OA$AIDA_CLI.EXE
OA$AIDA_DDS.EXE
OA$AIDA_PROP_SHARING.EXE
OA$AIDA_SERVER.EXE
OA$AIDA_X500.EXE
OA$SCRIPT_SYMBIONT.EXE
OAFC$SERVER.EXE
OA$FORMATTER.EXE
TLNK$REMOTE.EXE

- SYS$COMMON:[SYSMSG]

XPORTMSG.EXE
OAFC$MESSAGES.OBJ
CNV_MSG.DAT
DPEMSG.EXE

MRAPPMSG.EXE (VAX のみ)
MRAXPMSG.EXE (Alpha のみ)

DDS$MSG_ALPHA.EXE (Alpha のみ)
DDS$MSG_VAX.EXE (VAX のみ)
DDS$RMT_VAX.EXE (VAX のみ)
DDS$RMT_ALPHA.EXE (Alpha のみ)

- SYS$COMMON:[SYS$STARTUP]

```
A1V32START.COM
OA$AIDA_START.COM
OAFC$STARTUP.COM
DDS$STARTUP.COM
```

- SYS$COMMON:[SYSMGR]

```
A1WPSPLUS_LOGIN.COM
```

- SYS$COMMON:[SYSHLP.EXAMPLES]

```
EXAMPLE_READ_DIF.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_DX.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_MACWRITE.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_PICT.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_RTF.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WK1.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WK3.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WORD5.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WORD5_FONTMAP.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WORDP.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_READ_WPL.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_DX.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_MACWRITE.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_PICT.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_RTF.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WK1.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WK3.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WORD5.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WORDP.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WORDP_V5_0.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WORDP_V5_1.CDA$OPTIONS
EXAMPLE_WRITE_WPL.CDA$OPTIONS
```

WPS–PLUSを省略時のエディタとして導入する場合、言語仕様辞書ファイルは、LCI$LEXICONS に導入されます。

索引

A

A1CONFIG.DAT 5–7
A1V32START.COM 5–5, 5–6, 5–7
日本語ALL–IN–1
　全ノード起動 5–5
AUTOGEN 1–23

C

CART 6–1
　インストレーション後の実行 5–12
CART 問題解決プロシージャ
　実行と変更 5–14

D

DCLTABLES
　置換 5–9
DDS$STARTUP
　サイト固有スタートアップ・プロシージャの追加 5–31
DEC FMS A–2
DEC Notes
　日本語ALL–IN–1の前起動 5–7
DELETE_OBSOLETE_FILES.COM
. 5–15

I

IVP
　エラー・メッセージ 4–5

O

OA$A1_CLUSTER_NODE
　A1CONFIG で定義 5–7
OA$DDS_PRIME 5–22
OA$MTI_AREA
　A1CONFIG で定義 5–7

S

SITELINK32.COM 5–12
SPD A–2
SYS$STARTUP:A1V32START.COM . . . 5–6

V

VAX FMS A–2
VAX クラスタ
　~ での VMSmail ゲートウェイの構成 5–21
VMSmail ゲートウェイ
　~ の構成 5–21

W

WPS–PLUS/VMS 文書
　ALL–IN–1への変換 5–32

ア

アプリケーション
　ヘルプ・モジュールの置換 5–17

イ

イメージ
　不足 5–10
　要求される 1–30
インストレーション
　中止 2–2
　所要時間 2–2
インストレーション後の作業
　ファイルの削除 5–10
インストレーション後の不要なファイルの削除 5–15
インストレーションの所要時間 2–2

エ

エラー
　致命的 1–43
　非致命的 1–44
エラー・メッセージ 4–1
エラー・メッセージ 4–5

オ

オプション・ソフトウェア
　導入の順序 1–15
オプション・ソフトウェアの導入
　順序の 1–15
オプション・ソフトウェアの導入順序 1–15

カ

カスタマイゼーション
　インストレーション後の確認 5–13
　統合のための日本語ALL–IN–1のリンク 5–17
　マイグレーション 5–12
カスタマイゼーションを統合するための日本語ALL–IN–1のリンク 5–17

キ

起動
　日本語ALL–IN–1 5–5

ク

グローバル・セクション (GBLSECTIONS) 1–22
グローバル・ページ (GBLPAGES) 1–22
グローバル・ページ・ファイル・セクション (GBLPAGFIL) 1–22

ケ

警告メッセージ 4–1
権限リストのエントリ
　インストレーション後の確認 5–18

コ

構成
　VMSmail ゲートウェイ 5–21
個人ライセンス
　リストを予約するために導入するアカウントを加える 1–11

サ

再コンパイル
　フォーム・ライブラリ 5–11
サイト固有スタートアップ・プロシージャ 5–6
　DDS$STARTUP 追加 5–31
再リンク
　推奨 5–12

シ

システム
　導入のための準備 1–45
　導入を準備する 1–46

システム・セットアップ・エラーを修正する 1–43
システム・ディスク
バックアップする 1–47
システム・パラメータ値
AUTOGEN で変更する 1–23

ス

スタートアップ・プロシージャ
サイト固有 5–6
サイト固有の変更 5–7
作成 5–6
全ての導入前チェック (PC) オプションを実行する 1–43

セ

製品公認キー 1–12

ソ

ソフトウェア・ライセンス 1–12
ソフトウェア・ライセンスを登録する 1–14
ソフトウェア仕様書 A–2

タ

ターゲット・ディスク
バックアップする 1–47

チ

チェックリスト
インストレーション後の作業 5–1
致命的エラー 1–43
致命的でないチェック
繰り返す 1–43
致命的でないチェックを繰り返す 1–43

テ

ディスク
バックアップする 1–47
ディスク・スペース要求 1–25
データ・ファイル
カスタマイゼーションの再適用 5–16

ト

導入
要求されるディスク・スペース 1–25
導入アカウント
導入中に要求されるクォータ 1–16
有効な権利識別子 1–16
ライセンス 1–11
導入イメージ
要求される 1–30
導入のためにシステムを準備する 1–45, 1–46
導入前
チェック 1–43

ハ

バックアップする 1–47

ヒ

PC オプション 1–43
必須ソフトウェア
ライセンス 1–14
非致命的エラー 1–44

フ

ファイルの削除
インストレーション後の作業 5–10
フォーム・ライブラリ
再コンパイル 5–11
不足しているイメージのインストール 5–10

へ

ヘルプ・モジュール
　アプリケーションのための置換 5–17

マ

マイグレーション
　カスタマイゼーション 5–12

メ

メッセージ
　エラー 4–1
　警告 4–1
メッセージ・ルータ
　設定 5–20
メッセージ・ルータ・メールボックス
　混在アーキテクチャ・クラスタのための変更 5–21
メッセージ・ルータ A–2
メッセージ・ルータ VMSmail ゲートウェイ A–3
メール・ディレクトリ
　同じクラスタのメッセージ・ルータのための設定 5–22
　クラスタ以外のメッセージ・ルータによる設定 5–27
　リモート使用のためのスタートアップ 5–31
メールボックス
　変更 5–21
　リモート日本語ALL–IN–1システムのための追加 5–20

ユ

ユーザー
　ログアウト 1–46

ラ

ライセンス
　登録する 1–12
　必須製品 1–14
ライセンス管理ファシリティ 1–12

リ

リモート
　~ の VMSmail ゲートウェイの構成 5–21
リモート・メール
　mta および x500 の使用に対する設定 5–18
　メッセージ・ルータの使用に対する設定 5–18
リモート・メール・ディレクトリ
　スタートアップ 5–31
リリース・ノート 1–6
リリース・ノート
　印刷する 1–6
　読む 1–6

ロ

ログイン
　非許容 1–46
論理名
　割り当てる 1–26

日本語ALL–IN–1インストレーション・ガイド

1997 年 7 月　発行

日本ディジタル イクイップメント株式会社

〒 167 東京都杉並区上荻 1-2-1

電話　(03)5349-7111 (大代表)

AA-PR9QB-TE